

高倉宮・曇華院跡第4次調査

平安京跡研究調査報告

第18輯

財團法人 古代學協會

昭和62年

序 文

平安時代の末近く、平安京左京三条四坊四町には以仁王の御所・高倉宮があった。王追捕のために押し寄せた檢非違使の軍勢の様子は『平家物語』にいきいきと語られている。この地が初めて歴史の表舞台に大きく登場した出来事であった。その後、室町時代から江戸時代を通じて、尼門跡寺院瑞雲山通玄寺曇華院が生まれ、周囲の町家のにぎわいとは対照的に静けさを保ちながら、営々とその歴史を刻んで来た。

この度、この地の東部に、建都千二百年記念事業の一環として、京都文化博物館(仮称)が建設されることとなった。本報告書はそれに先立つ埋蔵文化財の発掘調査の成果である。当協会はこれまでこの地を3度に亘って調査してきた。しかし、高倉宮及び曇華院の建物跡についてはなお確認できていないし、今回の調査でも検出することができなかった。高倉宮も曇華院も、われわれにとっては未だに幻のままである。微乱の著しい都心の調査の限界を痛感している。とはいうものの、平安時代の高倉小路の路面の一部や西側側溝を確認できたし、各時期を通じて興味深い資料を得るなど、多くの成果もあった。本報告が、この地の歴史の解明を含めて、いささかなりとも、斯界に貢献できれば、われわれにとっては望外の喜びである。

調査から報告書の刊行に至るまで、多方面から様々な御協力と御助言を戴いた。また、京都府は、京都文化博物館(仮称)の建築に際して、検出した高倉小路西側側溝を何らかの形で表示して、現地にその跡を留めたいというわれわれの希望を、快く受け入れて戴くことになった。併せて、衷心より感謝の意を表するものである。

昭和62年3月

財団法人古代学協会専務理事

平安博物館館長兼教授

角 田 文 衛

例 言

1. 本書は、昭和61年に財団法人古代学協会・平安博物館が、京都府の委託を受けて実施した、京都文化博物館(仮称)建設工事に伴う、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本書の執筆分担は下記の通りである。
 - 片岡 肇 第1章第1・2節
 - 植山 茂 第1章第3節、第2章第1節、第2章第3～5節の遺構、第3章
 - 山田 邦和 第2章第2節2、第2章第3節の瓦類以外の遺物、第2章第4節の遺物、第2章第6節1
 - 森下 英治 第2章第2節1
 - 寺升 初代 第2章第3節の瓦類、第2章第6節2
 - 川内由美子 第2章第5節1～3の土器類、第2章第5節5
 - 岡 佳子 第2章第5節1～3の陶磁器類
 編集は植山・山田が行った。
3. 挿図の縮尺は原則として、遺構は40分の1、遺物は3分の1である。
4. 本書で使用した座標の値は、平面直角座標系VIによる。方位は座標北、レベルは海拔標高である。
5. 平安京の条坊に関する座標値のデータは、(財)京都市埋蔵文化財研究所より提供を受けた。

目 次

序 文	i
例 言	ii
第1章 調査地の環境と調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査地とその周辺	2
第3節 調査の経過	8
第2章 遺構と遺物	11
第1節 概 要	11
第2節 平安時代以前	16
第3節 平安時代	18
第4節 鎌倉・室町時代	51
第5節 江戸時代	66
第6節 その他の主要遺物	84
第3章 ま と め	102

图 版 目 次

- | | |
|--|--|
| <p>图版第1 调查前全景·北区
 图版第2 南区完掘状态
 图版第3 南区东部完掘状态
 图版第4 溝15·道路状遺構
 图版第5 溝15, 馬頭骨出土状态
 图版第6 井戸12
 图版第7 井戸12遺物出土状态·
 土坑68·溝12
 图版第8 溝7 遺物出土状态
 图版第9 溝7 完掘状态
 图版第10 溝1 検出状态
 图版第11 溝1 南部
 图版第12 溝1 北部完掘状态
 图版第13 溝1 北端部
 图版第14 溝10
 图版第15 石室1
 图版第16 石室2
 图版第17 土坑80検出状态·
 土坑22遺物出土状态
 图版第18 井戸11·</p> | <p>图版第19 井戸8
 图版第20 土坑201·南区南東部
 图版第21 I-10·11区遺構検出状态
 图版第22 土坑3
 图版第23 土坑3 断面·土坑1
 图版第24 土坑1·2, 溝2, 土坑40
 图版第25 石垣1·溝6·8
 图版第26 井戸15·土坑37
 图版第27 P·Q-9·10区遺構
 検出状态·互組遺構
 图版第28 建物遺構
 图版第29 中国製白磁類
 图版第30 土坑3 出土陶磁器類
 图版第31 土坑3 出土陶磁器類
 图版第32 土坑3 出土陶磁器類·
 土坑32出土陶磁器類
 图版第33 溝6 出土陶磁器類
 图版第34 土人形
 图版第35 溝8 出土小判</p> |
|--|--|

挿 図 目 次

第1図 調査地位位置図1 …… 2	第40図 土坑85出土遺物実測図1 …… 46
第2図 調査地位位置図2 …… 7	第41図 土坑85出土遺物実測図2 …… 47
第3図 土層断面図 …… 8・9	第42図 土坑150出土遺物実測図 …… 47
第4図 時期別遺構図1 …… 12	第43図 土坑166出土遺物実測図 …… 48
第5図 時期別遺構図2 …… 12	第44図 土坑76出土遺物実測図 …… 48
第6図 時期別遺構図3 …… 15	第45図 土坑21出土遺物実測図 …… 48
第7図 検出遺構全図 …… (折込)13・14	第46図 土坑100出土遺物実測図 …… 49
第8図 縄文・弥生土器実測図 …… 16	第47図 土坑80遺構実測図 …… 49
第9図 石器実測図 …… 17	第48図 平安時代包含層 出土遺物実測図1 …… 50
第10図 土坑149出土須恵器実測図 …… 18	第49図 平安時代包含層 出土遺物実測図2 …… 50
第11図 溝15・高倉小路断面図 …… 18	第50図 土坑96出土遺物実測図 …… 51
第12図 溝15出土遺物実測図 …… 19	第51図 土坑43出土遺物実測図 …… 52
第13図 高倉小路路面出土遺物実測図 …… 20	第52図 溝1出土遺物実測図1 …… 54
第14図 井戸12遺構実測図 …… 20	第53図 溝1出土遺物実測図2 …… 55
第15図 井戸12出土遺物実測図1 …… 22	第54図 溝10出土遺物実測図 …… 55
第16図 井戸12出土遺物実測図2 …… 23	第55図 井戸11遺構実測図 …… 56
第17図 井戸12出土遺物実測図3 …… 24	第56図 井戸8遺構実測図 …… 57
第18図 井戸12出土遺物実測図4 …… 25	第57図 井戸8出土遺物実測図 …… 58
第19図 井戸12出土遺物実測図5 …… 25	第58図 石室1遺構実測図 …… 58
第20図 井戸12出土遺物実測図6 …… 26	第59図 石室2遺構実測図 …… 59
第21図 井戸10出土遺物実測図 …… 27	第60図 石室1・2出土遺物実測図 …… 59
第22図 土坑68・69出土遺物実測図1 …… 28	第61図 土坑201出土遺物実測図1 …… 61
第23図 土坑68・69出土遺物実測図2 …… 29	第62図 土坑201出土遺物実測図2 …… 62
第24図 土坑68・69出土遺物実測図3 …… 30	第63図 土坑201出土遺物実測図3 …… 63
第25図 土坑68・69出土遺物実測図4 …… 30	第64図 土坑201出土遺物実測図4 …… 64
第26図 土坑68・69出土遺物実測図5 …… 32	第65図 土坑201出土遺物実測図5 …… 65
第27図 土坑68・69出土遺物実測図6 …… 33	第66図 土坑154出土遺物実測図 …… 65
第28図 土坑68・69出土遺物実測図7 …… 34	第67図 土坑3出土遺物実測図1 …… 66
第29図 土坑68・69出土遺物実測図8 …… 35	第68図 土坑3出土遺物実測図2 …… 68
第30図 土坑68・69出土遺物実測図9 …… 36	第69図 土坑3出土遺物実測図3 …… 71
第31図 土坑68・69出土遺物実測図10 …… 37	第70図 土坑32出土遺物実測図1 …… 73
第32図 土坑68・69出土遺物実測図11 …… 38	第71図 土坑32出土遺物実測図2 …… 74
第33図 土坑68・69出土遺物実測図12 …… 39	第72図 土坑32出土遺物実測図3 …… 75
第34図 土坑68・69出土遺物実測図13 …… 40	第73図 溝6出土遺物実測図1 …… 77
第35図 溝7遺構実測図 …… 41	第74図 溝6出土遺物実測図2 …… 79
第36図 溝7出土遺物実測図1 …… 42	第75図 土人形実測図 …… 81
第37図 溝7出土遺物実測図2 …… 43	第76図 土製小仏実測図 …… 83
第38図 溝7出土遺物実測図3 …… 44	
第39図 溝12出土遺物実測図 …… 45	

第77图	包含层他出土遺物 実測图1(土器・陶器1) …… 85	第84图	包含层他出土遺物 実測图8(軒丸瓦4) …… 93
第78图	包含层他出土遺物 実測图2(土器・陶器2) …… 86	第85图	包含层他出土遺物 実測图9(軒平瓦1) …… 95
第79图	包含层他出土遺物 実測图3(白磁) …… 87	第86图	包含层他出土遺物 実測图10(軒平瓦2) …… 96
第80图	包含层他出土遺物 実測图4(青磁他) …… 88	第87图	包含层他出土遺物 実測图11(軒平瓦3) …… 97
第81图	包含层他出土遺物 実測图5(軒丸瓦1) …… 89	第88图	包含层他出土遺物 実測图12(軒平瓦4) …… 98
第82图	包含层他出土遺物 実測图6(軒丸瓦2) …… 91	第89图	包含层他出土遺物 実測图13(軒平瓦5) …… 99
第83图	包含层他出土遺物 実測图7(軒丸瓦3) …… 92	第90图	包含层他出土遺物 実測图14(軒平瓦6) …… 101

表 目 次

第1表	井戸12出土磁器類 挿図・図版番号対照表 …… 25	第2表	土坑3出土土人形一覽表 …… 82
		第3表	溝6出土土人形一覽表… … 83

第1章 調査地の環境と調査の経過

第1節 調査に至る経過

昭和55年に京都府知事の要請で結成された京都文化懇談会は、今後の府の文化行政の望ましいあるべき方向について討議を重ねて、昭和56年10月にその結果を提言としてまとめられた。これを受けて、京都府では、昭和59年に迎える建都1200年の記念事業の一環として、京都文化博物館(仮称)の建設を計画された。そして京都市中京区高倉通姉小路下ル東片町と同区東洞院姉小路下ル益華院前町にまたがる約1900㎡の土地を予定地とされた。その後計画が進み、この地に地上7階地下1階の博物館の新館を建設されることになり、昭和61年10月に建築工事に着手することが決定された。本調査はその京都文化博物館(仮称)の新館建設予定地に伴う発掘調査である。

昭和61年3月、京都府文化芸術室は京都文化博物館(仮称)の新館建設予定地の埋蔵文化財発掘調査を、京都府文化財保護課を通じて財団法人古代学協会・平安博物館に依頼された。当該地を含む1町四方は、平安京の左京三条四坊四町にあたり、平安時代の末には以仁王の御所高倉宮が、また中世以降は尼門跡寺瑞雲山通玄寺益華院が営まれていた場所として知られている。財団法人古代学協会・平安博物館では、平安京高倉宮・益華院跡としてこれまですでに3箇所が発掘調査を行ってきた経過もあって、この依頼を受諾することにした。その後、文化財保護課の指導を得ながら、調査の期間・方法・費用などについて協議を重ね、双方合意に達したので京都府文化芸術室と財団法人古代学協会の間で契約を締結した。

発掘調査は平安博物館研究部考古学第4研究室が担当し、片岡肇助教授を調査主任、植山茂助手と山田邦和助手を調査員として、昭和61年6月25日から10月18日まで実施した。

調査期間中、調査補助員として、井口恵恵・池上元子・川内由美子・川上洋一・小山知佐子・酒井彰子・柴田潮音・出口瑞鳥・西尾智樹・西村健司・西村典子・野口均・船戸裕子・山浦修の諸氏の参加を得た。また作業員として尼崎市の中山組の皆さんにお願いした。同組の中山光男氏には種々御協力を頂いた。

調査終了後、青木紀子・飯田美佐子・井口恵恵・池上元子・今中智恵子・川内由美子・絹川真由美・小山知佐子・坂田孝彦・佐長正子・柴田潮音・高井和子・千喜良淳・堤田リエ・出口瑞鳥・手塚貴子・寺升初代・中島陽子・西尾智樹・西村健司・西村典子・野口均・久末美貴子・船戸裕子・三浦千鶴・山浦修の諸氏の手を煩わせて、遺物整理・実測など報告書の作成の準備作業を行った。明記して、合わせて感謝の意を表したい。

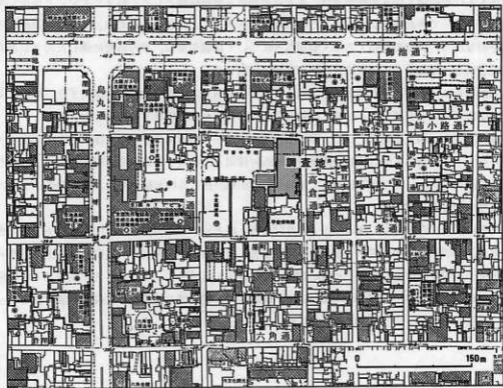
第2節 調査地とその周辺

1. 平安京左京三条四坊四町と曇華院

調査地は、平安京の条坊では左京三条四坊四町にあたる。三条大路・東洞院大路・姉小路・高倉小路の四つの通りに囲まれた1町四方である。

三条四坊四町が初めて文献に登場するのは10世紀の中頃で、この町の西側4分の1の土地の売買の記録としてである。そこには間口3間の檜皮葺の家屋1宇、やはり間口3間の車宿1宇、門屋1宇が建っていた。

11世紀の後葉になって、三条四坊四町には陽明門院禎子内親王の三条東洞院御所があったらしい。これは権中納言藤原能季の別邸を、陽明門院が借り受けていたようで、承暦元年(1077)9月16日に焼失している。その後しばらくのこの地の変遷は明らかではないが、12世紀の後半には権大納言藤原季成の邸宅となり、さらにその子の権中納言藤原公光に受け継がれた。公光の妹成子は後白河天皇の寵愛を受けて以仁王や式子内親王ら6人の皇子女を産み、ここで育てたようである。のちにこの邸宅は以仁王の御所となり、東側の高倉小路にちなんで高倉宮と呼ばれた。治承四年(1180)に以仁王が下した平家追討の令旨が発覚し、王の逮捕のために檢非違使の源兼綱と源



第1図 調査地位置図1

光長に率いられた軍勢が高倉宮を襲うにおよんで、この地は大きく歴史上に登場する。その時のありさまは、『平家物語』の「信連合戦」に詳しい。

鎌倉時代になると、建保元年(1213)一月十五日の大火についての『明月記』の記載で三条四坊四町には西から右近衛中将藤原定家、故大膳大夫平兼忠の遺邸、さらに入道三品源頼朝の邸宅があったことがわかる程度で、室町時代になって瑞雲山通玄寺が創建されるまでほとんど記録がない。ただ、『京都坊目誌』によると、この地には光明峰寺殿藤原道家の建立による道光院という寺があって、通玄寺が創建される時に他所へ移されたという¹⁾。しかしその典拠が示されておらず、他にこれを裏づける資料も見当たらない。

瑞雲山通玄寺は順徳天皇の皇孫四辻宮尊雅王の娘智泉聖通が、室町幕府の奨励を受けて14世紀末近くに創建したようである。智泉尼が隠居して住んだ通玄寺内の庵のことを曇華院と呼んだが、のちに寺全体を曇華院と称するようになったという。尼五山の一つに列せられた通玄寺曇華院は、室町時代から江戸時代を通じて、幾度か火災に遭いながら、そのつど再建され、代々の住持に皇女を迎え、尼門跡寺院としての格式を保ってきた。しかし、元治元年(1864)の蛤御門の変の際の大火で焼失したまま、明治5年(1872)に嵯峨野に移転して、この地での歴史を終えた。

左京三条四坊四町と曇華院の歴史については、角田文衛・鹿谷寿西氏²⁾ならびに芝野康之氏³⁾の論考に詳しいので、これ以上は繰り返さない。ここでは江戸時代、特に17～18世紀の曇華院の周辺について、当時の幾つかの案内書をもとに触れるにとどめる⁴⁾。

2. 江戸時代の曇華院とその界限

1) 通りについて

平安京で左京三条四坊四町と呼ばれたこの1町四方を取り囲む通りは、江戸時代になっても、そのまま呼び継がれ、三条通・高倉通・姉小路通・東洞院通であった。ただ、天正十八年(1590)に豊臣秀吉が町割りの整理を行った際に、この近辺でも高倉通と東洞院通の間に新しく南北の間之町通を姉小路通まで開き、高倉通と柳馬場通(平安京の万里小路)の間に堺町通を通したことが異なる。また、姉小路通はいつの頃からか間之町通と東洞院通の間が途切れており、この間が再び開通するのは宝永五年(1708)の大火の後である。さらに、『寛永十四年洛中絵図』(1637)を細かく見ると、三条東洞院の交差点で三条通が、姉小路高倉・三条高倉・六角高倉の各交差点で高倉通がそれぞれ行き違いになっていることに気付く。これらのうち、三条東洞院・姉小路高倉・六角高倉の各交差点では現在もこの絵図とほぼ同様に行き違っているが、三条高倉では高倉通は真っすぐ通っている(第1図)。17世紀初頭に作成された『元禄京都洛中洛外大絵図』⁵⁾までは通りの行き違いが認められるが、その後はそれを判断できる詳しい絵図がない。おそらく姉小路通と三条通の間の高倉通は、江戸時代の前半には少なくとも今よりは数m東側に寄っていたものが、後半になって付け替えられたものと考えられる⁶⁾。このことは曇華院の堀の存在を考える際に、意外に重要な意味を持つようである。

4 第2節 調査地とその周辺

2) 曇華院について

当該の1町四方の大半を占める曇華院は、絵図や案内書には曇華院御屋敷・曇華院取・曇華院宮様などと記されているが、その実態はほとんどわからない。三条通側と東洞院通側の一部に町屋があったので、曇華院が1町四方全体を占めていたわけではない。少なくとも17世紀初頭までは、高倉通と姉小路通に接して、L字状にかなり幅の広い堀があった(『寛永十四年洛中絵図』・『元禄京都洛中洛外大絵図』)。この堀について各案内書類には、高倉通の西側にあって土手には藪が生い茂っているとするもの(A・B)、間之町通が姉小路通曇華院の堀端までと記すもの(C)、「高倉三条上ルほりばた」と地名として示すもの(G)、「木之下町 此町の西高倉の辻俗に堀端と云則曇華院宮様御築地の御堀也」と記すもの(J)などがある。少なくとも18世紀の半ば過ぎまであったことがわかるが、その後の存在については確認できない⁷⁾。

曇華院の建物についてはほとんど記録がない。わずかに方丈が西向きであったと記すものが認められる(I)に過ぎず、規模などはもちろんわからない。門は東洞院通側にあった。『寛永十四年洛中絵図』には明確に描かれている。17世紀の半ば過ぎ頃までの古地図にはいずれも東洞院側に門が開いていたことが示されているが、それ以後の古地図には認められない。しかし、18世紀になってからの案内書に門の存在を記すものがある(I・J)。18世紀の半ば過ぎには高倉通側に「曇華院宮様の御長屋(J)」があった。これについては『京都坊目誌』上巻の東片町の項に「明治五年まで西側に曇華院長屋と称する有。下士の居住せる所也」とある⁸⁾。

曇華院の所在するこの1町四方は、18世紀の終わり近くには「初音社」と呼ばれていたようである(K)。これより20年余り前に「高倉姉小路'角曇華院'東北有、林人呼云'鶯'森」(I)と記されている鶯の森と無関係ではなからう。さらに言うならば、上に触れた高倉通側の堀端の土手の藪(A・B)に結び付けることもできそうである。堀端の土手の樹々が生い茂って森となり、鶯が来て春を告げるようになって、いつの頃からか初音の森と呼ばれるようになったのであろう。明治の初期、この地を含む町組に小学校が作られ、かつての初音の森にちなんで初音小学校と名付けられ、のちに曇華院の跡地に移転してきた。その後、初音中学校となって、今にその名を残している。もちろんすでに森の名残は何も無い。

3) 曇華院の界限

曇華院を取り巻く四つの通りが高倉通・姉小路通・東洞院通・三条通であることはすでに述べたが、これらの通りを挟んで京都特有のいわゆる両側町が形成されており、それぞれ東片町・木之下町・曇華院前町・藁屋町と呼ばれた。静かな曇華院のたたずまいとは別に、これらの町屋にはさまざまな人々が生活していた。

調査地を含む東片町は古くは片原町・東片原町とも呼ばれ、高倉通の西側が曇華院であったために事実上は片側町であった。17世紀の後半には、「荷つくり・わた子や・あら物や・ひなわや」(B・E)や、「ほそ引き・つるへ繩・いせみやげ」を売る店などがあり、堺海乗坊という目医者も住んでいた(C)。東片町の北、高倉姉小路から高倉御池までは亀甲屋町と呼ばれた。この町には17世紀の後半に、四度匂当の幾田匂当(C)、紅花仲買の伊勢屋(D)が住んでいた。天

明八年(1788)、姉小路高倉西入ルの住人近江屋五兵衛という人物が何かの科で土地・建物を没収されるという事件があった⁹⁾が、そのうちの2箇所が当町にあった。さらにこの事件に係わりあって捕らえられ、のちに釈放された近江屋安右衛門がこの町に住んでいた¹⁰⁾。逆に東片町の南、高倉三条から高倉六角までは丸屋町と呼ばれた。この町には17世紀の後半に、「かうの酒屋」(B・E)や万葉酒という名酒屋(C)があり、諸国買物問屋や絹問屋(D)が店を出し、備書講説の浅井淋庵(C)が住んでいた。18世紀の初めには、このうち諸国買物問屋(G)と浅井淋庵(F)は引き続きその名が見られ、新たに狂言師の岡本忠兵衛がこの町に住む。さらに18世紀の中頃には、長崎糸割符商や両替屋(H)があった。

曇華院の北側、姉小路間之町から高倉通を越えて姉小路柳馬場あたりまでを、木之下町と呼ぶ。古くは若狭屋町とも呼ばれた。17世紀の後半には、「ろくろなわ・ほそ引なわ・なわノるい」を商う店があった(B・E)。上に挙げた東片町を含めて、このあたりには縄を売る店が多かったようである。「元禄京都洛中洛外大絵図」(1700年頃)によれば、この町の間之町通と高倉通の真ん中あたりの北側に延命院という寺が記されている。これは元三大師順拝十八ヶ所の第十番の「えんめい院」(G)のことであろう。ただ、この「えんめい院」の所在が「高倉三条上ルほりばた」とあり、通常の地名表記に従えば、東片町にあったことになる。しかし、18世紀の末近くに「不動堂 姉小路東洞院の東にあり延命院と号す本尊不動尊は伝教大師の作三尺許…」(K)とあるので、木之下町にあったとすべきであろう。さらに「京都坊目誌」上巻の曇華院前ノ町の項に「東洞院通西側北部の少地に不動堂延命院あり。真言宗にして本尊不動明王ノ像を安置す。維新の廢庵寺となる」とある¹¹⁾。移転したのであろうか。姉小路東洞院から西側は車屋町と呼ばれた。その名のとおり車借が多かったようである(A・B・C)。またこの町には金座支配の後藤庄三郎の家が江戸時代を通じてあった(A・B・C・E・F・J)。その外には丁子という風呂屋(C)、精進肴刺物屋(C・F)があり、2軒の長崎糸割符商と1軒の絹問屋が住んでいた(D)。18世紀初頭には「ほうけの地藏」という名地藏があった(G)。

曇華院の西側、東洞院姉小路から東洞院三条までは曇華院前町という。曇華院殿町・曇華殿町とも呼ばれた。当町に曇華院があったことは言うまでもない。門が東洞院通に開いていたこともすでに触れた。17世紀の末近くには因果(源兵衛)という撞木屋があり(B・C・E)、18世紀初頭には若山藤三郎という狂言師が住み(F)、18世紀の中頃には長崎糸割符商や両替屋があった。19世紀の初めには番肆村上勘兵衛がこの町の西側に移って来た¹²⁾。東洞院姉小路より御池通までを笹屋町という。17世紀後半には、昔から言い伝えのある姉小路の針屋(B)、箔問屋(C)、紅花仲買問屋・両替屋(D)、10軒の絹問屋(D)があった。珍しいところでは上方御代官衆の1人、大和新庄藩の森本總兵衛がこの町に住んでいた(C)。18世紀初めには出羽庄内藩酒井氏御用達の板倉三左衛門(G)、中頃には両替屋の万屋久兵衛(H)の名が見える。笹屋町の半町東側の間之町通は綿屋町と呼ばれた。ここには17世紀末から18世紀初頭にかけて、塩風呂があった。東洞院三条から南へ六角通までを三文字町という。17世紀の末には菓子所の鶴屋や江戸本町四丁目呉服屋(C)、絹問屋(D)があった。鶴屋は18世紀の初め(F)、江戸本町四丁目呉服

棚は中頃まで(G・H)認められる。

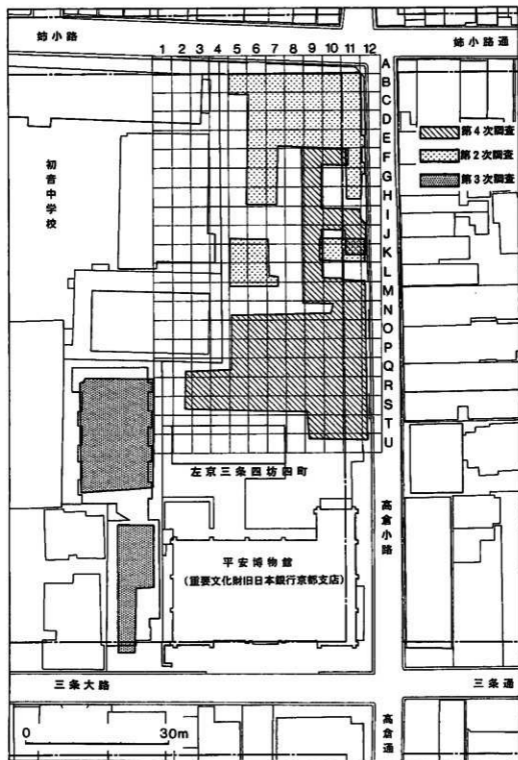
曇華院の南側、三条東洞院から三条高倉までは菱屋町と呼ばれた。17世紀の後半には、「かわたび・板から紙や」(B)、「からかみや・太刀や・高宮じま・つみわたや」(B・E)、「むしりわた」(E)などがあつた。これと重複するのかもしれないが、同じ頃4軒の紙屋があり、諸国買物問屋と江戸本町四丁目塗物棚、さらに6軒の諸国絹問屋もあつた(D)。このうち諸国買物問屋は18世紀の初めにも認められる(G)。18世紀の中頃には「長生」という酒を売る名酒屋のほか、江戸呉服店と2軒の両替屋、蔵紙直買頭分が1軒、奉書美濃紙を扱う2軒の紙問屋などがあつた(H)。菱屋町は紙屋の多い所だったようである。その西側、三条東洞院から三条烏丸までを梅忠町といった。この町は菱屋町と同種の店が比較的多い。17世紀の後半には「太刀や・つみわたや」(B・E)、「高宮じま」(B・C・E)、「かわたび」(B)、越前福井藩松平氏御用達の呉服屋(C・E)で袱紗屋(B・C)でもあつた塩瀬という店、両替屋と2軒の紙屋(D)があつた。また17世紀の末近く(C)に名前の見られる團基指南の扇屋庄兵衛は18世紀初頭(F)にも認められる。18世紀の中頃には長崎糸割符商と3人の蔵紙直買頭分が住んでいた(H)。菱屋町の東側、三条高倉から三条御馬場までを樹屋町という。ここには17世紀の後半に菱屋町と同じく「むしりわた」(B・E)、米沢藩上杉家兵服所の米沢屋(C)、諸国絹問屋(D)があり、さらに18世紀初頭にかけて大師流の筆師の前川丹後が住んでいた(C・F)。18世紀中頃には両替屋があつた(H)。

東片町や木之下町に縄を売る店が多く、車屋町に車借、笹屋町や菱屋町に絹問屋、菱屋町と梅忠町に紙屋が多いなど特徴もあつたが、町ごとの様相はさまざまであつた。江戸時代を通じて、曇華院の周辺の町々には、思ひのほか多種多様な職種の人々が住んでおり、活気に溢れていたようである。そんな中で、鶯の声、鐘の音、経を読む尼僧の声が聞こえるほかは、曇華院だけが静寂の世界であつたろうか。それとも、境内で戯れる子供達の声が、かまびすしく聞こえていたのであらうか。

4) 高倉宮・曇華院跡の調査

元治元年(1864)、始御門の変の際の大火で、曇華院はもちろん、このあたりはほとんど灰燼に帰した。再建されないうままに明治5年(1872)曇華院が鐵嶺野に移された。同年、京都府が三条東洞院にわが国最初の公立図書館である集書院を開設し、13年には集書院の跡に西京郵便役所が、26年姉小路側に初音小学校が移転して来、35年には中京郵便局の前身の京都郵便局、39年には三条高倉に日本銀行京都支店が新築されるなど、かつて高倉宮であり、曇華院であつたこの地はその様相を一変した。

近年になって、この地はまた次第に姿を変えつつある。外壁保存で注目をあびた中京郵便局の新局舎の建設、平安駐車場の上屋の建設、高倉アーバンライフの建設に続いて、今回の京都文化博物館(仮称)の建設である。こうして変貌するたびに我々はその工事に伴う事前調査として、発掘を行う機会を得てきた。我々はこの1町四方内での調査を、高倉宮・曇華院跡の一連の調査として扱え、中京郵便局(昭和51年～52年)を第1次調査¹⁾とし、平安駐車場(昭和52年)を第2



第2図 調査地位置図2

8 第3節 調査の経過

次調査¹⁴⁾、高倉アーバンライフ(昭和56年)を第3次調査¹⁵⁾としてきた。今回の調査を高倉宮・
曇華院跡第4次調査とする所以である。

今回の調査地の地籍は、京都市中京区高倉通姉小路下ル東片町623番地、同623番地の2、お
よび同区東洞院姉小路下ル曇華院前町706番地、同706番地の1である。

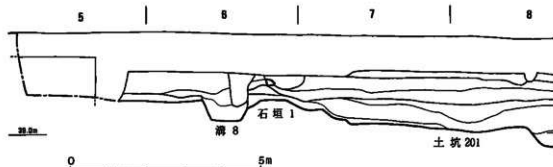
第3節 調査の経過

調査地の建築予定部分は、南北約70m、東西約30mの範囲である。このうち、北端部と西寄りの、
初音中学校に近い部分は昭和52年に調査を行っていることから、今回は南半の既存木造建物
などがあった部分に重点をおき、北半の駐車場であった部分については幅4mのトレンチを入れ
て前回の未掘部分を補うことにした(第2図)。

調査の当初は期日の関係から、平安博物館本館に隣接していた旧ボイラー室とその煙突などの
解体工事と併行したため、まず北側のトレンチ調査から開始した。トレンチは、防火用のコンク
リート貯水槽と前回調査時の「ろ区」トレンチの位置を避けて設定したため、E字状の配置にな
った。このトレンチ部分は、整理の都合から「北区」と呼ぶ。

解体工事の終了に引き続き、南半部の掘削を開始した。この部分は可能な限り、発掘区を広げ、
「南区」と呼んだ。南区は現地表面から平均1.2mほどの深さまでは、以前の状況や北区トレンチ
の様子をみて、重機による掘削を行った。この段階では、旧日本銀行時代かと思われるコンクリ
ートの基礎が、かなり遺存していた。

なお、掘削に前後して調査地の基準点測量を、新日本航測株式会社に依頼して行った。そして
これに従って調査地全域を覆うように、国土座標に基づいた4m方眼の網を設定した。北西隅を
原点(X=-110171.00m, Y=-21462.00m)にして、4mごとに、北から南へA~U区、西から
東に1~12区とした。4m四方の各区画はA-1区, A-2区…のように表す。今回の実際の発
掘区は、F~T区, 2~12区にかかる。



第3図 土層断面図

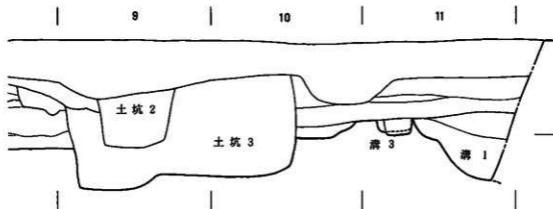
1. 北区の調査

北区では未掘箇所との調査とともに、前回検出した高倉小路に関すると思われる溝の確認を目的とした。南北の9区では、表土下1m程度で、幕末の大火後の始末とみられる焼瓦を大量に投棄した土坑が2箇所検出された。その下層もトレンチ幅を超える規模の土坑(土坑3)が検出されたが、危険防止のため部分的に掘り下げて規模の確認を行うにとどめた。トレンチ北端部は、予想以上に貯水槽の掘り方が大きく、辛うじて前回検出の建築址の続きと、東北隅で溝状遺構(溝9)を検出した程度であった。I区の東西トレンチでは中ほどに、大きな貯水槽のような、壁面の傾斜した土坑が検出された。この土坑は厚く粘土を貼って表面を漆喰で固めており、明治時代頃のものかと思われる。I-11区は前回の調査で検出された、高倉小路側溝かと推定された溝の延長上に当たるが、この部分では溝が検出されなかったため、前回のトレンチを一部再掘して溝の途切れる部分を確認した(J・K-11区)。M区の東西トレンチ東端では、その溝の延長(溝1)を検出した。

2. 南区の調査

南区では、まず全域から江戸時代の遺構が検出されたが、特に9・10区で、北区で検出した土坑3の延長と、その埋土に掘り込まれた焼瓦の瓦溜を検出した。また、西寄りの4・5区で幅の広い江戸時代の溝(溝6)を検出した。この二つの遺構は規模が大きく、地山まで深く掘り込んでいるため、江戸時代以前の遺構の存在している部分は、西端部、中央部、東端部の3箇所に分断されていた。

西端部では、東西方向の平安時代の溝(溝7)と、室町時代の井戸(井戸11)を検出した。中央部では、北寄りに室町時代の土取り穴とみられる大きな土坑(土坑201)があり、その他の部分でも各時期の遺構がかなり重複して検出された。東端部でも、各時期の遺構がかなり重複していたが、敷地の東端にあたるためか、後世とくに近代の削平をあまり受けていなかった。ここでは



10 第3節 調査の経過

溝1の延長のほか、南北方向の平安時代の溝を2条検出した。このうち、T-11区の溝(溝15)については平安時代の高倉小路側溝の可能性があったため、発掘区の東南隅をごく一部ではあるがI2区まで拡張して路面を確認した。

3. 層 序

層序は大まかにみると、まず現代の整地層(第1層)が50~70cmあり、江戸時代の遺物包含層(第2層)が30cmから1mほど、室町時代の遺物包含層(第3層)が20~30cmで、地山に至るのが基本である。ただし、第2層が地山にまでおよんでいる箇所も多く、各時期を面的に捉えるのは困難であった。第3層は北区の北端あたりでは茶褐色のやや砂質の土であるが、南区では暗褐色の砂質土である。地山は、標高39mほどから下は砂礫層、上は黄褐色の粘質土層である。

第2章 遺構と遺物

第1節 概 要

今回の調査では、平安京造営以前から現代までの各時代の遺構・遺物が検出されたが、個々の主要遺構・遺物についての記述は次節以下に譲り、ここでは大まかに平安、鎌倉・室町、江戸の3時期について、遺構・遺物の在り方を先に概観する。

1. 平安時代(第4図)

後世の削平などを受けて、遺構の遺存状態はあまりよくなかったが、東端部の11区と南区で溝・井戸・土坑などを検出した。特に11区ではI～T区まで、ある程度の削平を受けてはいるが、地山が南北の帯状にやや高く残っており、この位置に「四町」の敷地と高倉小路を画する築地の存在が想定できる状況であった。南北方向の溝13と溝15はこれに関するとみられる。東西方向の溝7・12は宅地内の区画に関するものであろう。建物に関しては何らの遺構も検出できなかった。

遺物では、前期・中期に属するものがあるが、特に井戸12と溝7から多量に出土した。後期の土師器類と中国製の白磁類が一括資料として注目できる。瓦類には、前期から後期までのものがあり、軒瓦の種類も比較的多い。

2. 鎌倉・室町時代(第5図)

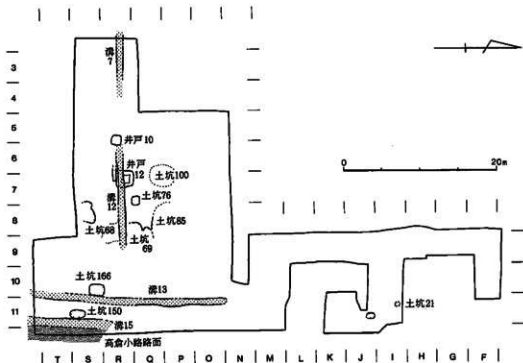
通玄寺曼荼羅院の創設前後の時期にあたる。平安時代比べると、検出遺構の数はかなり多くなる。しかし、各々の時期を細かく限定するのは困難であった。この時期にも、発掘区東端部には南北方向の、溝などの区画に関する遺構が認められる。溝1は該期の高倉小路側溝にあたると思われるもので、その西側には掘とみられる柱穴が並ぶ。柱穴列は、少なくとも2時期のものが重複している。

S区には東西に2基の井戸が検出された。西寄りの井戸11は規模が大きく、1町を占める寺院に付属するものとしてもおかしくない。発掘区中央部と南東部では、土探り穴とみられる土坑群がある。今回の調査地は曼荼羅院の境内地でも、伽藍中枢部から外れた場所にあたるためであろう。

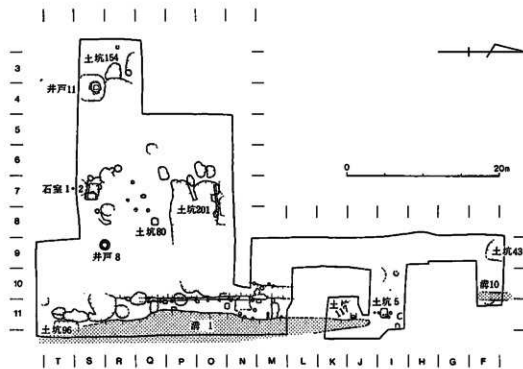
建物に関しては、柱穴はいくつか認められるが、まともはみいだせなかった。ただ、溝1の北端部あたりのI・J-11区では、やや大きな平たい石を入れた土坑がふたつ並ぶ(土坑5、土坑117:図版第12下、図版第21)。これは位置から考えると、門になる可能性もある。

3. 江戸時代(第6図)

江戸時代に関しては、発掘区のはほぼ全域から遺構が検出されている。東端部では、I～K区でトレンチ壁際で溝11が検出されたが、その他には前代のような顕著な区画の施設はみいだせなかつ



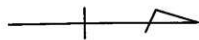
第4圖 時期別遺構圖1



第5圖 時期別遺構圖2

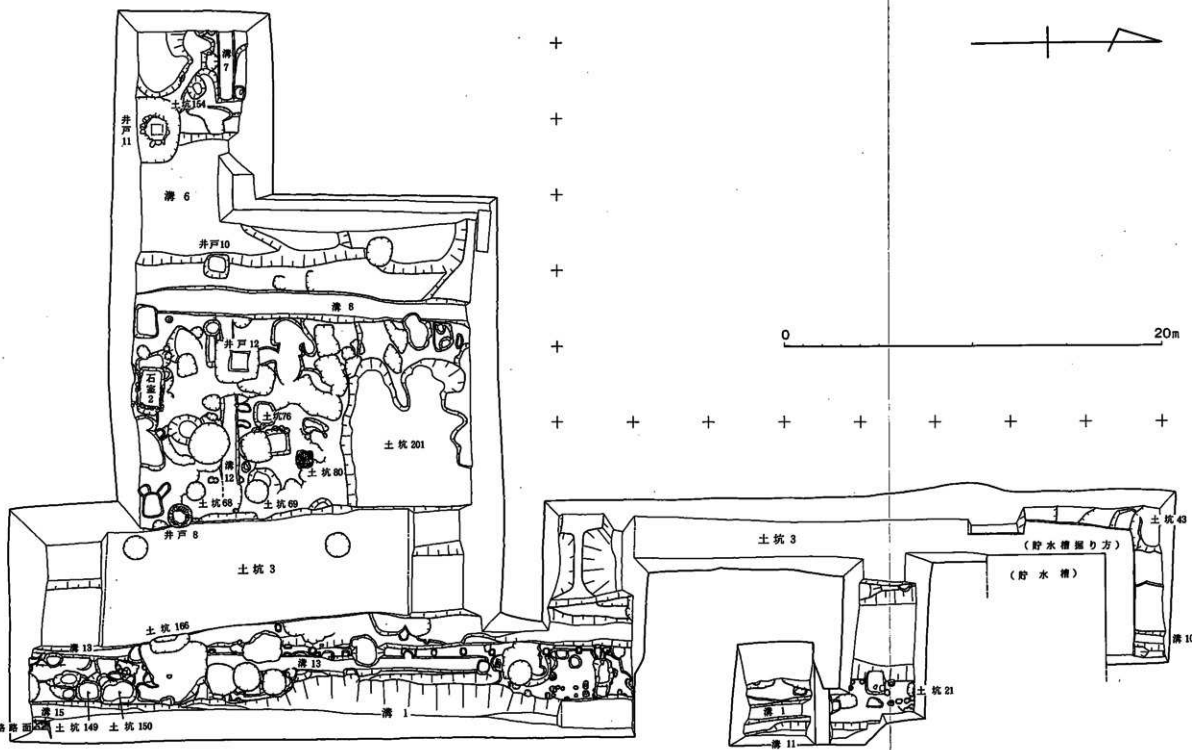
+ Y = -21458.0

2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12



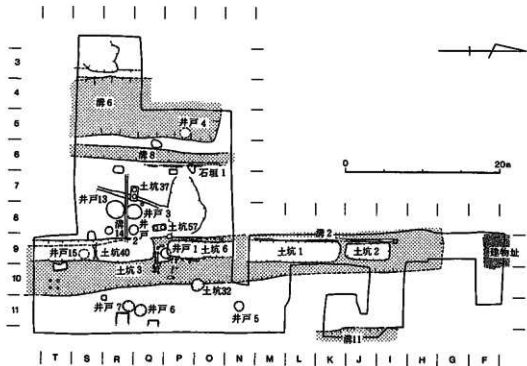
0 20m

X = 110187.0



+ U + T + S + R + Q + P + O + N + M + L + K + J + I + H + G + F + E +

第7圖 検出遺構全圖



第6図 時期別道橋図3

た。やや中央寄りの9区では、北から南までを通して重複した溝状の遺構がある。まず規模の大きな土坑3があり(図版第22・23)、その埋土の上面には漆喰でつくられた細い溝2(図版第24)がある。そしてこれ避けながらも一部を破壊して断続的に続く、焼け瓦を投棄した土坑2・1・6・40(図版第24)がつけられている。発掘区西寄りの4・5区にも、南北方向の大きな溝6があり、6区には石垣1と溝8が存在する。

7・8区には、溝2と同様の漆喰でつくられた東西方向の溝14があり、これを挟んで井戸が南北に並んでいる。そして溝14の北には、長方形の穴の中に桶を二つ埋め込んだ土坑が2基検出された(土坑57, 土坑37: 図版第26下)。この土坑は便所の遺構と思われる。9区でも井戸枠に井戸瓦を用いた井戸が2基検出された。南側の井戸15(図版第26上)は焼瓦溜の土坑40によって上部が破壊されている。北側の井戸1はその周囲に、瓦や石で排水路状の施設がつけられていた(図版第27)。これも焼瓦溜の土坑6に一部が破壊されている。このように、7～9区では生活の匂いのする種々の遺構がみいだせた。

以上を合わせて考えると江戸時代の後期には、6区より東側は一般的な生活の営まれていた場所のようにみうけられる。伝えられているように、この一画が寺侍の居宅であった可能性も大きく、そうすると6区の石垣1が、その時点の曼華院の東限とも考えられる。

なお、前回の調査で建物址として検出された遺構の南半も、F-9区で確認できた。前回の状況と同様に棧瓦を基礎状に立て並べたものであるが、さらにその周囲に人頭大の石列を巡らせて

いたことが判明した(図版第28)。この遺構の直上は焼瓦層が覆っていた。

第2節 平安時代以前

1. 縄文期・弥生期の遺物

1) 土器(第8図)

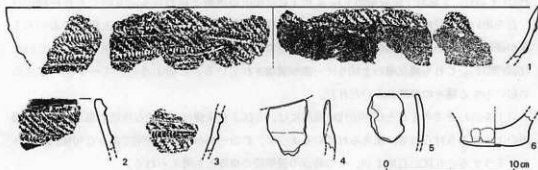
今回の調査では、縄文期・弥生期に属する土器が40片ほど出土した。これらはすべて後世の擾乱によって原位置を失っており、調査区の南半を中心として散漫に分布する。以下6点を抽出し説明を加える。

1はO・P-7・8区第3層より出土したキャリパー状の口縁部を持つ深鉢である。口径は残存部が少なく明確にはしがないが、40cmを越えるものである。口縁端部は尖りぎみに仕上げ、器壁は4~5mmとやや薄手である。燃りの整ったLRの縄文を地文とし、刻み目を密に施した低い突帯を口縁部からやや下ったところに2条持つ。刻み目はL状工具と半裁竹管を併用して施すものである。また、口縁部内面には1.5cm幅の肥厚部を持ち、その上に同じくLRの縄文帯を持つ。外面は黄褐色、内面は暗灰褐色を呈し、焼成はやや軟質。

2はO・P-7・8区第3層出土の、口縁部がやや直線的に内傾する深鉢である。口縁端部は軽く面取りし、外面は1と同様な文様を持つ。1との相違点は突帯より上に縄文が施されないことと、内面に縄文帯を持たないことである。胎土・色調等は1に共通する。

3は1・2と同様な文様を持つ口縁部付近の破片で、どちらかと同一個体であろうが、その所属は不明である。O・P-7・8区第3層より出土した。

4は波状口縁の小型深鉢である。小破片で全体を明らかにしえないが、やや肩の張る胴部から口縁部が直立する形態であろうと思われる。外面はナデ、内面上半に横方向の条痕を残し、以下ナデ調整。口縁端部は軽く面取りをする。胎土中に片岩系の鉱物片を含んでおり、紀ノ川流域かあるいは三波川変成帯³⁶⁾に属するその他の地域からの搬入品であろうと思われる。赤褐色を呈し、焼成はやや軟質。土坑85より出土した。



第8図 縄文・弥生土器実測図

5はQ-8区出土の口縁部が内湾する浅鉢である。口縁端部は軽く面取りし、内外面をナデ調整する。乳褐色を呈し、焼成は良好。6は底径5.4cmの平底の底部片である。胎土中に3mmほどの石英粒を含み、色調も灰白色を呈するなど、弥生期の特徴を備える。Q・R-6区第3層より出土した。

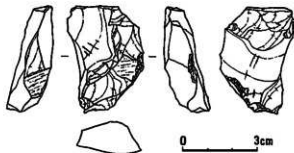
以上5点の縄文土器の編年の位置づけについて触れておきたい。1～3はキャリバー状の、あるいは内湾する口縁部の外面に突帯を貼り付け、その上をE状工具か半截竹管で刻みを入れるなど、縄文文化前期末、大歳山式に共通する要素を持つが、一般に「大歳山式」と呼ばれるものは口縁端部の肥厚が著しく、そこに刺突や刻みなどの文様を施すことを特徴としている¹⁷⁾。従って1～3が口縁端部に面取りや肥厚はあるものの、ほぼ単純に収めていることはやや相違が見られる。しかし、今回の1～3に類似するものは、兵庫県武山遺跡の第XV類¹⁸⁾、岡山県里木貝塚の前期末・中期初頭の土器¹⁹⁾などに少量ではあるがみることができ、さらに大歳山遺跡出土の縄文土器が近年整理され、その中に「端部に粘土紐を貼り付けず刻み目も施さない」一群のあることが指摘されている²⁰⁾。以上より1～3は、「大歳山式」に含まれる一類型と考えるとよいものと思われる。4は晩期中葉に位置づけられよう。5は文様を持たない単純な形態の浅鉢である。これは縄文文化晩期後葉に出現するものに共通し、当遺跡周辺では宇治市寺界道遺跡²¹⁾に類例がみられる。

今回図示し得た5点以外にも、縄文期と思われる土器片は多く含まれており、その中大粒の角閃石を含む生駒西麓産²²⁾の土器片が3点みられるが、所属時期は不明である。

以上より、平安京造成以前において当地周辺に縄文文化を主体とした遺跡が存在した可能性を指摘できる。京都盆地の特に低地部に位置する旧京内で、近年少量づつではあるが縄文文化の遺物が検出されつつある。このような中で、今回前期に遡る土器資料がみられたことは、今後京都盆地内の縄文文化研究において、よりいっそう低地部に目を向けなければならないことを物語っている。

2) 石器(第9図)

O・P-7・8区第3層より出土した加工痕のある剥片(R・F)である。材質は赤色のチャートで、部分的に乳白色を呈す。寸法は幅3.0cm、長さ4.2cm、厚さ1.4cmで、打面と主剥離面との



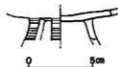
第9図 石器実測図

の角度は80°である。不定形な剥片を素材とし、右側縁および裏面左下縁に大きさが不揃いの連続的な剥離痕を認める。また左下端より表裏両面へのやや大きめの剥離痕があり、下端に突出部を作出する意図が看取される。所属時期は明らかでないが、縄文土器も出土しており、該期に属する可能性が高い。

2. 古墳時代の遺物 (第10図)

第10図は、平安時代の遺構である土坑149の埋土に混入していたもので、古墳時代の須恵器高杯である。胸部には通し孔を3方にあげ、外面にカキメ調整をほどこす。5世紀末葉ないし6世紀初頭の品である。

平安京内においても、古墳時代の須恵器の出土例が増加しつつある。調査地近辺では、たとえば左京七条二坊四町(下京区大工町)の5世紀中葉ないし後半の品、左京八条四坊一町(下京区材木町)の6世紀前半ないし中葉の品、左京五条三坊十五町(下京区竹屋町)・京都市高速鉄道烏丸線内遺跡№28地点(中京区少将井町)の6世紀後半の品、左京四条一坊五・六町(中京区壬生坊城町)の5世紀末葉および6世紀末葉の品、などの出土をあげることができる。京都盆地中央部における古墳時代中～後期の開発の形跡を示す資料である。



第10図 土坑149出土
須恵器高杯断面図

第3節 平安時代

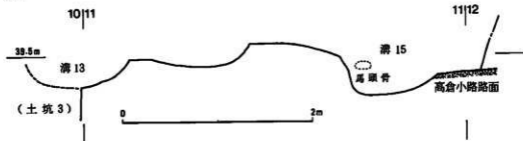
1. 溝 15・路面遺構 (第11～13図, 図版第4・5)

1) 遺構

発掘区東端部の、I区からT区にかけては大きな擾乱が少なく、地山の高まりが南北方向の帯状に残っていた。これは、平安京創設以来現在に至るまで、いつの時代にもほぼこの位置が道路との境界で、築地や塀などの敷地を画する施設があったためと考えられる。

溝15は、この帯状の高まりに沿って、発掘区東南隅で一部が検出された。発掘区の拡張は、検出箇所が高倉通の道路際であるため最小限にとどめたが、拡張部分では、溝15の東側とそれに続く、堅く締まった面を検出した。この面は状況から、平安時代の高倉小路の道路面とみなされ、溝15はその西側の側溝と判断される。

路面は直上まで後述の溝1に伴う礫層があったため、確認したのは1面だけである。上面から10cmほどの間には径3～4cmの小石や瓦片が多く、路面は砂利敷のような状態であったと思われる。



第11図 溝15・高倉小路断面図

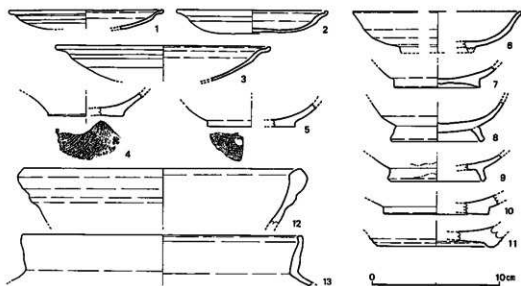
溝15は、肩部の幅が約90cm、深さは路面から25cmで、長さは西肩で9m分を確認した。溝の西側の壁は傾斜が急で、東の道路側は傾斜が緩い。また、護岸の設備の痕跡などはみいだせなかった。溝の方位は西肩部でみると、座標北より東へ約2度振れている。

溝の埋土は、おおまかには上下2層に分けられるが、いずれも暗灰褐色の細かい砂質土である。遺物は主に上層に含まれていたが、大半は細片であった。なお、溝中の南端部西寄りから馬の頭骨が出土した(図版第5)。遺存状態はあまりよくないが、鼻先が南を向いた状態である。他の部分の骨はみいだせず、また、下顎骨もなかった。

2) 溝15出土遺物(第12図)

第13図1～3はCタイプの土師器皿である。1・2は小皿、3は大皿である。いずれも器壁は薄く、口縁部の屈曲がつよい。4・5・7は須恵器の杯もしくは碗で、4・5は底部に糸切り痕がのこり、7は底部を回転ケズリ調整する。12は須恵器鉢である。口縁部は丸く肥厚する。13は黒色土器の鍋である。内外面全面に炭素が吸着する。6・9は灰軸陶器の碗である。8は釉をみないが、同形の碗である。10は緑軸陶器碗である。蛇ノ目高台をもつ。釉色は淡緑灰色を呈し、碗成は土師質である。11は中国製の青磁碗である。越州窯系の製品で、釉色は緑灰色を呈する。

なお、本報告書で使用する土師器皿の型式分類は、横田洋三の分類²³⁾に従う。いまこれを略述しておくならば、まず、使用する土により、褐色系と白色系とに大別する。そうして、褐色系品をさらにA₁・A₂・A₃・C・Eの各タイプに細分する。A₁タイプは口縁部の外反するもの、A₂タイプは口縁部の直立ないし内湾するもの、A₃タイプは口縁部が直線的に立ち上がり、底部との境に屈曲をつくるものである。Cタイプは口縁部が外反し、口縁端部にいたって上方に屈曲した、いわゆる「て」の字状口縁の皿である。Eタイプは16世紀以降に登場する粗製の小皿である。白色系の皿は、B₁・B₂の両タイプにわかれる。B₁タイプは白色土を使用し、型押し



第12図 溝15出土遺物実測図

20 第3節 平安時代

によって成形、口縁部が内湾する。同タイプの小型皿にはへそ皿がある。B₂タイプは垂白色土を使用し、型押しによって成形し、口縁部が外反する。別に、口縁部を内に折りこむ、Dタイプの皿がある。これはいわゆるコースター形皿である。

3) 踏面出土遺物(第13図)

第13図1は軒平瓦である。瓦当面を失っているけれども、断面形などから平安時代前期の瓦と考えられる。2~4は須恵器である。2は鉢で、口縁部が丸く肥厚する。3・4は高台付きの杯である。3は断面方形の低い高台を、4は断面三角形の高台を、それぞれ付ける。

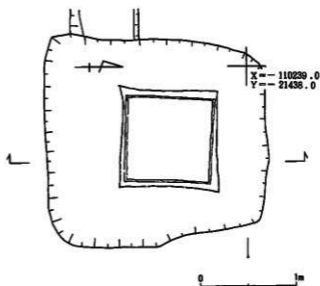


第13図 高倉小路踏面出土遺物実測図

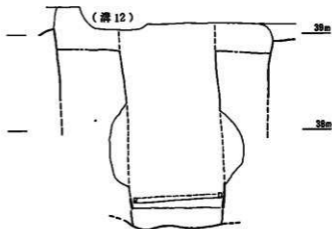
2. 溝 13

(第4図, 図版第3)

先に触れた発掘区東端部の、帯状に地山が高まっている部分で検出した、南北方向の溝である。N区とO区の境あたりが北端で、途中が寸断されているものの、24.5m分を確認した。南は発掘区外に延びている。溝の幅は肩部で80~90cm、深さは最も残りのよい部分で約40cmである。断面形はほぼ逆台形を呈する。



溝の方位は、座標北より東に約2度振れており、溝15と概ね平行する。ただし、出土遺物からみるかぎり、溝15とは年代を異にし、同時存在は考えにくい。溝13からの遺物はあまり多くはないが、後述の溝7の出土遺物と共通する。



第14図 井戸12遺構実測図

3. 井戸 12 (第14~20図, 図版第6・7上)

1) 遺構

R-7区の西北部で検出した方形の井戸である。掘り方の平面は、南北が2.3m、東西が2.1m前後で、北辺がやや狭くなっている。掘り方中央に一辺約1mで、縦板を用いて横棧をあてた木枠がつくられている。ただし、木質の残っていたのは下端部20cmほどで、それより上は痕跡のみであった。縦板の1枚の幅は30cm程度である。井戸底は、木枠の下端より20cmほど下がっており、多少の凹凸はあるが、とくに水溜めの設備はみいだせなかった。

この井戸の、方形木枠部分の内からは、コンテナ・バットにして100箱を越える土器類などが出土した。すなわち木枠部分では、検出面から最下部に至るまで遺物がほぼ充満しているような状況であった(図版第7上)。井戸底から1mほど上に、木枠の裏込め土の崩落している箇所があったが、この部分にも遺物が入り込んでいたことから、多量の土器類の投入は、崩壊していた古井戸になされたものであろう。

2) 遺物

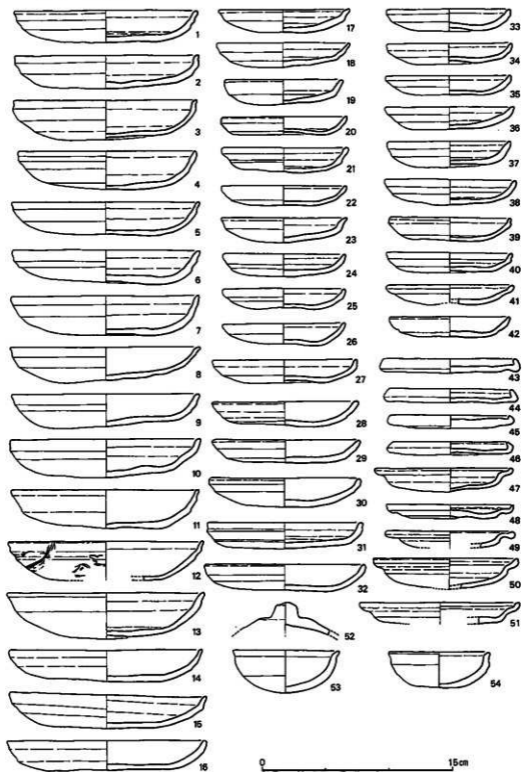
井戸12からの出土遺物は、そのほとんどが土師器皿類で、ほかに瓦・中国製陶磁器・瓦器・灰釉陶器・須恵器・石製品などを含む。なかでも、中国製陶磁器が一括して出土したことが注目される。

土器類 第15図1~51は土師器の皿である。いずれも褐色土を使用した製品である。1~42はAタイプの品で、1~16が大皿、17~26・33~42が小皿である。ほかに、大皿・小皿に比べると数は少ないけれども、27~32のように両者の中間的な口径をはかる品がある。中皿として分類すべきかもしれない。井戸12から出土した大量の土師器皿は、ほとんどがこのAタイプの製品である。そうして、そのほとんどは、A₂タイプの製品であるか、または、A₁タイプであるが口縁部の外反の度合いが弱く、A₂タイプに近づいている品である。手法的には口縁部に2段のヨコナデ調整を施す。12は外面に墨書を見るが、判読できない。

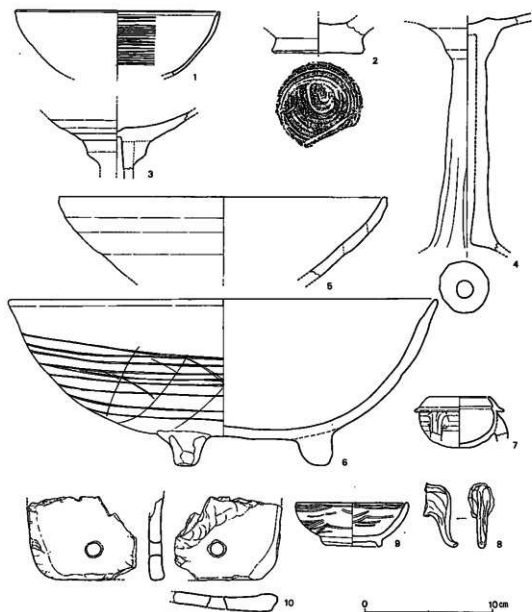
第15図43~46はDタイプの土師器小皿である。口縁部はわずかに内上方に屈曲する。数量的には全体に占める割合は少ない。47~51はCタイプの土師器小皿である。「て」の字状口縁と通称される口縁部をもつ製品であるが、口縁部の屈曲は弱い。これも数量的には少量である。

第15図52は土師器蓋である。1点のみ出土した。天井部に断面台形のつまみをつける。53・54は土師器碗である。小型で、半球形の底部部と、外上方に開く口縁部をもつ。第16図2は土師器で、柱状高台をもつ台付皿であろうか。底部外面に回転糸切り痕がのこる。3・4は土師器高杯である。杯部と脚部の境界をふくませ、脚部外面をタテケズリする。5は土師器鉢である。底部外面には粘土紐の継ぎ目が明瞭にあらわれる。

第16図1・6~9は瓦器である。1は碗で、口縁部内面に段がつく。内面全面と口縁部外面に暗文をめぐらす。口縁部外面の暗文はかなり粗い。7・8は小型の羽釜で、3本の脚を付ける。6は大型の鉢である。底部に3個の足をもつ。外面は不定方向のケズリののちにミガキを、



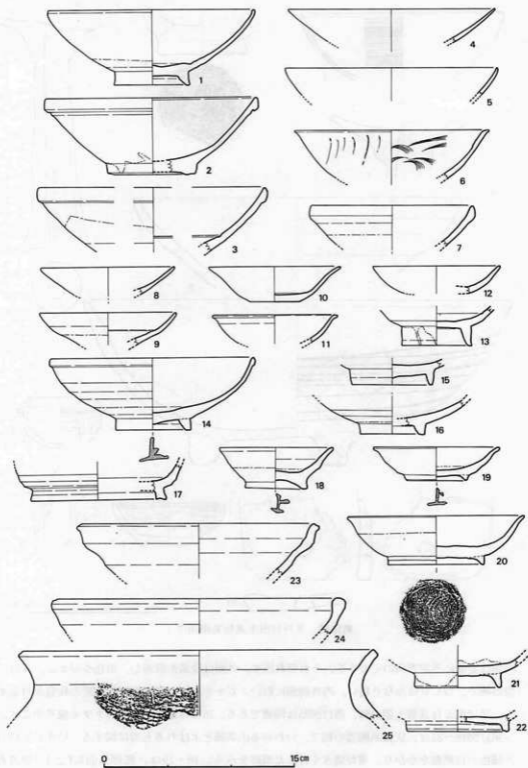
第15圖 井戸12出土遺物実測図1



第16図 井戸12出土遺物実測図 2

内面は全面に不定方向のミガキを、それぞれ施す。外面は炭素が吸着し、黒色を呈する。9は小型の碗で、つくりはかなり粗い。内外両面に粗いミガキを施す。内面には有機質の物質が付着する。第16図5は瓦質土器の鉢、第17図25は同型である。25は体部外面に平行タタキ痕をのこす。

第17図18～21は、灰釉系陶器の碗で、いわゆる山茶碗とよばれるものに属する。いずれも内外面に緑色の自然釉がかかり、重ね焼きを行った痕跡をみる。18・19は、底部外面に「上」の墨書銘をみる。18は高台下端にモミ痕がのこる。20は底部に回転糸切りの痕跡をのこす。



第17圖 井戸12出土遺物実測図3

第17図22は緑釉陶器の碗である。高台は輪高台である。須恵質で、釉色は暗黄緑色を呈する。

第17図17・23・24は、須恵器である。17は杯で、断面方形の高台をもつ。23・24は鉢で、口縁部が外反するもの(23)と、口縁部が肥厚するもの(24)とがある。

中国製陶磁器類 第17図1～16、図版第29は、中国製の磁器である。第17図4、図版第29-53～56は青白磁、それ以外はすべて白磁である。器種としては、碗(第17図1～7・13～16、図版第29-1～36)、皿(第17図8～12、図版第29-37～55)、瓜形の壺(図版第29-57・58)がある。白磁碗には、口縁部が内湾し、高い高台をもつもの(第17図1・5・13・15、図版第29-4・30・31・33・36)、大きな玉縁口縁で、低い高台をもつもの(第17図2・3、図版第29-1・2・5・6・8・9・28・35)、やや扁平な玉縁口縁をもつもの(第17図7、図版第29-7・12・13)、小さな玉縁口縁で、やや高い高台をもつもの(第17図14・16、図版第29-3・10・11・15・16・32・34)、口縁部が外反するもの(第17図6、図版第29-18・20・21・26)の各種がある。第17図6は内面に佛描文を、外面に線状文を、それぞれ描く。第17図3は見込みに沈線がめぐる。第17図14は底部外面に「上」の墨書をみる。なお、図版第29-17・18の外面には片切り彫りの文様をみる。第17図4は青白磁で、碗である。口縁部は直線的に外反する。青白磁としては、ほかに合子(図版第29-56)がある。白磁皿には、口縁部が直線的に外反するもの(第17図8・9)、口縁部が外反するもの(第17図10・11)、口縁部が内湾気味にたちあがるもの(第17図12)の各種がある。第17図10の底部は平底である。図版第29-52は皿で、器壁を薄くつくり、口縁部には輪花をみる。色調は純白色を呈する。きわめて精巧なつくりの製品である。図版第29-49～51は皿で、内面に螺旋文を描く。

なお、第17図の中国製磁器と図版第29の対応関係は、第1表に示す通りである。

第1表 井戸12出土中国製磁器 挿図・図版番号対照表

第17図	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
図版第29	4	2	1	53	36	20	7	48	38	40	39	37	30	3	31	32

図版第29-61は、黒釉陶器の壺である。外面に黒色の釉をかける。内面には釉をみない。焼成は堅緻である。

第18図(図版第29-60)は、三彩である。器種は盤であろう。淡黄褐色の胎土に、白色の化粧土をかけ、その上に黄色および緑色の釉を施す。日本製でないことは確実であるが、生産地を限定できない。

井戸12出土の中国製陶磁器は、接合後の破片数にして、器種を推測しうるものが63片、器種のわからない小破片が27片、合計90片を数える。

石製品 第16図10は滑石製の温石である。平面形は隅丸の方形を呈し、1孔を開ける。石綿の再加工作品であろう。ほかに滑石製石鍋片があり、これもまた再加工作品とした形跡をみ



第18図 井戸12出土
遺物実測図4

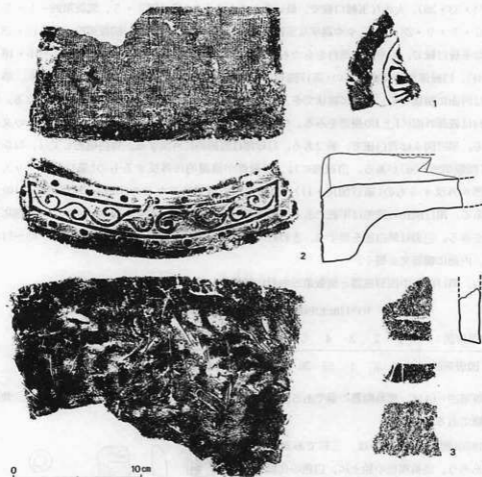


第19図 井戸12出土
遺物実測図5

る。第19図は石製の小玉である。色調は白灰色を呈する。石質はかなりもろい。

瓦類 第20図1は単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。外区に珠文帯を巡らしているが、珠文は小さくまばらで周縁に接している。瓦当裏面はナデ調整を施している。胎土には砂粒を含み、焼成は硬質で黒灰色を呈する。

2は左右から中心に向かって4反転し、中心飾を持たない均整唐草文軒平瓦である。凹面には比較的細かい布目痕を残し、瓦当上端を約1.2cm幅で斜めに削り落としている。凸面は指押さえの後、軒平瓦の瓦范を用いて叩きを施している。叩き板に使用された瓦范の文様については、上外



第20図 井戸12出土遺物実測図6

区の珠文帯部分は認められるが、主文様は不明である。胎土は密であるが細かい砂粒を多く含んでいる。また、土がよく練られていないためか、白黒の縞状になっている。焼成はやや硬質で灰白色を呈する。

3は厚さ約1.6cmの平瓦で、端面にヘラ記号を持つ。凹面には糸切り痕や細かい布目痕が残り、かかった布端の痕が認められる。凸面には縄目叩きが施されている。胎土には砂粒を多く含み、

焼成は硬質で青灰色を呈する。

その他、広端幅で15.5cm、残存長18cmの小型の平瓦も出土している。

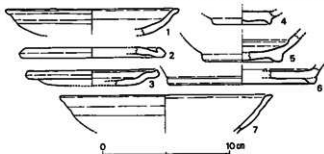
4. 井戸 10

1) 遺構

R-5・6区で検出された。平面は一辺が1.2mの方形を呈し、深さは検出面から1.2mであった。西半を大きく溝6に切られている。深さは、平安時代の水脈には連しているが、平安時代の通例の井戸掘り方に比べると規模が小さく、井戸とするには疑問も残るものである。

2) 遺物

土師器・須恵器・中国製磁器がある。第21図1～3は土師器小皿で、1はA₁タイプ、2はDタイプ、3はCタイプの製品である。3は器壁が厚く、口縁部の屈曲はにぶい。7はA₁タイプの土師器大皿である。4は土師器で、椀であろう。断面三角形の高台をもつ。5は中国製白磁の碗である。断面方形の低い高台をもつ。6は須恵器杯である。



第21図 井戸10出土遺物実測図

5. 土坑 68・69 (第22図～34図, 図版第7下)

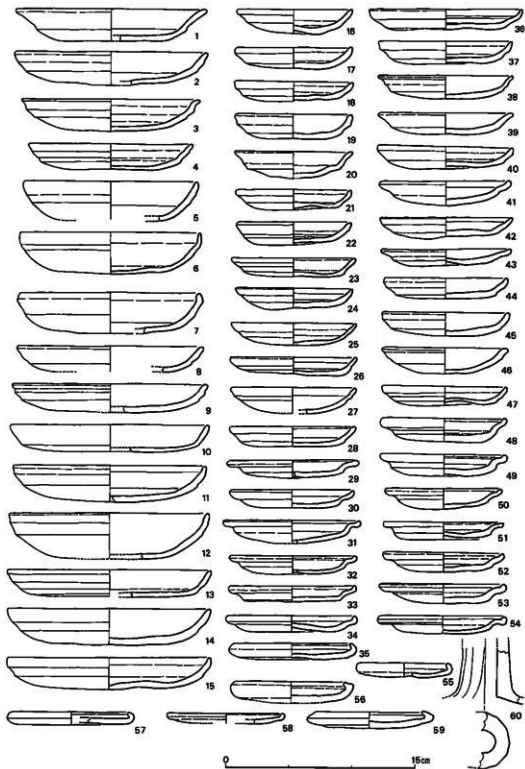
1) 遺構

Q・R-8・9区で検出した土坑である。溝12によって断ち切られており、便宜上、北部分を土坑69、南部分を土坑68としたが、もともと一連の土坑であろう。深さは20cm程度で、かなり削平を受けているとみられる。また、後世の掘り込みにより輪郭もよくわからない。とくに土坑68は周囲がすべて削り込まれて、遺物を含む埋土が逆に島状に浮き上がるような状況であった。埋土中には、焼土や焼け固まった土壁片が含まれており、出土瓦も二次的な火を受けたものが多いことから、火災の後の始末を行った土坑と考えられる。

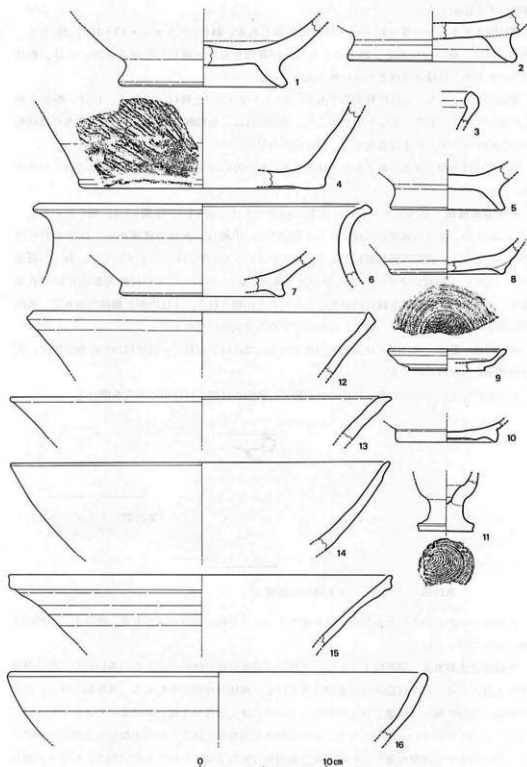
2) 遺物

土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦質土器・中国製磁器・土製円塔および瓦類などがある。

土器類 第22図は土師器である。いずれも褐色土を使用する。大皿(1～15)、小皿(16～59)、高杯(60)がある。大皿はA₁タイプ(1～4)とA₂タイプ(5～15)の別がある。両者ともに外面を1段ないし2段のナデにより調整する。小皿にはA₁タイプ(16・20・23～28・38・39・41～44・46・47)、A₂タイプ(17～19・21・22・36・37・40・45)、Cタイプ(29～34・48～54)、Dタイプ(35・55～59)の各種がある。Cタイプ品は「T」の字状口縁の屈曲がゆるやかで、同タイプの最終末に近い時期の製品であることを示している。Dタイプ品は口縁部



第22圖 土坑68・69出土遺物実測図1



第23圖 土坑68・69出土遺物実測圖2

側につよく屈曲する。

第23図3・4・6～9・12・13・15は須恵器である。鉢(3・4・12・13・15)、壺(6), 壺(7・8), 皿(9)がある。鉢のうち3は、口縁部を丸く玉縁状に肥厚させる。9は、板状の高台をもち、口縁部はゆるやかに外上方にひらく。

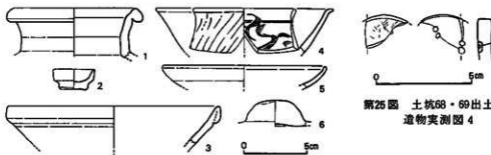
第23図1・2・5・10は灰釉陶器である。壺(1・2・5)と碗(10)がある。10は、断面三角形の高台をもち、底部に糸切り痕がのこる。第23図11は、施釉陶器の花瓶である。底部には回転糸切り痕がのこる。胎土は黄褐色で、釉は白色を呈する。

第23図16は大型の瓦器の鉢である。体部外面に斜め方向のミガキを施す。口縁部は丸くおさめる。

中国製磁器類 第24図1～5は中国製の白磁である。壺(1), 小碗(2), 碗(3・4), 皿(5)がある。壺は口縁部が玉縁状に丸く肥厚する。小碗は、板状の底部から、ほぼ垂直に体部が立ち上がる。底部外面は露胎である。碗でこういった小型のものはめずらしい。碗の口縁部には、大きい玉縁状のもの(3)と、外反するもの(4)とがある。3の口縁部断面には小孔が残り、同部を折り返して玉縁状口縁をつくったことが知られる。4は内面に樹描の流水文、外面に斜線文を、それぞれ施す。皿は、口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。

土製円塔・石帯 第24図6は土製の円塔である。焼成は土師質で、淡黄緑色の緑釉を施す。天井部外面には布目がのこる。

第25図は石帯の蓮方である。黒色の頁岩製で、裏面には緞じ付け用の糸穴を開ける。



第24図 土坑68・69出土遺物実測図3

第25図 土坑68・69出土遺物実測図4

土坑68・69から出土した瓦類は、コンテナ・バットで約20箱分の量である。便宜上、土坑68と69に分けて記していく。

土坑68出土軒丸瓦 第26図1・2は同范品で、平安京域で比較的出土例の多い複弁八葉の蓮華文軒丸瓦である。花卉は線画風に表現されていて、棒状の弁間文を配する。外区幅が狭く、内外区界線と周縁に接した状態で珠文帯が回っている。珠文は花卉先端と弁間文に対応して配されているが、若干ずれている部分もある。造り是指ナデ調整が主体で、瓦当上端から丸瓦部凸面にかけて縦方向のナデ調整を施している。瓦当裏面から瓦当下端にかけても指で押さえた後ナデ調整を施していて、指頭痕が顕著に残る。胎土には砂粒や7～8mmの小石を含み、どちらも焼成は

硬質で1が黒灰色、2は灰色を呈する。

3も平安京城で出土例の多い蓮華文軒丸瓦である。花卉の子葉部分が崩れて単一の梯形をなしている。珠文は花卉先端に対応して配され1・2と同様に周縁に接している。造りも1・2と同様で、胎土には砂粒が多く含まれる。火を受けたらしく、焼成はやや軟質で淡赤褐色を呈する。第21図1と同范である。

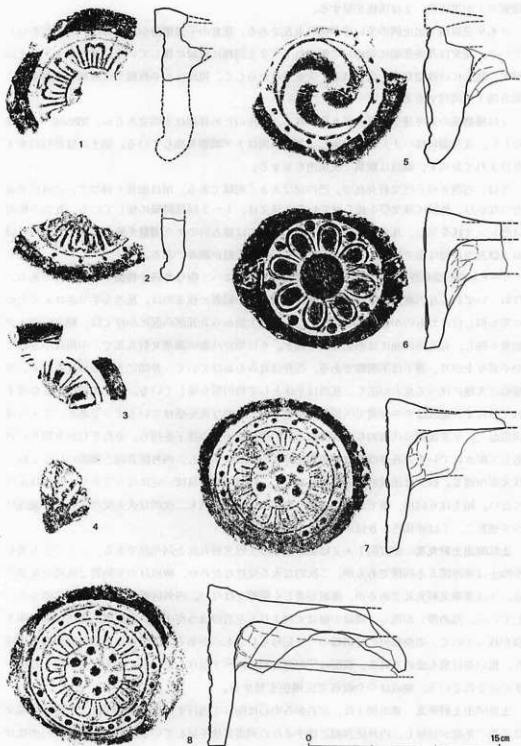
4は播磨産の単弁蓮華文軒丸瓦と思われる。小片のため詳細は不明であるが、第35図3と同范らしい。瓦当面にはハナレ砂が付着し、瓦当裏面はナデ調整を施している。胎土には砂粒はあまり含まれておらず、焼成は軟質で灰褐色を呈する。

5は、右巻きの三巴文軒丸瓦で、巴の頭は大きく肉厚である。尾は細長く伸びて、内外区界線とつながり、外区に珠文帯を巡らせている。珠文は、1〜3同様周縁に接している。瓦当の断面は凸レンズ状を呈し、瓦当上端から筒凸面にかけては縦方向のナデ調整を施している。瓦当外周および瓦当裏面は指で押さえて成形しており、指頭圧痕が顕著である。

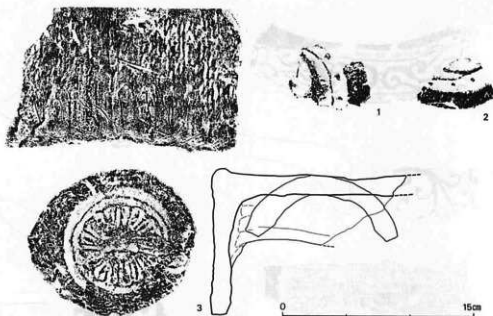
6〜8は幡枝栗栖野瓦屋の製品で、瓦当裏面の下半部にヘラ削りを施す特徴を示すものである。なお、いずれも瓦当裏面のほぼ同じ位置に指頭圧痕が顕著に残るのは、瓦当を手でささえて上から范を押し付けたものかもしれない。また、瓦当上端から丸瓦部凸面にかけては、縦方向のナデ調整を施し、丸瓦部凹面には糸切り痕を残す。6は単弁八葉の蓮華文軒丸瓦で、中房は小さめでやや盛り上がり、蓮子は不明瞭である。花卉は丸みをおびていて、弁間に大粒の珠文を配す。周縁幅は天地に比べて左右が広く、瓦当は全体として楕円形を呈している。胎土に砂はあまり含まれておらず、焼成はやや硬質で灰褐色を呈する。二次的な火を受けているようである。7・8は同范品で、平安後期の代表的な文様である。中房は1+6の蓮子を持ち、それぞれが弁間文に対応して配されている。花卉は線状の表現で棒状の弁間文を配し、内外区界線と周縁にははさまれて珠文帯が巡る。珠文は比較的密に配されていて、周縁の幅はほぼ一定になっており、瓦当は正円に近い。胎土は6同様、密で砂粒をあまり含まない。いずれも二次的な火を受けている。焼成はやや硬質で、7は赤褐色、8は淡赤褐色を呈する。

土坑89出土軒丸瓦 第27図1・2は第26図5の三巴文軒丸瓦と同范品である。1・2とも造りや胎土は第26図5と同様であるが、二次的な火を受けたためか、焼成はやや軟質で灰褐色を呈する。3は蓮華文軒丸瓦であるが、摩滅が著しく明瞭ではない。内外区界線の外側に珠文帯を巡らせている。范の押しが浅く、周縁の幅は天地よりも左右のほうが広い。丸瓦部凸面には網目叩き痕が残っていて、中央部分には斜線のヘラ記号らしきものがある。凹面には糸切り痕が顕著に残り、粗い布目痕も認められる。側面は凹面側を斜めにヘラ削りしている。胎土はやや粗く砂粒が多く含まれている。焼成はやや軟質で灰褐色を呈する。

土坑88出土軒平瓦 第28図1は、左右から中心に向かって内行する唐草文軒平瓦である。唐草文は子葉の先端が分岐し、内外区界線に接するため飛雲文状を呈している。外区には比較的密に珠文を配す。文様の右上部は瓦范が欠けており、また范傷も目立つ。瓦当外周はヘラ削りし瓦当上端を斜めにヘラ削りを施すつくりのものである。凹面には細かい布目痕を残し、凸面は指押さえ



第26圖 土坑68・69出土遺物実測圖5



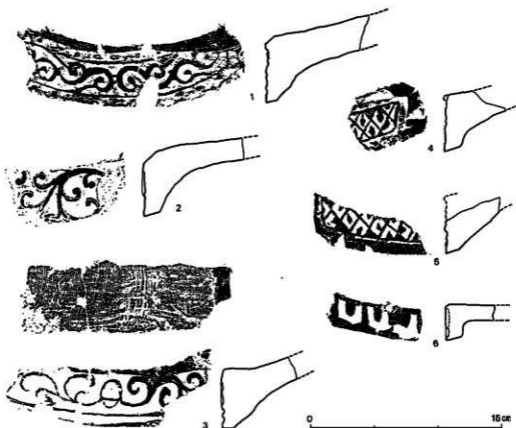
第27図 土坑68・69出土遺物実測図6

指頭圧痕が顕著である。胎土には砂粒をあまり含まず、白黒の縞状になっている。焼成は硬質で、火を受けているため赤褐色を呈する。造りや胎土などを見ると、森ヶ東瓦窯の特徴的な技法要素を多く持っている。2は中心に向って内行する唐草文軒平瓦であるが同范例でみると、左右の文様は軸対称ではなく、点対称で表されている。唐草文は大きく転回し三巴文状に子葉を巻き込んだ形で1単位を表現している。凸面は縦方向のナデ調整を施しており、側面に面取りを施している。胎土は密であるが砂粒を多く含み、焼成はやや軟質で灰白色を呈する。

3は卵型の特異な中心飾を持ち、左右に唐草を3反転させている。造りは2同様であるが瓦当上端をへら削りしていない。胎土には所々に小石を含み、焼成は硬質で青灰色を呈す。

4・5は同范の、幾何学文軒平瓦である。内区を斜格子文で埋め、各格子の中に珠点を配している。内外区界線の外側にまばらに珠文を配す。造りは1と同様で凸面は縦方向のナデ調整を施している。胎土にはあまり砂粒を含まず、焼成は硬質である。4は灰白色、5は火を受けたのか赤褐色を呈す。6は単位文様の中心線が垂直になるように割り付けられた剣頭文軒平瓦で、瓦当部の造りは折り曲げ式のものである。凹面の布目痕は比較的細かい。焼成は硬質であるが火を受けているらしく、淡赤褐色を呈する。

第29図1・2は同范品である。唐草文が崩れて変形したと思われる波状の文様で、瓦当の方が瓦范よりも小さいため、文様が途中で截ち切られていて、左上端部は少し范が割れている。造りは第28図1と同様、瓦当上端が斜にへらで削り落とされており、側面も凹面側に面取りされている。凹面にはやや細かい布目痕を残し、頸部から凸面にかけては指押さえて調整しているので、指頭圧痕が顕著に残る。胎土は密であるが砂粒を含んでおり、所々に白土が混入している。焼成



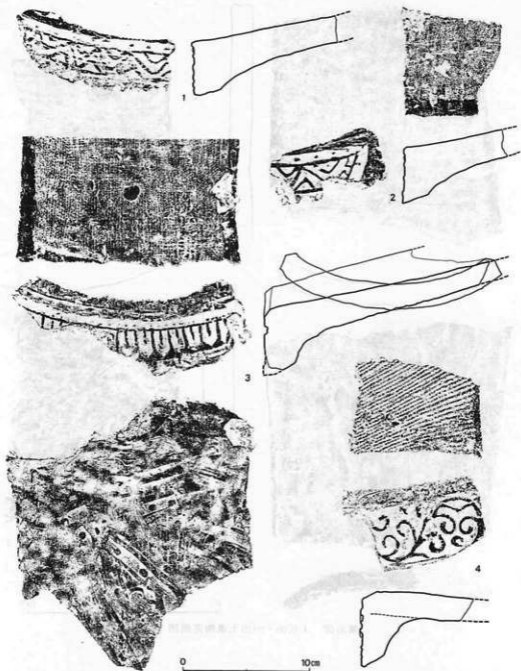
第28圖 土坑68・69出土遺物実測図7

は硬質であるが、灰褐色を呈する。いずれも二次的な火を受けたものであろう。

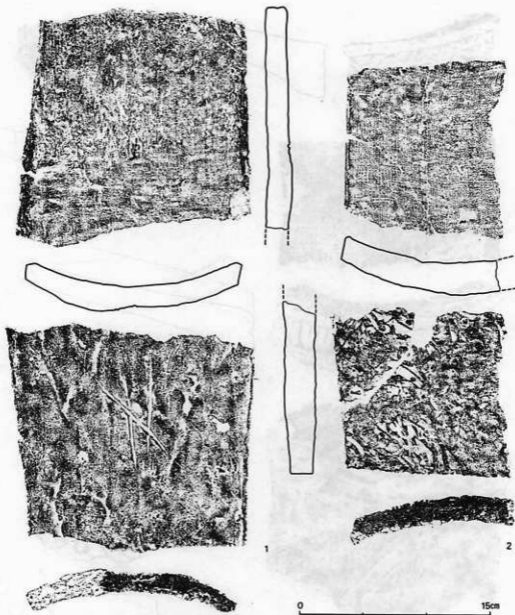
3は、単位文様がやや扇状になるように割り付けられた剣頭文軒平瓦で、内外区界線を通らせ、外区に密に珠文を配している。造りは1・2同様であるが、瓦当上端のヘラ削りの幅が広い。凹面には粗い布目痕が残り、顎部から凸面にかけてナデ調整を施した後、軒平瓦の瓦范で叩いている。叩きに使われた瓦范については、第20図2のものかと思われるが、はっきりしない。胎土には砂粒をあまり含んでおらず、所々に白土の混入が認められる。焼成は硬質で青灰色を呈する。

4は幡枝栗栖野瓦屋の製品で、左から右に向かって流れる偕行唐草文軒平瓦である。割れ口に平瓦部と瓦当部の接合面が認められ、接合式の瓦であることがわかるよい資料である。平瓦部は、平瓦用と同じ粘土板を使用しているらしく、凹面に糸切り痕を顕著に残している。顎部から凸面にかけてはナデ調整を施している。胎土は粗く砂粒を多く含み、焼成は硬質で青灰色を呈する。

土坑69出土軒平瓦 第30図1・2は、瓦当が欠落した軒平瓦の平瓦部分である。いずれも凹面には比較的細かい布目痕が残り、側面は凹面側に面取りを施している。1は厚さ1.5cmくらいで、凸面にはナデ調整を施し、ヘラ記号を持つ。胎土は粗く、砂粒を含んでおり、硬質の焼成で淡青灰色を呈する。2の凸面には、ナデ調整の後、軒平瓦の瓦范で叩いている。叩きに使われた瓦



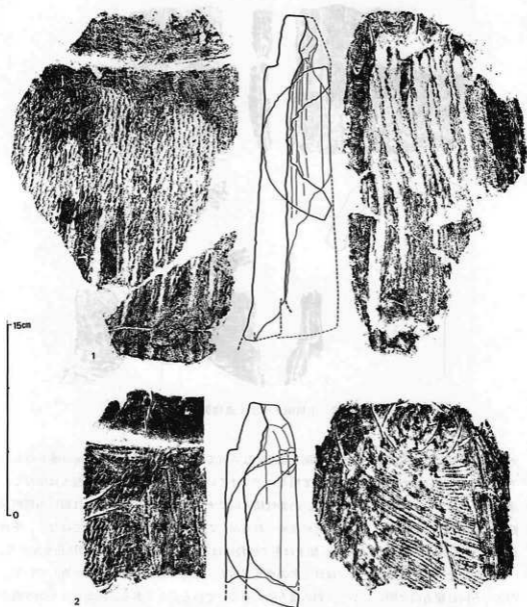
第29圖 土坑68・69出土遺物実測図8



第30図 土坑68・69出土遺物実測図9

范は、第28図1と同文である。胎土は密で砂粒をあまり含んでおらず、焼成はやや軟質である。

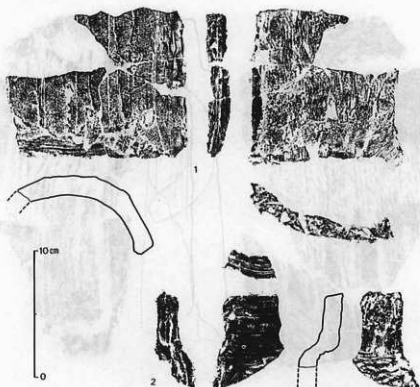
土坑69出土丸瓦 第31図1は瓦当が欠落した軒丸瓦の丸瓦部分である。約2cmくらいの厚手の丸瓦であり、凸面には端部から3分の1あたりまで、瓦当を接合した後、縦方向にナデを施している。丸瓦凸面には縄目の叩きが施され、凹面にはやや細かい布目痕と、布の皺が顕著に残っている。側面はヘラ削りし、凹面側に約1.3cm幅の面取りをしている。玉縁部分は指ナデによ



第31図 土坑68・69出土遺物実測図10

て成形されており、側面を斜めに削っている。胎土には砂粒を多く含み、火を受けたらしく焼成はやや軟質で、淡赤褐色を呈する。2は玉縁式の丸瓦で、厚さ約1.7cmほどのやや薄手のものである。凹面には糸切り痕が顕著に残り、胎土は砂粒を多く含むが比較的密である。焼成は硬質で黒灰色を呈する。

土坑68出土丸瓦 第32図1・2は播磨産と思われる丸瓦で、いずれも焼成はかなり硬質で、指

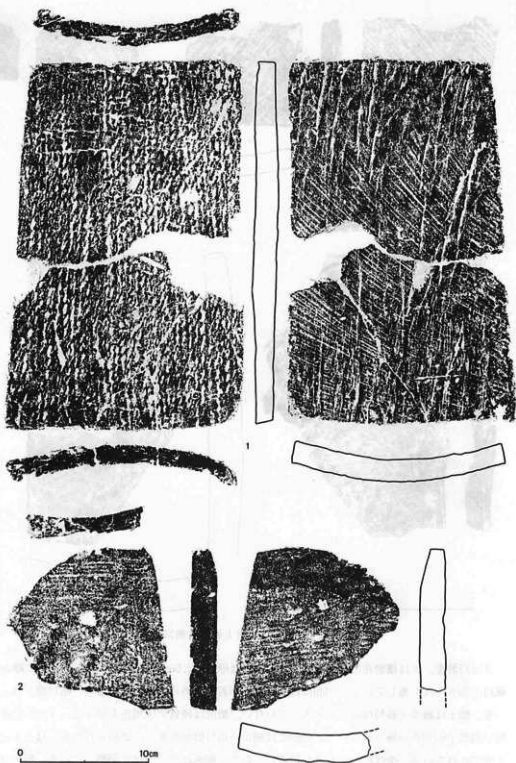


第32図 土坑68・69出土遺物実測図11

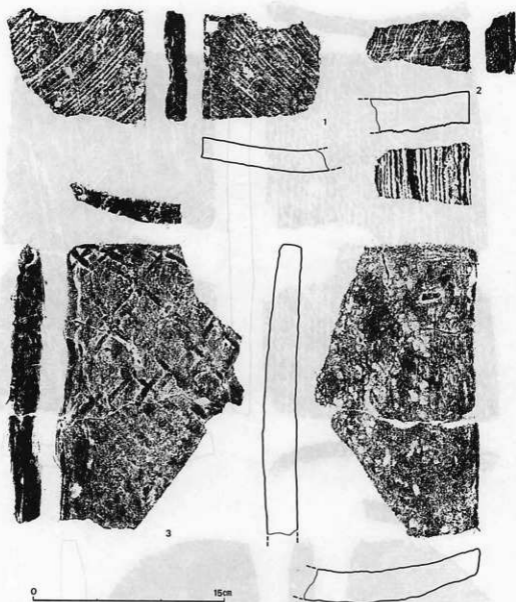
ナデ・指押さえによる調整が凹面や側面・端面になされている。1は厚さ約1.5cmの薄手のもので、凸面は縦方向にヘラ状工具によって粗くナデつけている。胎土は密で砂粒の混入は少なく、淡青灰色を呈する。2は、玉縁部分で、凸面は横方向にナデ調整を施し、凹面には粗い布目痕が残る。玉縁部分の凹面側にも段が顕著に認められるが、これは、模骨が円錐台形ではなく、それ自体段のあるものだったのであろう。胎土は密で砂粒はほとんど入っておらず、青灰色を呈する。

土坑69出土平瓦 第33図1は、ほぼ完形の平瓦である。凸面は縄目叩きを全面に施して、叩きの方向は縦方向に叩いてから、斜め横方向にも叩いているようである。凹面には糸切り痕が残る、広端部寄りにヘラ記号のような横線が認められる。側面はヘラ削りを施している。胎土には砂粒を多く含み、白土が混入している。焼成は硬質で、火を受けて淡褐色を呈している。2は厚さ約2cmの平瓦で、凸面には糸切り痕が残る、細かい縄目の叩きが施されている。凹面にも糸切り痕が顕著に残る、狭端部約3cm幅をヘラ削りしている。胎土は密で砂粒はほとんど入っておらず、焼成は硬質で青灰色を呈する。

第34図1は、厚さ約1.6cmの平瓦で、凹凸両面とも同方向の糸切り痕を顕著に残している。凸面にはかすかに縄目叩き痕が認められる。胎土はやや粗く砂粒が多数含まれている。焼成は硬質で火を受けたのか淡赤褐色を呈する。



第33圖 土坑68・69出土遺物実測圖12



第34図 土坑68・69出土遺物実測図13

2は丹波産，3は播磨産の平瓦と思われる。2は厚さ約2.5cmの厚手のもので，凸面に細かい細目の叩きを深く施している。凹面には糸切り痕が若干認められ，比較的細かい布目痕が残っている。胎土は緻密で砂粒はほとんど入っていない。焼成は硬質で灰褐色を呈する。3は，凸面に粗い斜格子の叩きが施されている。凹面には細かい布目痕がかすかに認められるが，ほとんどがナデ消されている。全代にハナレ砂が付着していて，側面はナデつけて調整している。胎土は密で砂粒の混入は少ない。二次的な火を受けたためか，淡赤褐色を呈する。

6. 溝 7 (第35~38図, 図版第8・9)

1) 遺 構

発掘区西南部のR-2・3区で検出された, 東西方向の溝である。3.5m分を確認したが, 西は発掘区外へ延びており, 東は溝6などにより截ち切られている。しかし, 軸線と同じくする溝12と合わせてみると, 25.5mは続くことになる。ちなみに, この溝の位置は「四町」を南北に二分する想定線の南約5mにあたる。埋土には, かなり密集して遺物が含まれていた。

2) 遺 物

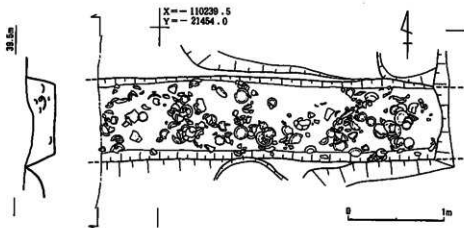
土師器・瓦器・須恵器・灰釉陶器・中国製磁器および瓦類がある。

第36図1~30・35は土師器である。器種には, 大皿・小皿・鍋・碗・鉢・鉢・瓶子がある。1~10は大皿で, A₂タイプ品(1~5・7~10)とA₃タイプ品(6)とにわけられる。11~22・27~30は小皿で, A₂タイプ品(13・15・16・18・19・27), A₃タイプ品(11・12・14・17・20~22), Dタイプ品(28~30)がある。23は鍋である。口縁部が水平方向に外反する。体部外面には煤が付着する。24は鉢である。底部に断面台形の足が3本つく。以上のものはいずれも褐色系の土を使用する。25は高台をもつ碗である。26は皿である。高台付の製品であろうか。35は瓶子である。25・26・35は白色系の土を使用する。

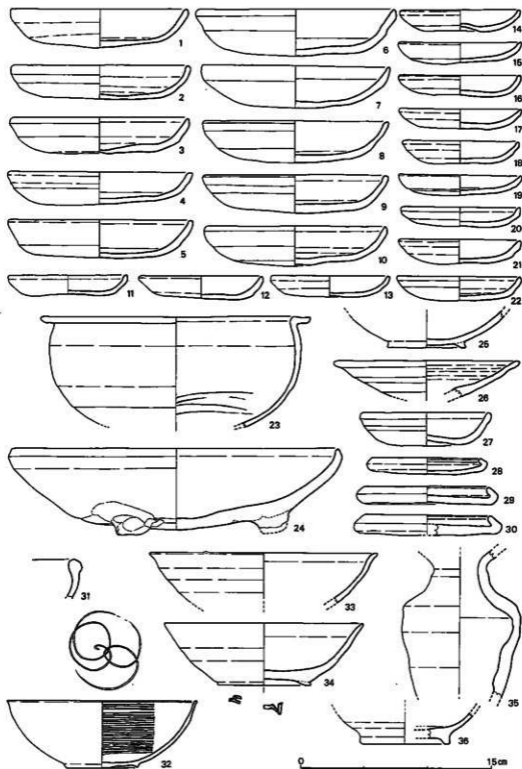
第36図31・34, 第37図6・7は須恵器で, 器種としては鉢と碗がある。第36図31, 第37図6・7は鉢である。口縁部を玉縁状に肥厚させる品(第36図31)と, 口縁部を断面方形におさめる品(第37図7)がある。前者は京都府亀岡市篠原址群の製品であろう。第37図7は使用による内面の摩滅がいちじるしい。第37図6は, 底部に回転糸切り痕がのこる。第36図34は碗で, 口縁部は外上方にゆるやかにのびる。底部に低い高台をもつ。底部には墨書があるが, 判読できない。

第36図33は灰釉系陶器の碗である。口縁部に輪花をつくり, 内外面に斑点状に釉をみる。

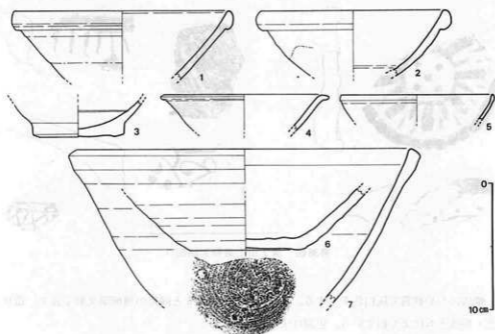
第36図32は瓦器の碗である。半球状の体部に, 断面三角形の小さな高台をつける。内面に暗文



第36図 溝7 遺構実測図



第36圖 溝7出土遺物実測図1



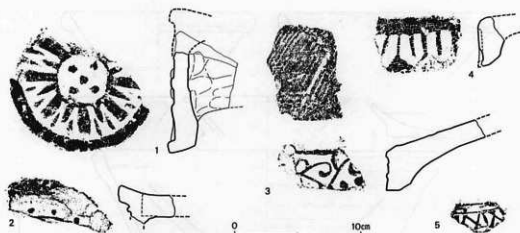
第37図 溝7出土遺物実測図2

を施す。口縁端部内面は内傾する面をもつ。

中国製磁器は、すべて白磁であり、器種は碗である。大きな玉縁状口縁をもつ品(第37図1・2)、小さな玉縁状口縁をもつ品(5)、外反する口縁をもつ品(4)がある。2の口縁部断面には小孔がみられ、同部を折り曲げて玉縁状口縁をつくったことが知られる。3は、幅の広い削り出し高台をもつもので、見込みに沈線をめぐらす。口縁部の形態がわからないが、大きな玉縁状口縁をもつ製品であろう。4は内面に櫛描きの波状文を施す。

第38図1は複弁蓮華文軒丸瓦であるが、文様はかなり崩れていて幾何学文的な表現になっており、中房はやや凹んで1+4の蓮子を持つ。瓦当裏面は指で押さえて調整しているので指頭圧痕が顕著に残り、瓦当断面は凹レンズ状を呈している。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成はやや軟質で灰白色を呈する。2は大部分が欠落してははっきりしないが、外区に配された珠文は周縁に接している。瓦当から筒凸面にかけて縦方向のナデ調整を施し、凹面には糸切り痕が残る。胎土には砂粒をあまり含んでおらず、焼成は軟質で黒灰色を呈する。

3は、単位文様がやや長い剣頭文軒平瓦で、瓦当の造りは折り曲げ技法による。瓦当面にも比較的粗い布目痕が残り、頸部から凸面にかけてはナデ調整を施している。胎土はやや粗く砂粒を含み、二次的な火を受けたのか、焼成はやや軟質で淡赤褐色を呈する。4は、左右から内に向かって流れる均整唐草文軒平瓦であるが、文様は同范例でみるとあまり左右対称にはなっていない。瓦範の天地幅より瓦当の天地幅が狭いため、文様の下部が欠けている。胎土には細かい砂粒を含



第38図 溝7出土遺物実測図3

み、焼成はやや軟質で灰白色を呈する。5は、第28図4・5と同范の幾何学文軒平瓦で、造り・胎土・焼成ともによく似ている。色調は灰白色を呈する。

7. 溝 12 (第39図)

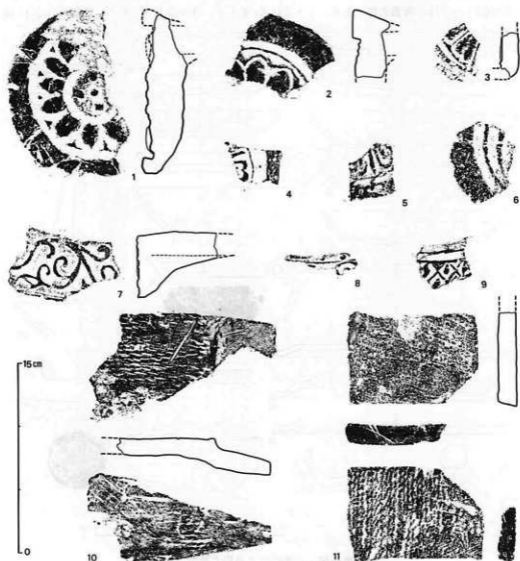
R区に6～8区にかけて検出した東西方向の溝である。かなり削平を受けて、寸断されている。最も残りのよい部分でも深さ15cm程度で、ほとんど底部分のみの確認であった。幅や軸線などは、溝7に一致しており、これに続くものと思われる。この溝は井戸12および、土坑68・69の埋土を切ってつくられている。出土遺物は、溝7に比べると少ないが、土器類は同様のものが出土している。ここでは瓦類を紹介する。

第39図1は、単弁12葉の蓮華文軒丸瓦で、中房は盛り上がり1+4の蓮子を持つ。花卉も肉厚で、弁間に小さな複型の弁間文を配し、周縁上にかすかに珠文が認められる。第26図5と同様、瓦当裏面が球面状を呈しており、瓦当上端から丸瓦部凸面にかけては、縦方向のナデ調整をしている。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや軟質で灰白色を呈する。2は単弁蓮華文軒丸瓦であるが、欠落のため中房部分などは不明である。花卉は先端が三角形状にとがっていて、扁平な感じである。内外区界線を巡らしているが、弁間文・珠文帯などは持たず、周縁は幅が広い。造りは1と同様である。胎土は密で砂粒は少ないが、所々に5mm程度の小石を含む。二次的な火を受けたためか、焼成は軟質で淡赤褐色を呈している。3は、播磨産の複弁蓮華文軒丸瓦であるが、破片が小さいため詳細は不明である。瓦当裏面はナデ調整を施している。胎土は密で砂粒はほとんど混入されていない。焼成は非常に堅い焼きで青灰色を呈する。

4・5は、第26図1・2と同范の軒丸瓦である。いずれも指で押さえて調整しており指頭圧痕が顕著である。胎土は密で砂粒はあまり含まれていない。4は焼成が堅く青灰色をしており、5は火を受けたらしくやや軟質で暗灰褐色を呈している。6は、三文文軒丸瓦と思われるが、大部

分が欠落しているためはっきりとは分らない。瓦当裏面はナデ調整を施している。胎土には砂粒を多く含み、焼成は軟質で灰白色を呈する。一部に黒斑のような黒灰色の部分がある。

7は、幡枝栗栖野瓦屋の製品で第29図4と同范の扁行唐草文軒平瓦で、同様の瓦当部の造りである。瓦当外周はヘラ削りを施しているが、上部は幅広く瓦当上端から約3cm幅でヘラ削りを施し、下端は5mm幅くらいである。凹面はナデ調整されていて、糸切り痕や布目痕はほとんど認められない。頸部付近にヘラ記号らしきものがある。胎土には砂粒を多く含み、焼成は硬質で青灰色を呈する。8は、唐草文軒平瓦と思われるが大部分が欠落しているのではっきりとはわからない。瓦当上端から粗い布目痕が、若干のよじれとともに残っており、瓦当裏面は丁寧なナデ調整を施している。胎土には砂粒を少し含み、白土が縞状に入っている。火を受けたらしく、焼成はやや軟質で赤褐色を呈している。9は第28図4・5と同范で、造り・胎土・焼成はともに同様で



第39図 溝12出土遺物実測図

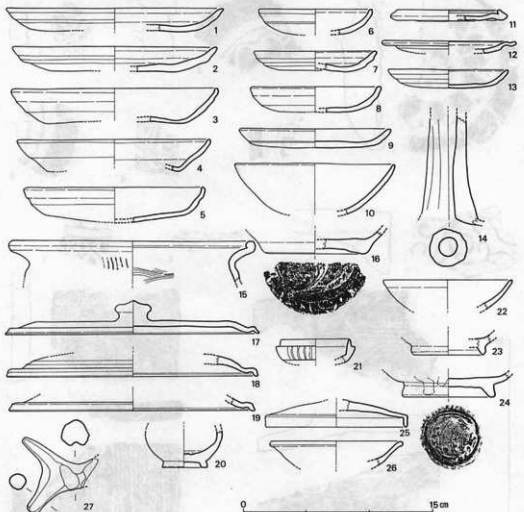
色調は灰白色を呈する。

10は薄手の丸瓦で、凸面には粗い縄目叩き痕が残り、玉縁付近にへら記号を持つ。凹面には糸切り痕と細かい布目痕が所々に残る。側面はへら削りを施しているが、玉縁部分は斜めに削り落されてはいない。胎土は密であるが細かい砂粒をを少し含み、焼成は軟質で淡青灰色を呈する。11は端面にへら記号を持つ平瓦で、凸面には縄目叩き痕が残り、凹面には糸切り痕が顕著で、細かい布目痕も認められる。胎土には砂粒を多く含み、焼成は軟質で淡青灰色を呈する。

8. 土坑 85(第40~41図)

Q-8区付近に遺物の堆積がみられ、この部分をこう呼ぶことにしたが、輪郭はわからない。出土遺物には土師器・須恵器・灰釉陶器・中国製磁器・土馬がある。

第40図1~5は土師器大皿である。1・2はA₁タイプ、3~5はA₂タイプに属する。口縁



第40図 土坑85出土遺物実測図 1

部には1段もしくは2段のヨコナデ調整を施す。6～9・11～13は土師器小皿である。6～8はA₂タイプ、9・13はA₃タイプ、11はDタイプ、12はCタイプの品である。12は器壁が薄く、口縁部が外方に大きく広がる。10は土師器碗である。外面全面に不定方向のケズリ調整を施す。14は土師器高杯である。15は土師器甕である。頸部外面に平行タタキ痕が、体部内面にハケ目が、それぞれのこる。

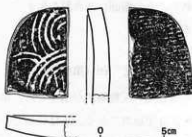
第40図16～20・26は須恵器である。16は鉢である。底部に糸切り痕をみる。17～19は杯蓋である。いずれも、天井部と口縁部の境が段をなし、もういちど屈曲して口縁端部にいたる型式のものである。17は全形を復元することのできる例で、天井部に擬宝珠形のつまみをもつ。20は瓶子である。26は碗または皿である。口縁端部はわずかに外反する。

第40図24・25は灰軸陶器である。24は碗で、底部に糸切り痕がのこる。25は蓋で、天井部と口縁部の境はほぼ直角に屈曲し、口縁端部は丸くおさめる。壺の蓋であろう。

第40図21～23は中国製磁器である。21は青白磁の合子、22・23は白磁の碗である。22は口縁部を丸くおさめる。

第41図27は土師質の土馬である。胴部前半および頭部を欠損する。

第41図は須恵質の猿面碗である。内面に同心円タタキを、外面に平行タタキを、それぞれ施す。

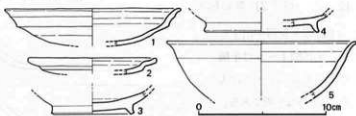


第41図 土坑85出土遺物実測図2

9. 土坑 150 (第42図)

土師器・緑軸陶器・中国製磁器が出土した。

第42図1はA₁タイプの土師器大皿である。2はCタイプの土師器小皿である。口縁部の屈曲は弱い。3～5は緑軸陶器の碗である。底部(3・4)には、輪高台をつける。口縁部(5)はゆるやかに外



第42図 土坑150出土遺物実測図

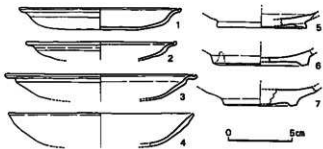
反する。いずれも焼成は須恵質で、軸は明緑色を呈する。なお、小破片であるが、越州窯製の青磁も出土している。

10. 土坑 166 (第43図)

土師器・緑軸陶器・中国製磁器が出土した。第43図1～3はCタイプの土師器皿である。器壁は薄づくりで、口縁部の屈曲はつよい。2は口縁部に煤が付着する。4はA₁タイプの土師器皿である。口縁部は直線的に外上方に外反する。5は緑軸陶器の碗である。焼成は須恵質で、軸は

48 第3節 平安時代

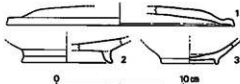
濃緑色を呈する。高台端部内面には段がめぐる。6は中国製の白磁である。釉は乳白色を呈し、貫入が多くみられる。高台はケズリ出し高台で、その断面は低い逆台形を呈する。7は中国製の青磁である。内外両面に施釉し、釉は暗緑灰色を呈する。越州窯系の製品であろう。高台は低く、その断面は逆台形を呈する。



第43図 土坑166出土遺物実測図

11. 土 坑 76 (第44図)

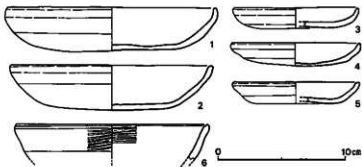
須恵器・灰釉陶器が出土した。第44図1・2は須恵器である。1は杯蓋で、天井部と口縁部の境界が段をなし、口縁端部にいたって下方へ屈曲する。2は高台付の杯身である。3は灰釉陶器の碗である。高台下面にはモミ殻の圧痕がのこる。内面に緑灰色の釉を施す。



第44図 土坑76出土遺物実測図

12. 土 坑 21(第45図)

土師器・瓦器が出土した。第45図1～5は土師器皿である。1・2は大皿、3～5は小皿である。いずれもA₂タイプの製品で、口縁部外面に2段ナゲ調整を施す。6は瓦器の碗である。内外両面に横方向の暗文を施す。口縁端部内面に浅い凹線がめぐる。



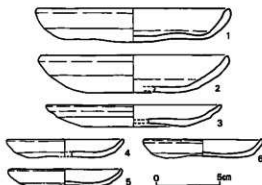
第45図 土坑21出土遺物実測図

13. 土坑 100 (第46図)

P・Q-7区で検出した土器溜りで、土坑の扱いをしているが、輪郭はわからない。

出土遺物には、土師器・瓦質土器がある。

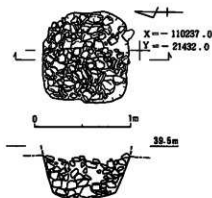
第46図1・2はA₂タイプ、3はA₁タイプの土師器大皿である。4～6はA₂タイプの土師器小皿である。



第46図 土坑100出土遺物実測図

14. 土坑 80 (第47図, 図版第17上)

Q-8区で検出した方形の土坑である。一辺が90cmで、やや隅丸になっている。深さは、検出面から50cmである。土坑の中には、拳大の石が上面から底まで詰め込まれており、その性格はわからない。遺物はほとんど出土せず、若干の平安時代の土師器片もあるが、掘削時の混じりと思われるものである。あるいは、さらに時期の下ることも考えられる。



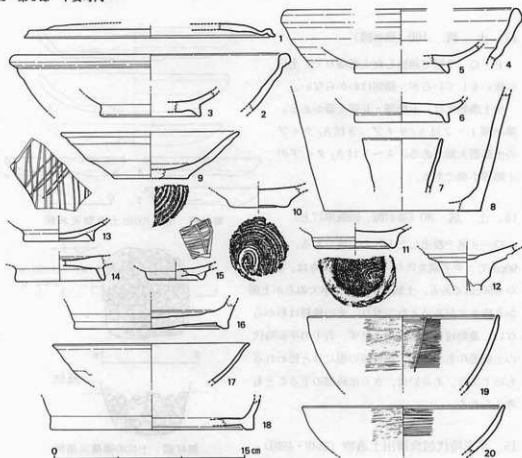
第47図 土坑80遺構実測図

15. 平安時代包含層出土遺物 (第48・49図)

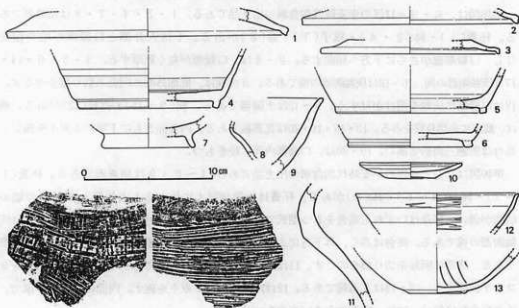
R・S-11区およびQ-8区に、平安時代の遺物を含む包含層が残存していた。

第48図は、R・S-11区の平安時代包含層の出土品である。1・2・4・7・8は須恵器である。杯蓋(1)・鉢(2・4)・瓶子(7)・壺(8)がある。1は天井部と口縁部の境が段をなし、口縁端部がさらに下方へ屈曲する。2・4は、口縁部が丸く肥厚する。3・5・6・14・17は灰釉陶器の碗、16・18は灰釉陶器の壺である。6の碗は、底部外面に回転糸切り痕をのこす。17は口縁部に灰釉を塗りかけする。9～12は土師器である。碗(9～11)・高杯(12)がある。碗は、底部に糸切り痕をみる。13・15・19・20は瓦器碗である。内外面ともに丁寧にミガキを施し、高台は断面三角形で高い。19・20は、口縁部内面に段をもつ。

第49図は、Q-8区の平安時代包含層の出土品である。1～6・9は須恵器である。杯蓋(1～3)・杯身(4～6)・鉢(9)がある。杯蓋は、第48図1に比べると天井部と口縁部の境の屈曲が弱い。杯身はいずれも高台をもつ型式で、底部と体部の境界付近に高台をつける。7は灰釉陶器の碗である。高台は高く、外下方にふんばる。8は灰釉陶器の壺である。10は土師器の皿である。底部に回転糸切り痕をのこす。11は須恵器壺である。外面に格子叩きを施し、内面をヨコハケ調整する。12・13は瓦器碗である。12は内外両面にミガキを施す。内面のそれは丁寧で、外面のそれは粗い。13は、底部に小さい高台をつける。



第48圖 平安時代包含層出土遺物実測圖1



第49圖 平安時代包含層出土遺物実測圖2

第4節 鎌倉・室町時代

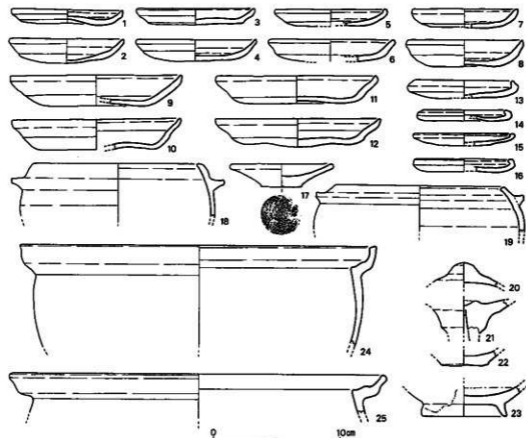
1. 土坑 96 (第50図)

1) 遺構

この土坑はT-11区の東端で検出された。南北長は3mで、平面は方形を呈するかと思われるが大部分が発掘区外になる。深さは約30cmで、溝15埋土に掘り込まれている。土師器類を主体とするかなり多量の遺物が出土している。

2) 遺物

第50図1～8はA₃タイプの土師器小皿である。9～12は同タイプの土師器大皿である。口縁端部の形態は、9・11のように面取りするものと、10・12のように丸くおさめるものがある。10～12は、体部から口縁部にかけて、断面S字状に湾曲する。1のみは白色を呈し、その他のものは褐色を呈する。14は、Dタイプの土師器小皿である。口縁端部は内上方につよく屈曲する。



第50図 土坑96出土遺物実測図

15・16は同タイプの小皿であるが、瓦器である。17は高台付の土師器小皿である。高台は板状高台で、底部に回転糸切りの痕跡がのこる。色調は黄白色で、硬質の焼成である。20は土師器蓋である。山形つまみをもつ。21は土師器高杯である。杯部と脚部の境をわずかにふくらませる。22は平底の土師器の底部である。小型の皿であろう。

18・19・24・25は瓦質土器である。18・19は羽釜、24・25は鍋である。

23は灰釉系陶器の碗である。高台は高く、外下方にわずかにふんばる。内外両面に自然釉がみられる。

2. 土 坑 43 (第51図)

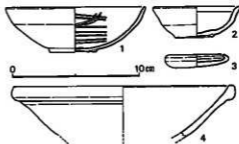
1) 遺 構

北区の北端部で検出された、皿状の土坑である。江戸時代の削平や整地のため、輪郭はよくわからない。深さは、検出面から最も深い部分で40cm程度である。

2) 遺 物

土坑43では、埋土の上層から15世紀の、下層から13世紀の遺物が、それぞれ出土した。ここでは埋土下層から出土した遺物を図示する。瓦器・中国製磁器がある。

第51図1は瓦器の碗である。ただし、これは製作の最終段階の焼しをおこなっておらず、炭素の吸着をみない。したがって色調は通常の瓦器と違い、灰白色を呈している。焼していないにもかかわらず、内面に暗文を施す。高台は断面三角形の、きわめて低いものである。2は小型の瓦器碗である。これは暗灰色を呈する。高台は低い。3はDタイプの土師器皿である。通常の品より口径が小さい。4は、中国製白磁の碗である。大きい玉縁状口縁をもった製品である。



第51図 土坑43出土遺物実測図

3. 溝 1 (第52・53図, 図版第10~13)

1) 遺 構

発掘区の東端の際で検出した。J-11区で北端を確認したが(図版第13)、南はS区まで続き、さらに発掘区外に延びようである。ひと続きにはなっているが、部分によってはかなり様相を異にする。検出面では溝幅全体に、一様に拳大の礫が敷かれているようであったが(図版第10)、O~S区では礫層はあまり厚くなかった。これに対してJ~N区では、溝底まで礫が詰まった状

態であった。この部分では、礫と礫の間に空隙もあり、一種の盲暗渠になっていたものと思われる。

溝の幅や断面形も、北と南では異なっている。幅は、北に行くにしたがって狭くなり、W区あたりでは約1.6m、K区あたりでは約1.1mである。ここでは溝の断面形はU字形を呈する。O区より南では、溝の幅が広がり、断面形はV字形になるようである。ただし、東側の肩は発掘区外になり、立ち上がりは確認できなかった。

溝の埋土は、南北を通じて基本的には、最下層に暗灰色の粘質土があり、その上部は暗褐色土が堆積している。遺物は溝の中位から上に多く、下層からはあまり出土していない。

この溝は、位置からみて室町時代の高倉小路の側溝にあたるかと思われる。また、J区で途切れ、部分的に溝が暗渠状になっていることは、この付近に門を想定する可能性もある。

2) 遺物

遺物は一括して説明するが、図示した遺物のうち、第52図8・16はJ・K-11区から、第52図3・5・10・23・25、第53図1・6・7・11はM・N-11区から、第52図1・2・4・6・7・9・11・15・17~22・24、第53図2~5・8~10はO~R-11区から、それぞれ出土したものである。出土遺物には、土師器・須恵器・瓦器・灰釉陶器・中国製磁器などがある。

土器類 第52図1~13は土師器皿であり、大皿(6~13)、小皿(1~5)の別がある。大皿はさらにB₂タイプ(8・10~13)、A₂タイプ(6・7・9)にわかれる。小皿には、B₂タイプのへそ皿(1~3)と皿(5)、口縁部が直立する特殊品(4)がある。

第52図14・15・21は土師器高杯である。脚部と杯部の境をふくらますもの(14)と、そうでないもの(15)がある。後者は古いタイプの製品である。21は脚部だけしか残存しないが、前者の品であろう。第52図20・23は土師器羽釜である。

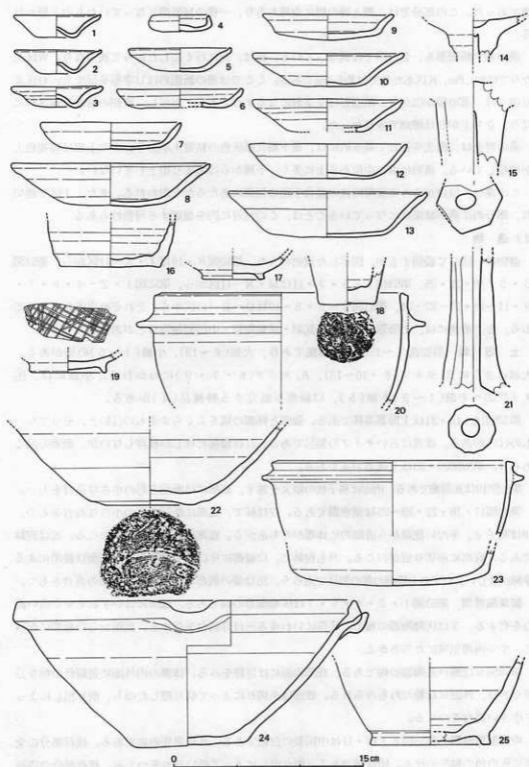
第52図19は瓦器碗である。内面に格子状の暗文を施す。底部には断面方形の小さな高台をもつ。

第52図17・18・22・23~25は須恵器である。17は杯で、底部に断面方形の小さな高台をもつ。18は瓶子で、平たい底部から直線的に体部がたちあがる。底部には糸切り痕がのこる。22は捏鉢である。底部に糸切り痕がのこる。24も捏鉢で、口縁部に片口をつくりだす。内面は使用による摩滅が著しい。いずれも播磨の窯の製品であろう。25は壺の底部である。断面方形の高台をもつ。

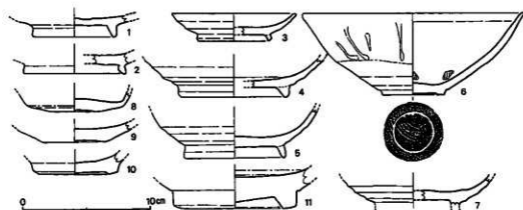
国産陶器類 第53図1・2・4・5・7は灰釉陶器の碗である。底部にはいずれもやや高い高台を有する。3は灰釉陶器の皿で、底部にいわゆる三日月高台を有する。底部から口縁部にかけて、やや内湾気味にたちあがる。

第53図6は瀬戸系陶器の碗である。底部内面には目跡をみる。体部の内外面に黄緑色の釉を分厚くかけ、外面には釉だれもみられる。底部は糸切りによって切り離したのち、削り出しによって小さい高台をつくる。

中国製磁器類 第53図8・10・11は中国製の白磁である。8は平底の皿である。残存部分の全面に灰白色の釉をかける。10は碗である。削り出しによって低い高台をつくる。残存部分の内面に純白色の釉をかける。11は鉢であろうか。分厚く高い高台を有し、見込みの釉を輪状に掻き取



第52図 溝1出土遺物実測図1



第53図 溝1出土遺物実測図2

る。胎土は砂粒を多く含む。釉は黄白色を呈する。

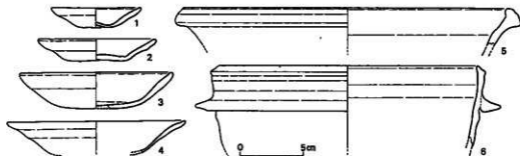
4. 溝 10 (第54図, 図版第14)

1) 遺構

F-10区の東北隅で検出した溝である。北は発掘区外に延び、南は貯水槽で断ち切られている。この溝の中に拳大の礫が多数詰められていた。肩部の幅は90cm、底幅は40cmで、断面形は整った背の高い逆台形を呈している。壁の崩落などは認められず、掘削されてまもなく礫を詰めたことが考えられる。これも暗渠であるかもしれない。

2) 遺物

出土遺物には、土師器・須恵器・瓦質土器がある。第54図1～4は土師器皿である。1・2はA₂タイプの小皿、3・4はB₂タイプの大皿である。5は須恵器鉢である。口縁部は上下に肥厚し、いわゆる口縁帯をなす。6は瓦質土器の羽釜である。外面は黒色、内面は淡褐色をそれぞれ呈する。



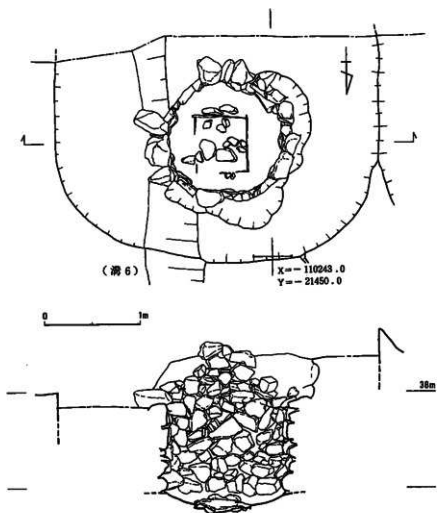
第54図 溝10出土遺物実測図

5. 井戸 11 (第56図, 図版第18)

S-3・4区で検出した、円形石組の井戸である。東寄りを溝6が大きく削っている。掘り方は隅丸方形で、南端が発掘区外になるためにわからないが、東西幅は3.4mを測る大きなものである。石組の内法径は1.2mである。石組に用いられた石は大半が一抱えほどのものであった。井戸底は浅い皿状で、底面にも扁平な石をまばらに敷いたような状態であった。中央部には、一辺が55cmの板囲いの水溜めが設けられている。

掘り方内の裏込め土は、砂礫と粘質土を数十cmごとに交互に埋めたものである。

この井戸からは、ほとんど遺物が出土していないが、構造から室町時代に属すると考えられる。



第56図 井戸11遺構実測図

6. 井戸 8 (第56・57図, 図版第19)

1) 遺構

9区のR-S区境で検出した、これも円形石組の井戸である。掘り方は円形で、掘り方径は1.3m、石組の内法径は0.8mを測る。ほとんど掘り方に接して石組がなされているため、裏込めはあまり丁寧にはなされていない。底面は標高にして36.7mである。これは井戸11とほぼ同じレベルである。

石組に用いられている石は、最も下部のものは大きい、上部は人頭程度のものが積まれている。底部には横板組の水溜めがつけられていたような痕跡はあるが、木質はまったく遺存していなかった。

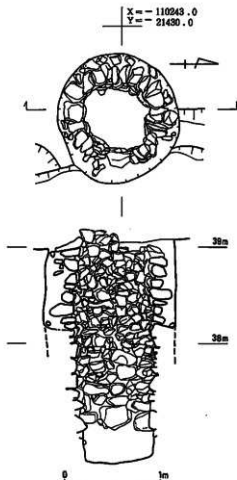
この井戸も構造などから室町時代に関すると思われる。

2) 遺物

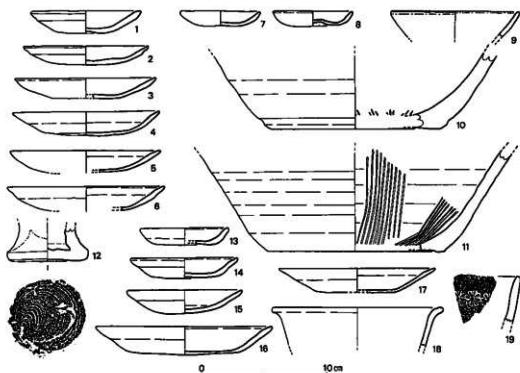
第57図12~19は井戸の掘り方内からの出土遺物、1~11は井戸側内からの出土遺物である。いうまでもなく、前者が井戸の掘られた時期を、後者が井戸の埋まった時期を、それぞれあらわしている遺物である。

第57図1~8は土師器で、1~3がB₂タイプの小皿、4~6が同タイプの大皿、7・8がEタイプの小皿である。9は中国製の青白磁の碗である。口縁端部の軸を削り取る、いわゆる口売げの碗である。軸は淡い青白色を呈する。10・11は須恵器のすり鉢である。10は内面の摩滅が著しい。

第57図13~15はB₂タイプの土師器小皿、16・17はB₂タイプの同大皿である。19は瓦質土器で、外面に花文をスタンプする。12は灰釉陶器の花瓶で、外面に黄緑色の灰釉がかかる。底部は板状で、底部外面に糸切り痕をみる。18は中国製の青磁の壺で、口縁部がゆるやかに外反する。軸は暗緑色を呈する。



第56図 井戸8遺構実測図

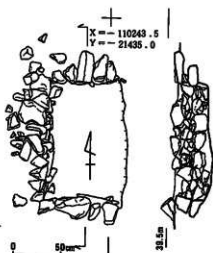


第57図 井戸8出土遺物実測図

7. 石室 1 (第58・60図, 図版第15)

1) 遺構

S-7区で検出されたもので、平面形は長方形を呈する。内法は南北1.2m, 東西0.8m, 検出面からの深さ0.4mを測る。北・西・南の3方には石積みがなされているが、東側には石積みが無い。本来の深さはわからないが、検出面での石組が比較的扁平な石を用いていることから、もともとこの程度の深さであったとも考えられる。石室の内部は、拳大から人頭大の大きさの石を投入して埋められたような状況であった。なお、この石室1は次の石室2の東半に重複して設けられている。



第58図 石室1遺構実測図

2) 遺物

土師器・瓦質土器がある。第60図3はEタイプ, 4はB₂タイプの土師器小皿である。5は土師質のすり鉢である。内面は使用による摩滅が著しい。口縁部内面は内傾する段をなす。1は土師器の鉢である。外面はオサエ調整する。2は瓦質土器の香炉である。底部に断面台形の足を

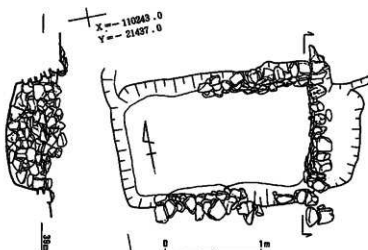
3本つける。外面に渦巻き文様を描く。

8. 石室 2

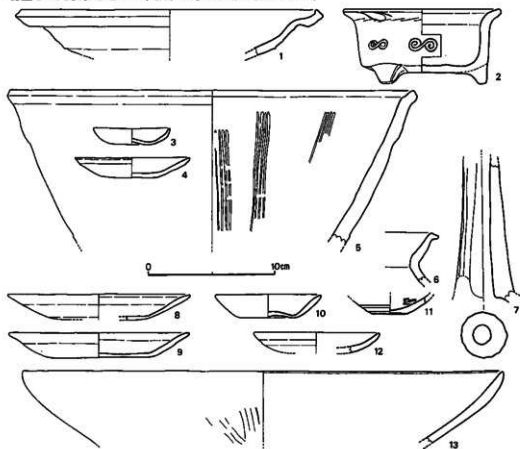
(第59・60図, 図版第16)

1) 遺構

内法は東西2m, 南北1.1m, 検出面からの深さ0.6mを測る。東面から北面にかけての石積みはよく遺存しているが, 石室1のために, 東南半部の石積みは破壊されていた。底面は中央部が少しくぼんでいる。積まれた石は, 石室1に比較するとやや小振りのものが用いられている。



第59図 石室2 遺構実測図



第60図 石室1・2 出土遺物実測図

2) 遺物

土師器・須恵器・中国製磁器がある。第60図8～10は土師器皿である。8・9はB₂タイプの大皿、10は同タイプの小皿である。7は土師器高杯、13は土師質の鉢である。内面に横方向のミガキ調整を施す。外面には刷毛目が残る。6は須恵器甕である。11は瀬戸系陶器の皿である。内面に平行線文様を施す。12は中国製白磁の皿である。口縁部はわずかに内湾気味に立ちあがり、端部は丸くおさめる。釉色は純白色を呈する。

9. 土坑 201 (第61～65図, 図版第20上)

1) 遺構

ほぼO・P-7・8区の範囲に重なる土坑である。全体としては方形を呈するが、もとからひとつの土坑ではなく、いくつかの土坑が連続したもののような状態である。それぞれの土坑は長径約1m、短径約0.6m程度とみられる。深さも一定しないが、いずれも地山の黄褐色粘土を掘り抜いたあたりで止まっているところから、土探り穴と判断される。東は土坑3によって切られているが、O・P-11区にも同様の掘り込みがあり、あるいはここまで続いていたものかと思われる。

埋土には多くの遺物が含まれていたが、特に南寄りで遺物が集中していた。なお、この土坑は室町時代に属するとみられるが、江戸時代でも窪地になっていたようで、埋土上部は暗褐色の粘質土が溜り、江戸時代の陶磁器類が含まれていた。

2) 遺物

土師器・須恵器・瓦器・灰釉陶器・緑釉陶器・中国製磁器・石製品がある。

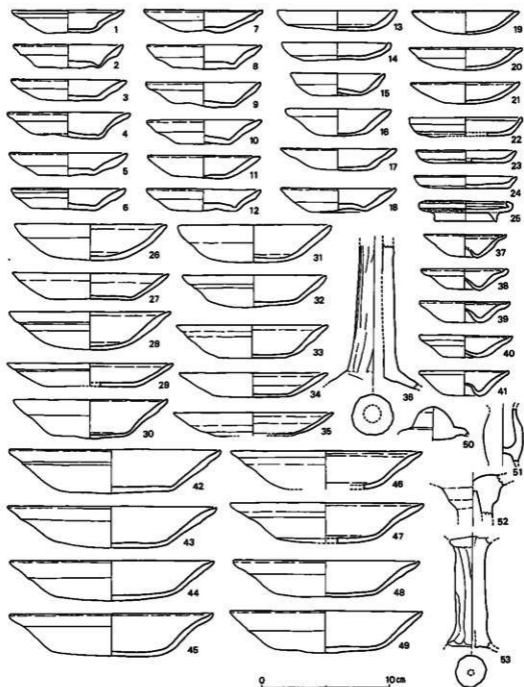
第61図1～35・37～49は土師器皿である。大皿・中皿・小皿の別がある。大皿(42～49)はB₂タイプの製品である。中皿(26～35)も同タイプの品とみてよからう。小皿(1～25・37～41)には、A₂タイプ(22～24)、A₃タイプ(1～14・17・18)、B₂タイプ(37～41)、B₁タイプ(15・16・19～21)、Dタイプ(25)がある。B₂タイプの品は、いわゆるへそ皿である。25はDタイプの小皿ではあるが、通常の品に断面三角形の高台を付けるものであり、類例を知らない。その高台は、粘土紐を輪状に貼り付けただけの粗雑なものである。

第61図36・52・53は土師器高杯である。脚部を多方向に面取りする。36・52は赤褐色を、53は白褐色を、それぞれ呈する。第61図50は土師器蓋である。つまみ部分のみが残存する。つまみは断面半球形を呈する。51は土師器である。小型の瓶子であろうか。

第62図1～4、第63図10・12～15は瓦質土器の釜である。羽釜(第62図1～4、第63図10・12・13・15)と、つばをもたないタイプの釜(第63図14)とがある。

第62図5～7・9・10は瓦器である。碗(5～7・9)と小皿(10)がある。碗は、半球形の体部に、断面三角形の小さな高台を付ける。口縁端部は丸くおさめる。小皿は、平たい底部と、外反する口縁部からなる。内面に暗文を施す。

第62図11は須恵器の甕である。口頭部はゆるやかに外反する。

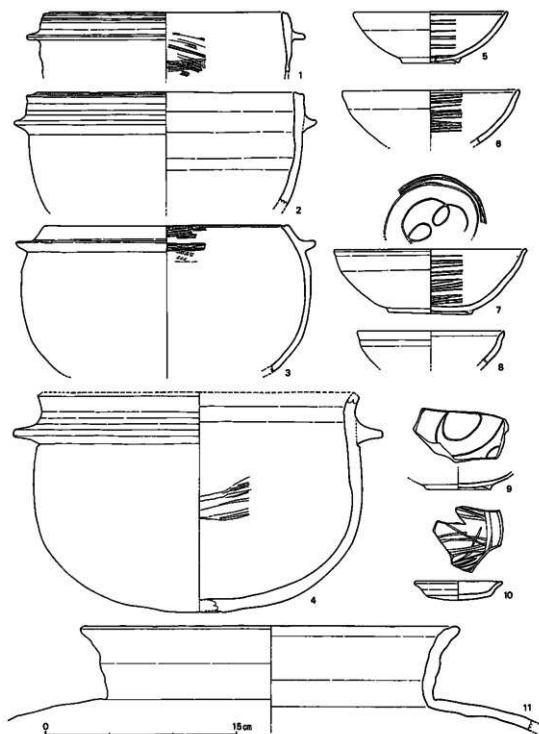


第61図 土坑201出土遺物実測図1

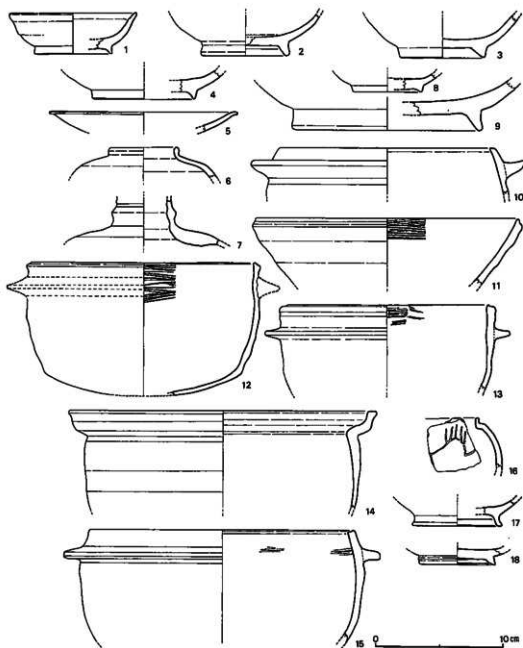
第63図7は瀬戸窯系の瓶子である。黄緑色の釉をかける。第62図8は天目茶碗である。

第63図1～6・8・9・16は灰釉系陶器である。1～4は碗，5は皿，6・16は短頸壺，9は壺である。5は内外両面に施釉するが，そのほかのものは斑点状に釉がかかるのみである。

第63図17・18は緑釉陶器の碗である。17はわずかにふんばる長い輪高合をもち，焼成は須恵質，



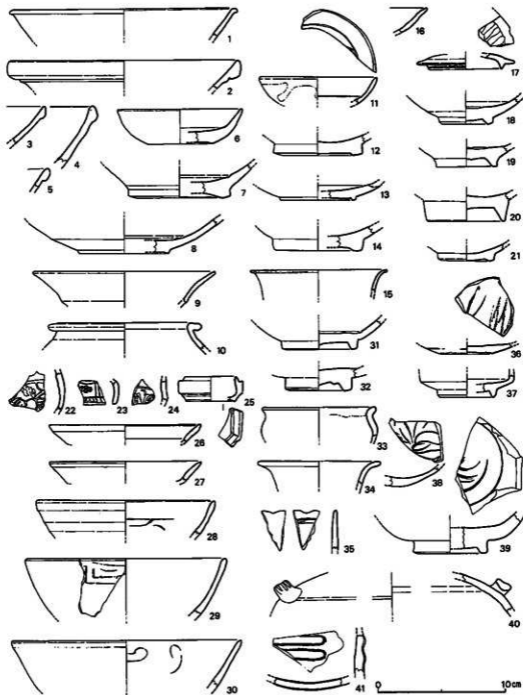
第62圖 土坑201出土遺物実測圖2



第63図 土坑201出土遺物実測図 3

釉は緑色を呈する。18は端部内側に内傾する面をもつ高台を付け、底部には糸切り痕がのこる。焼成は土師質、釉は濃い黄緑色を呈する。

第64図1～5・7・8・10～14・16・18～21・40は中国製の白磁である。碗(1～5・7・8・12～14・16・18～21)・皿(11)・壺(10)・四耳壺(40)がある。碗は、口縁部の形態からは、玉縁口縁をもつもの(2～5)と、外反する口縁をもつもの(1・9・16)とにわけられ、高台の形



第64図 土坑201出土遺物実測図 4

態からは、高い高台をもつもの(20)と、低い高台をもつもの(12~14・18・19・21)とにわけられる。14は見込みの軸を輪状に掻き取る。

第64図6・9・15・17・22・24・25は中国製青白磁である。6は皿、9は碗、15は壺、17は蓋、

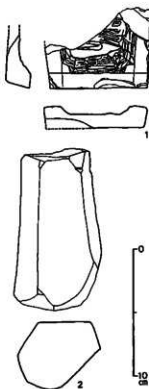
25は合子である。22・24は器種がわからないが、外面に繊細な浮き彫り文様を描く。25の合子は受部の平面形が八角形を呈する。

第64図23・26～39・41は中国製青磁である。多くは龍泉窯系の製品である。蓋(23)・碗(28～32・35・37～39)・皿(26・27・36)・小型壺(33・34)・香炉(41)がある。23の蓋は、外面に繊細な浮き彫り文様を描く。口縁端部には軸がかからない。31の碗は、見込みの軸を軸状に掻き取る。35の碗は、口縁部に輪花状のくぼみをみる。36の皿は、内面に列点文様を施す。41の香炉は、外面に突帯をみる。

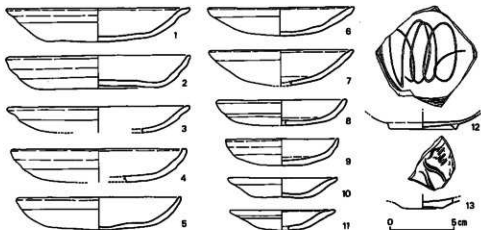
第65図は石製品で、硯の未成品(1)と、砥石(2)とがある。前者は粘板岩製である。池部の範囲を直線で区画し、その中を工具で丹念に彫りこんでいる。後者は砂岩製である。5方向に砥面をつくる。

10. 土 坑 154 (第66図)

土師器・瓦器・中国製青磁が出土した。第66図1～7は土師器大皿である。これには、B₂タイプの品(1・3・6・7)と、A₃タイプの品(2・4・5)とがある。8～11は土師器小皿で、いずれもA₃タイプの品であるが、8・9は古い時期のものであろう。12は瓦器の碗である。断面三角形の小さな高台をもつ。13は中国製青白磁の皿である。内面に桃描きの文様をみる。



第65図 土坑201出土遺物
実測図5



第66図 土坑154出土遺物実測図

第5節 江戸時代

1. 土坑 3 (第67～69図, 図版第22)

1) 遺構

9・10区で、北区から南区までを通して検出された、幅約6mの大きな堀状の土坑である。北はG区で端を確認したが、南は発掘区外に延びており、検出部分だけでも50m以上になる。東西の壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。土質の脆いところでもほとんど崩落が認められないことから、掘削された後、あまり時間をおかずに埋め戻されたと考えられる。埋土下層には厚い灰の層があり、この多量の灰は東の高倉通側から投棄された状況である。また、灰層中から出土した陶磁器類が火を受けていることから、大火後の処理を行ったものとみられる。



第67図 土坑3出土遺物実測図1

2) 遺物

土器類 第67図1～4は灯明皿である。いずれも口縁部の数か所に油煤が付着している。焼成は良好で、1・2は淡白褐色、3・4は淡褐色を呈する。5・6はロクロ成形による土師器碗で、底部はヘラ切りである。焼成は良好で、白色を呈する。

7～14は焼塩壺の蓋と身である。焼塩壺の形態分類は、以下、渡辺誠氏の分類²⁴⁾に従う。7・9・11・13は蓋で、いずれも内面に布目痕を残す。7は蓋A類、9は蓋B類で、11・13も器蓋が

薄いがB類に含まれよう。9の上面には「やしはつほ」の墨書がある。身も内面にいずれも布目痕が残る。8は輪積み法で成形された小型の、身G類である。10は身A類で、輪積み法で成形されている。外面は板状のもので押さえて整形されたのか、不均整な多角柱状を呈する。口縁はナデ調整され、外反気味である。12はやや小型であるが、身B類に含まれよう。「泉渡伊織」の印が押されている。14は身H類である。外面にかすかにクロロ目が認められ、「泉州麻生」の刻印がある。なお、土坑3出土の焼壇壺の中では、身A・H類が多い。

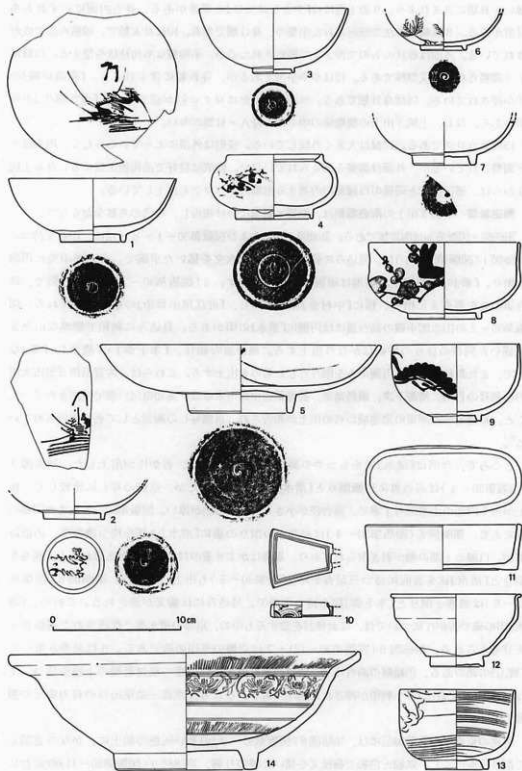
15はホウロクである。口縁は大きく外反している。成形は外型によっているらしく、内面はナデ調整されているが、外面は調整を加えられていない。焼成は良好で淡褐色を呈する。なお土坑3からは、第70図37と同様の口縁部の内湾する形態のホウロクも出土している。

陶磁器類 土坑3出土の陶磁器類は、陶器・磁器に分け報告し、年代の考察をおこなう。

第68図・図版第30は陶器類である。第68図1～7および図版第30-1～8・12は、印銘を持つ。第68図1(図版第30-1)は、見込みに焼繪で簡略な山水文を描いた平碗で、高台裏中央に円圏を削り、「新」の印を押す。素地は緻密で、卵色を呈す。2(図版第30-3)は同種の碗で、高台裏中央を渦巻きに削り、横に「中村金」の印を押す。「近江屋小兵衛」の墨書が記される。図版第30-2の山水図平碗の高台裏には円圏に「富永」の印がある。見込みに焼繪で簡略な山水文を描いた同様の作りの平碗はかなり出土する。高台裏の銘は、「木下弥」・「清水」・「柴」などで、また無銘のもの、円圏のみを削りだしたものも出土する。これらは、佐賀県伊万里市大川内の御経の石窯、清源下窯、鍋島藩窯、長崎県佐世保市木原窯、高知県尾戸窯で生産されていたこと、京都も含め関東の諸地域からの出土が報告され、京焼写しの陶器として近年注目されている²⁵⁾。

ところで、今回は「清水」銘をもつやや異った作城の平碗や、香炉片が出土した。第68図3(図版第30-4)は高台裏に円圏削りと「清水」銘を持つ平碗だが、京焼の写しに比較して、胎土が白く内面の山水図も丁寧で、高台径が小さく、底部の胎が厚い。図版第30-5もまた同様の碗である。第68図5(図版第30-4)は渦巻きの削りの胎に「清水」の銘を持つ遺物で、内面は露胎、口縁の上部の釉が剥ぎ取られており、器種はかぶせ蓋の付いた香炉かと思われる。渦巻き削りと「清水」銘を裏面に持つ三足香炉片(図版第30-5)も出土している。第68図5(図版第30-6)は渦巻き削りと「木下弥」銘を持つ平皿で、見込みには線文が施される。これら、「清水」印の碗や香炉片については、なお検討を要するものの、京都の清水窯で作成された可能性も充分考えられる。第68図6(図版第30-12)・7は京焼の窯印の碗である。6は渦巻き削りに「賣山」の銘のある、色絵碗の高台片で、青色の茎と根に水色の葉の根付若松の上絵を持つ。7は高台内に「岩倉山」の小判印が押された碗片である。これらは京都三条栗田口の有力窯元の製品である。

無銘の京都産の陶器製品には、第68図8(図版第30-9)の粗い灰色の胎土に、かなり意識して削り目をのこし、鉄絵と白彩で梅枝文を描いた腰張り碗、第68図9(図版第30-11)の高台に円圏削りを持つ、卵色の素地に緑と朱、青色で松文を上絵付けした碗、第68図10(図版第30-13)



第68圖 土坑3出土遺物実測図2

の外面に青と金彩で青海波文を描いた洒落た意匠の扇型香合、見込みで鉄絵と白彩で蕨文を描いた平皿(図版第30-10)、染付や白彩、鉄彩を配した竹と虎文の型作り水漬(図版第30-14)等があげられる。その他にも京都の栗田・清水・五条の各窯業地で生産された、焼絵や染付、色絵の懐石具などが出土している。京焼製品は土坑3出土陶器のなかでも、かなり作振りもよく上手の物と思われるが、一方日用の生活用具としての陶器も多量に出土した。第68図11は、黄釉掛けの甕蓋、第68図12(図版第30-16)は黒釉天目碗、図版第30-17は長石釉の掛かった片口である。これらの生産地は美濃・瀬戸系かと思われる。

ところで、陶器では唐津系の出土が最も多い。第68図13(図版第30-18)は、疊付きを残して高台裏まで施軸した唐津系の刷け目の碗で、第68図14(図版第30-24)は中央に砂目跡のある唐津系の三島手大皿である。このタイプの碗と皿が器種としては大部分を占めるが、加えて、内面に緑釉を、外面には透明釉を掛け、内面の中央の軸を輪状に切り除いた小皿(図版第30-19)、同じく輪状に軸を除いた、灰色の胎に白土で文様を描いた中型皿(図版第30-20)など、重ね焼きの粗雑な皿類や、刷け目の片口(図版第30-22)も出土した。うち、図版第30-19の緑釉皿は佐賀県嬉野町内野山西窯からの出土が確認されている。

備前系、丹波系、信楽系の日用雑器も出土した。図版第30-24は備前の、いわゆる「へそ徳利」と呼ばれるもので、削り目を強く残した肩の張った徳利の中央に大黒像を張り付け、赤褐釉を掛けている。図版第30-25は、丹波系の大徳利で、図版第30-26・27は信楽系のすり鉢、図版第30-28は備前系のすり鉢である。備前、丹波、信楽系の陶器は徳利、すり鉢などの器種が多いが僅かに皿、片口、碗などもみられる。

第69図は磁器類、図版第31は国産の染付・白磁・青磁、図版第32-1~20は国産色絵磁器と中国陶磁器である。土坑3出土の国産磁器類は陶器同様に肥前系磁器、すなわち伊万里が大部分を占め、器種は、碗・皿・盃・徳利等の食器類が多く、香合・香炉・壺・人形なども認められた。図版第31-1~5までは伊万里青磁片である。1・2は内面に陰刻文のある大皿片、3~5は香炉片で、3は瓢箪型の双耳を持つ竹節香炉、5は内面まで施軸した三足香炉で、両者とも底部に赤錆が塗られている。香炉片は軸調も成形もかなり整っており、出土の青磁片はこの様式が多いが、1・2は軸の色も成形も粗略で胎の厚い、いわゆる初期の伊万里タイプに属するかと思われる。第69図1(図版第31-7)の葉文の染付皿、図版第31-6の山水文染付皿もこのタイプの染付に属す。

初期タイプの染付遺物は、その他に数点みられるが、量的に多いのは軸・成形も整った伊万里磁器で、共通の形式をもつ各器種がまとまった量で出土している。第69図2(図版第31-12)は竹と五葉若草重文の染付碗で、低く安定した高台を持ち、胎は薄く、呉須の発色も良好で、疊付きを残して全面に透明の光沢のある釉がかかる。高台裏には円圖の中央に「大明年製」の染付銘を持つ。図版第31-13も同じタイプで、唐草の地に牡丹文、高台裏には円圖に銘を持つが、銘文は読み取れない。図版第31-10は、薄作りの端反り碗で、見込みには草花文、外面には草に樓閣、高台裏には「宣徳年製」の銘を持つ。土坑3では、裏に銘があり、側面に多彩な文様を鮮やかな

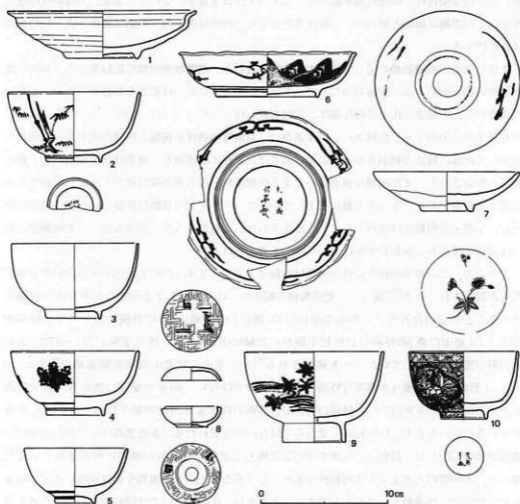
呉須で描いた、薄作りの上手碗の出土が特色といえる。第69図3(図版第31-14)もこの形式の口縁に鉄釉が塗られた白磁碗である。これら上手碗に増して多量に出土するのは、分厚い底部を持ち、軸は厚く、呉須の発色も悪く、文様も簡略な草花文か、コンニャク判で同一文様を押しした日用雑器のいわゆる「くらわんか茶碗」である。第69図4(図版第31-15)はこのタイプで、外面に5個の桐文がコンニャク判で押されている。第69図5(図版第31-16)も小型だが同形式で、口縁に紙彫刷の柳葉文様がある。図版第31-17はさらに質の落ちる碗で呉須の発色は極めて悪く、壺付きには砂目が付着し、見込みには輪状の重ね焼きの目跡が認められる。文様は簡略な山水である。

磁器の器種別の出土量は碗が最も多く、皿類がそれに次ぐ。第69図6(図版第31-19)は、見込みに唐草文、縁部に山並が描かれた端反りの染付皿で、文様は丁寧に描かれ染付の発色も良い。裏面の縁部は唐草と野線が巡り、高台の側面には二本の野線が、高台裏は円圏に「大明成化年製」の染付銘が記される。図版第30-18は小型の口紅を持つ唐草文の皿だが、高台裏は6とほぼ同形式の文様で銘は「大明年製」である。図版第30-20は中央に団龍文、縁部に牡丹文が描かれ、背面は同形式で銘の部分は欠損している。図版第30-30・31は伊万里大皿で、それぞれ、丁寧に筆使いで内面に文様が描かれる。背面の文様形式は、小皿類と同様であるが30は「福」字銘を持ち、31は無銘で5個のトチ目が附く。

上記の皿は、共通して薄造りの胎に、光沢をもった透明釉が均一に掛かり、呉須の発色もよい。内面の文様は多彩だが裏面はほぼ同形式である。これに比べて、底部が厚く、見込みの文様は簡略化され一部は判押しの日用の皿類も多量に出土した。第69図7(図版第31-21)の皿は胎・底部共に厚く、質も粗雑で、内面には輪状の重ね焼きの目跡が残る。軸掛けも内面のみで、背面は殆どが露胎している。錆絵で縁部に文様を描くが崩れてその種類は判然としない。この皿は素地と釉が異なるだけで、前述した内野山西窯産の緑釉の皿と酷似しており、西窯に隣接する長崎県の佐佐見窯からの出土が確認されている。図版第31-22も胎の厚い皿で、見込み中央に五弁花のコンニャク判が押され縁部の文様は型刷りである。図版第31-23も見込み中央に五弁花が押された皿で、縁部には簡略な竹と扇文が描かれており、作りは22とほぼ同様である。

また碗・皿類の他に薄造りの酒盃(図版第31-8・9)、厚い器胎の仏飯器(図版第31-24・25)や徳利(図版第31-26~28)、白磁の大型壺付き壺(図版第31-29)、陽刻の祀業文の所々を染付で彩色した型造りの香合(第69図8・図版第31-11)等の伊万里白磁、染付が出土した。

第69図9・10および図版第32-1~13は色絵磁器である。第69図9(図版第32-1)は高台の高い白磁碗の片側面に青と緑で流水を描き、緑、青、赤の紅葉を散らす。流水と紅葉の一部を黒色で線取る。第69図10(図版第32-2)は染錦手の上質な小碗で、口縁の帯状の文様と高台の外側と高台脇の野線、高台裏の「大明年製」銘を染付で描き、外面の地文、窓の部分の牡丹文、内面の桜花を赤で、窓内の地文は緑で上絵付けし、加えて口縁や桜・牡丹の花に効果的に金彩を施す。これは、形態も文様の構成も上述した染付の上手碗に類似する。図版第32-3は腰の張った碗に余白を残して染付と赤、緑で枝柿の文様を描く。図版第32-4・5は染錦手の碗片、図版第



第69図 土坑3出土遺物実測図3

32-6・7は色絵盃片で、6は内面に赤色で和歌を書きその間に赤と黒で桜花を散らす。7は側面に桃色と赤、金彩で松、水仙、桜などを描く。図版第32-8は見込に輪状の目跡を持つ皿で、緑・赤・黒で梅花等の花文を描く。図版第32-10は赤色の網目文の徳利である。図版第32-2～7の遺物はいずれも薄造りで、色絵は丁寧で繊細だが、8・10の文様は簡略で、胎は厚く、9の素地は灰色に近い。図版第30-9は染付竹図の輪郭の一部を赤と金彩で緑どった皿である。図版第32-11は鴛鴦形の色絵水筒、図版第32-12もその器形は定かでないが彫塑的なものと考えられる。以上の遺物は伊万里物と思われるが、図版第32-13図は高台径約6cmの青手の古九谷高鉢で、鉢の内面は黄地に黒点文、高台の外側も黄地に黒渦巻き文、裏面は黄地に黒色の花文と緑色の唐草文が施されている。図版第32-14～23は中国産の陶磁器である。14～16は15～16世紀の染付碗

片。17は呉須染付片、18は呉須赤絵片で、19・21・22は芙蓉手の染付片である。20は明代の法花片で、その器種は鉢かと思われる。胎は茶色を呈し、内面は青色釉、外面は濃紺・青・白色釉の3色が掛かる。

土坑3出土の陶磁器類に関しては、生産地側の資料と、消費地側の焼亡記録等から、年代推定と疑問の提示ができる。陶磁器のなかで、多量に出土しているのは肥前系陶磁器であり、生産地の調査から、大橋康二氏が詳細な編年と問題提起を行っている²⁶⁾。今回の出土品のうち、氏が17世紀後半から出現すると指摘されている遺物は、京焼の唐津系陶磁類と内野西窯や波佐見窯から出土した内面に輪状の釉刺ぎがある皿で、前者は18世紀には消滅し、後者は18世紀前期まで続く形式と推定された。また皿類の裏面のハリ支えの焼成跡・高台裏の染付銘なども17世紀後半から出現する特徴であり、さらに多量に出土しているコンニャク判の装飾技法は、18世紀の前半に流行し、宝暦・天明期には廃れてしまうと推定された。これからみて、土坑3出土の肥前陶磁の形式は17世紀後半から18世紀にかけてのものかと考えられる。

ところで、この地域の18世紀代の火災は記録の上で宝永5年(1708)と天明8年(1788)の2度の大火が確認されている²⁷⁾。従って、肥前陶磁の編年からは、土坑3は宝永度の大火の灰の廃棄坑とみることが妥当だろう。だが京都粟田口の「寶山」・「岩倉山」の印銘碗の出土にやや疑問が生じる。「粟田口焼」の呼称は17世紀中期から記録に出現し²⁸⁾、正徳～享保(1711～1735)頃には13軒の窯元が活動していたことも確認される²⁹⁾が、宝山、岩倉山両家の開窯期や両家が「宝山」、「岩倉山」と名乗った確実な時期はいまだ明瞭ではない。両家が粟田口窯の有力窯元に成長するのは、宝暦6年(1756)に銚屋(岩倉山)吉兵衛が將軍家御用焼物師を拝命した³⁰⁾と伝承されている点からみても、18世紀の中葉からではないかと思われる。また寛政11年(1799)の粟田口職方仲間の「定」には、岩倉山吉兵衛や宝山安兵衛・文造などの名前が確実に列記されている³¹⁾。従って、天明度の大火まで下る可能性もあり、してみると土坑3の遺物全体は両度の大火に挟まれた80年間の一括遺物ということもできる。ともあれ、年代については同時期の京都を含めた諸地域の消費地道跡との比較において、結論を出す問題だと考えている。

2. 土坑 32 (第70～72図)

この土坑はO-10区で検出した、ゴミ処理穴かと思われる土坑である。平面形は径約1.5m程度の不正円形で、深さ約1mほどである。比較的まとまって遺物が出土しており、後述の溝6出土遺物と同時期と考えられる。この土坑は、土坑3の肩部を切ってその埋土に掘り込まれていることから、多量の遺物の出土した土坑3と溝6の前後関係を確かにする意味も含めて遺物を紹介する。

土器類 第70図1～13は皿である。1は内面に刻み目をみる。2～13は灯明皿で、6・12には口縁部に灯芯の痕跡が残る。全般的に焼成は良好であるが、10～12はやや軟質の製品である。2・5～7・13は淡赤褐色、3・4・8・9は淡黄褐色、10・12は白褐色、11は明褐色を呈する。13は底部外面に墨書のみ、焼成後に小孔をあける。20～22は口縁部に刻み目のある皿で、いずれ



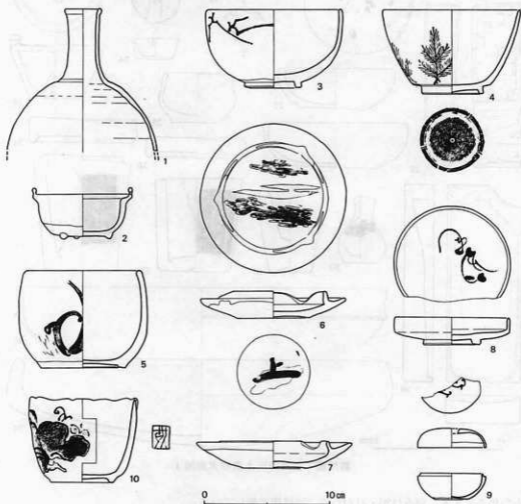
第70図 土坑32出土遺物実測図1

も白色を呈する。刻みは20・21がヘラ、22は指で施している。

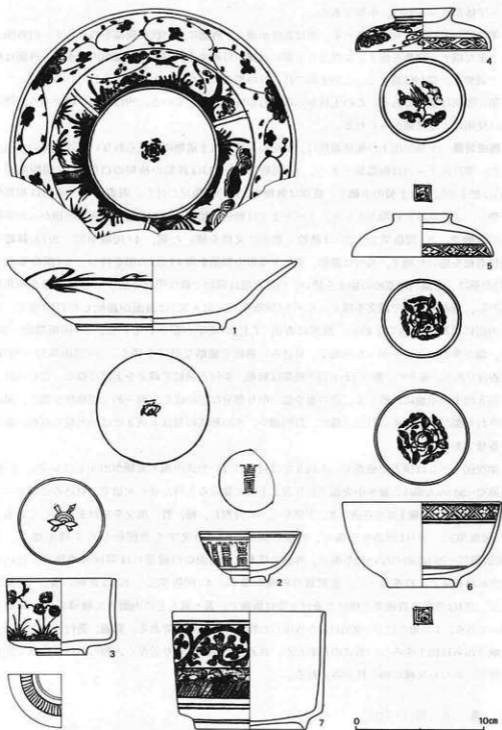
第70図14は小型の皿で、全面に黄釉がかかる。15は小型の碗で、いわゆる化粧碗である。内側

に黒色の絵具が残る。16は小型の碗で、外型成形し、黄釉をかける。17~19は白色を呈する小型壺である。19の体部外面には墨書がある。23は黄釉のかかった皿で、外面を型造り成形する。内面には緑色釉で文様を描く。24・26は灯火具である。24は内面に黄釉をかける。中央の穴の部分にスの付着をみるものもある。26は外面に黒褐釉を施す。25は小型碗である。ロクロ成形で、白色を呈し、内外面に墨書をみる。27~29は碗で、ロクロ成形している。27は軟質で淡灰褐色、28・29は白色を呈する。30はロクロ成形の小型瓶である。体部外面には緑色釉で文様を描き、その上から黄釉をかける。

第70図31~35は焼塩壺である。31は身E類で、底部と胴部を同時に型づくりする。内面には布目がのこり、布の継ぎ目が明瞭にみえる。外面は横ナデ調整する。32・34は蓋B類である。内面には布目痕がのこる。外面は横ナデ調整する。33・35は身C類である。蓋受け部分は退化し、わずかに残るのみである。内面には布目痕がのこる。外面は横ナデ調整し、底部には板状圧痕がの



第71図 土坑32出土遺物実測図 2



第72圖 土坑32出土遺物実測図3

こる。胴部に『泉流伊織』の刻印が押される。同銘刻印は土坑3出土品にもあるが、それに比べると字体が丸みをおび、小型である。

第70図36・37はホウロクである。36は器壁が薄く、外面にツバ状の突帯をめぐらす。内外面とも丁寧な横ナデ調整を施す。突帯より下部には煤が付着する。37は口縁部が内溝する。外面は横ナデ調整で、煤が付着する。この土坑では、37の型式のホウロクが多数出土している。

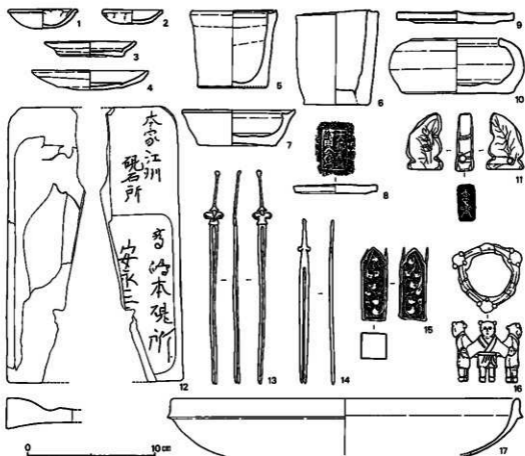
第70図38は砥石である。この土坑からは砥石が1点出土している。39は石製の硯である。陸部には使用による摩滅がみられる。

陶磁器類 土坑32出土の陶磁器類は、前記の土坑3出土遺物には見られない形式のものが出土した。第71図1～10は陶器類である。1(図版第32-24)は鉄軸の徳利の口部、2(図版第32-25)は把手の付いた土製の小鍋で、底部は無軸で三足の三角足が付く。両者とも、成形は規格的で整い、よく溶けた鉄軸がかかる。3～9までは卵色の胎土に、よく溶けた灰軸が掛かった京焼系の遺物で、3(図版第32-28)は錆絵で側面に文様を描いた碗、4(図版第32-29)も錆絵で根付若松を描いた碗で、高台は露胎、裏に五条坂の製品を現す「京」の印を持つ。5(図版第32-26)の碗は、意識的に荒めの胎土を使い、内部と底は露胎で底は円形に削り出し、口縁を四角に成形し、側面に錆絵で蔵文を描く。6・7(図版第32-31・32)は裏面が露胎した灯明皿で、6の内面には緑と白色で上絵が、底部は青色で「上」の文字が記されている。8(図版第32-30)は、端が垂直に立ち上がった小皿で、見込みに錆絵で簡略な草文を描く。9(図版第32-29)は丸香合である。薄手で、蓋の合わせ目と底部は無軸、染付と錆絵で蔵文を上部に描く。これらは、土坑3出土の京焼と比較して、高台臺や皿の削り部分などの成形が画一的で規格性が強く、量産化された製品かと考えられる。殊に、灯明皿や、8の形式の皿は土坑3には殆ど見られない新しい器種である。

第72図1～5は伊万里磁器で、土坑3では見られない形式の碗・皿類が出土している。1(図版第32-34)の大皿は、縁を中央部で折り返し下部に膨らみを持たせた大皿で、見込みにコンニャク判の花文を、口縁上部を花唐草文、下部を三つに分割し、松、竹、梅文をそれぞれ描いている。2(図版第32-36)は薄造りの碗で、内面と側面に『寿』の文字を意匠化した文様を描く。3(図版第32-39)は胎の厚い筒型碗で、外面に草木文、内面の口縁部には帯状の連続文、見込み中央には花文とそれを巡って二重野線の内圓を描く。4(図版第32-35)は飯碗の蓋、5(図版第32-37)は外面に青磁薬を掛けた蓋付き染付飯碗で、蓋・碗ともに内面の文様構成は、筒碗と同一である。また蓋の把手の部分は縁が外反した特徴のあるものである。筒碗、蓋付き碗ともに、土坑3からは出土をみない形式の器形だが、共通して胎はかなり分厚く、釉の溶けは良好で光沢を持ち、かなり文様に画一性がみられる。

3. 溝 6(第73・74図)

4・5区のO～S区にかけて検出した、南北方向の溝である。断面形は逆台形を呈し、両側の幅は約7m、深さ約1mの規模である。南は発掘区外に延びているが、北はO区で端を確認した。



第73図 溝6出土遺物実測図1

溝の埋土は上層が褐色，下層は暗青色の粘質土で，上下層とも多量の陶磁器類などの遺物やスポンの骨も含まれていた。ただし，土坑3のように一気に埋められたものではなく，ある時間をかけて埋没していったものと思われる状況であった。

土器類他 第73図1～4は皿である。1・3・4の口縁部には灯芯跡をみ，灯明皿として使用されたことがわかる。1・2は型づくりで，1は外型，2は内型で成形している。2の内面全面には蜜母粉が付着する。5～10は焼塼壺である。5は身J類で，ロクロ成形し，蓋受け部が退化しきった製品である。6は身C類で，内面に布目痕が残る。蓋受け部は退化し，わずかに認められる程度である。7はやや異形であるが，焼塼壺の身と考えてよいであろう。8は蓋で，外面に「大佛瓦師 蒔田又左衛門」の刻印が押されている。9も焼塼壺の蓋であろう。内面をヘラケズリする。10は身J類であろう。17はホウロクである。器壁は薄く，外面にツバ状の突帯がめぐる。内面には使用痕が認められ，外面の突帯部より下部には煤が付着する。他にホウロクは，第70図37のような口縁部が内湾する形態のものも出土している。

第73図11は，石製の印判である。印面は「宮森」と読める。12は粘板岩製の硯である。裏面に

『本家江州 硯石所 高嶋本親所 安永三(以下欠損)』の銘がはいる。13・14は骨角製のかんざしである。13は柄に奴を形づくり、柄先を耳かき状につくる。第73図15は、金銅製の飾金具で、下面には文様がない。内部には薄く木質がのこる。16は銅製の蓋置である。3人の童子が手をつないだようすを形どった、いわゆる三ッ人形の製品である。

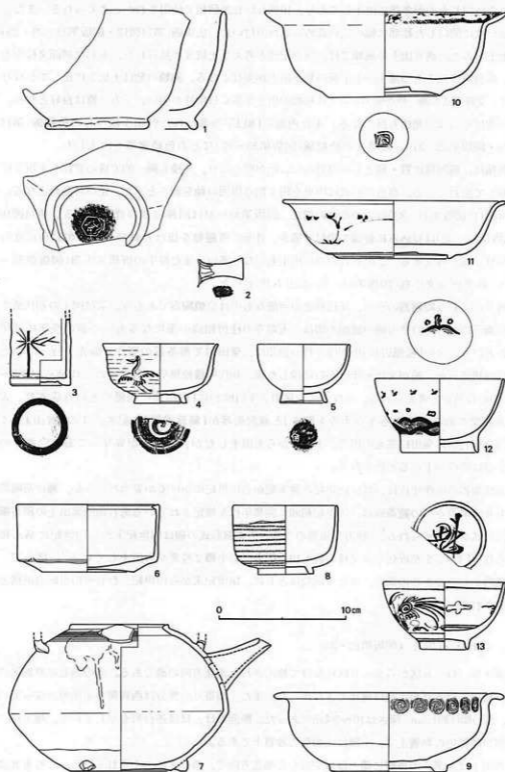
陶磁器類 溝6出土の陶磁器の中には鉄軸の把手付き土鍋、規格性の強い灰釉の京焼系の碗や皿、多量の伊万里染付の筒型碗や、蓋付きの飯碗、『寿』の文字を意匠化した文様の碗・皿類がみられ、従って溝6は土坑32と同時期の遺構かと考えられる。

第74図1～9は陶器類で、1～5までは印銘を持つ。1(図版第33-7)は底部の中央に『清』の亀甲印を持つ唐津写しの三角碗で、五条坂建仁寺鐘鉢町に窯を持った京焼の陶工初代清水六兵衛窯の製品である。2(図版第33-11)は煎茶の焼締急須の把手の部分で、『松風店』の小判印を持つ。3(図版第33-12)は底部に『寶山』長方印のある錆絵竹文の竹節型巾筒、4(図版第33-1)は赤色の胎土に白泥と錆絵で鶴の文様を描き、意匠的に削り目を残した煎茶用の茗碗で、『岩倉山』の印が高台裏にある。5(図版第33-4)も煎茶用の茗碗で高台裏に『久田』の印銘を持つが、窯は明らかではない。これらは京焼系遺物だが、その他に無銘のものでは、赤色の胎に白泥で兔を描き内面を白化粧した煎茶茶碗(図版第33-2)、内外面に白色の刷目目を施した茶碗(図版第33-3)、白泥のイッチンで文字を装飾した茶碗(図版第33-5)や抹茶茶碗(図版第33-6)、枝菊文を貼り付けた型作りの水滴(図版第33-8)、卵色の胎土の錆絵桜樹文三足水指(図版第33-9)、緑釉均立て(図版第33-10)、内面を鉛釉、外面を白く塗り錆絵の文様を描いた燗鍋型の小型水滴(図版第33-13)、段重、陶製の炉、釘隠しなどの多様な器形と意匠をもつ逸品茶器や陶製文房具が出土している。

また、日用に使用したと考えられる京焼系の陶器も出土した。それらは、土坑32出土と同形式碗類を始め、器胎の中央に錆絵で帯を回した筒型碗(図版第33-15)、平蓋を伴ったベタ底の蓋物(第74図6・図版第33-14)、腰を極端に張らせた算盤玉状の胴を持ち、底に三足の三角形の足を付け、口縁に数本のカンナ目をまわした土瓶(第74図7・図版第33-17)などである。図示した土瓶は鉄軸掛けだが、灰釉の土瓶も出土している。興味深いのは7の胎には焼成時に融着した灰釉の薄片が見られることで、土瓶製品は同一の窯で鉄軸も灰釉も多量に焼成されたことが分かる。

その他、まとまった量で出土している陶器は、産地不詳だが光沢のあるワラ灰釉と鉄軸を流し掛けした天目型の碗(図版第33-18)、瀬戸本業窯で製作された、胴体の下部に多数のカンナ目を入れ、口縁部に鉄軸、胴部に灰釉を掛けた鍍茶碗(第74図8・図版第33-19)、口縁部に印花文をめぐらせた黄釉の盃(第74図9・図版第33-20)、また、体部に印花文やカンナ目の流水文などを付け、緑釉を流し掛けた黄釉の水壺などがみられるが、土坑3で多量に出土した唐津系の刷毛目陶器がほとんど見られない。

溝6からは多量の伊万里染付磁器も出土している。土坑32と同タイプの、染付筒碗(図版第33-23・24)蓋の把手の形態や内面の文様に特色を持つ飯茶碗(図版第33-23・24)などの碗類、



第74图 溝6出土遺物実測図2

これらは同じものが多量に出土しており、10個ないし20個組で使用されたと考えられる。また、ラッパ状に開口した胎部に幅の広い高めの高台の付いた、広東碗(第74図12・図版第33-28・29)の出土もまた。溝6出土の碗類では、18世紀代と考えた土坑3に見られた、多彩な側面文様をもち、高台裏に銘をもつ薄手の上手碗の類が出土が少なくなる。碗類の胎は土坑3に比してかなり厚く、文様形式も画一性を強め、ことに組物の出土が多く日用性が強い。一方、質は良好となり、釉の溶けや呉須の発色も良くなる。また内面に「魁」字の書かれた呉須赤絵写しの色絵碗(第74図13・図版第33-21)、瑗珞文の色絵碗(図版第33-22)などの色絵磁器も出土した。

皿類は、碗同様に質・釉ともに良質だが、胎が厚くなり、文様も画一的で底の書銘も土坑3に比較して削れてくる。高台の形式は中央を円く削り周囲の釉を剥ぎとった、蛇の目高台となる。第74図11(図版第33-33)はこの高台の皿で、図版第33-34は同種の皿の背面である。第74図10(図版第33-32)は見込みに軒端を染付で描き、外面に青磁釉を掛けた鉢で、縁部が直角に立ち上がり、端が外反する。この形式の皿の出土もかなり多い。また厚手の唐草文小皿(図版第33-35)、蕨手唐草文小瓶(図版第33-30)なども出土した。

溝6の多彩な陶磁器のうち、年代推定の可能なものは京焼陶器であろう。第74図1の初代清水六兵衛(1738~1799)作の碗の底面の印は、天竜寺の桂州和尚の筆になるもので彼の晩年に使用したという。2の「松風店」の小判印を持つ急須は、栗田口で煎茶器の製作、販売を行っていた初代高橋道八か、彼が文化元年(1804)に没した後、初代同様松風亭を名乗った二代道八(1783~1855)の作品かと考えられる。ちなみに、享和2年(1802)に「白川橋に松風亭という店あり、大坂兼葎堂このみのこんろきうす等を製す」と滝沢馬琴が「關旅漫録」に記す。3の「寶山」、4の「岩倉山」印は栗田口富元の印で、土坑3からも出土したが、印の形が異なっており、溝6の出土品は時代が下がると思われる。

京焼陶器の生産年代は、ほぼ18世紀の最末期から19世紀にかけてが妥当だろうが、瀬戸系陶器でも8の湯呑み形の鍍茶碗は、19世紀初頭に開窯年代を推定されている勇右衛門窯出土の鍍茶碗と同形式かと考えられる²⁰⁾。伊万里磁器のうち、広東碗形式の碗は18世紀末から19世紀に盛んに作られ、「寿」字を意匠化した文様の碗も19世紀前半の小樽2号窯から出土している²¹⁾。従って、陶磁器からみるとこの溝6、また土坑32とともに、18世紀末から19世紀、むしろ19世紀の遺構と推測される。

4. 溝8・石垣1(図版第25・35)

溝8は、0-6区からS-6区にかけて検出された南北方向の溝である。溝の南北は発掘区の外に続いているため、端は確認できなかった。また、南寄りの部分は西肩部が不明瞭になっていた。溝の幅は約1.5m、深さは10~30cmであった。断面形は、ほぼ逆台形を呈している。埋土は、下層が暗褐色の粘質土で、上層は灰褐色の砂質土である。

石垣1は、溝8の東側に溝とはほぼ平行して南北方向で、西向きにつくられている。これも北は発掘区外に延びており、南は削平を受けていて端は確認できなかった。検出した石組は1段分で

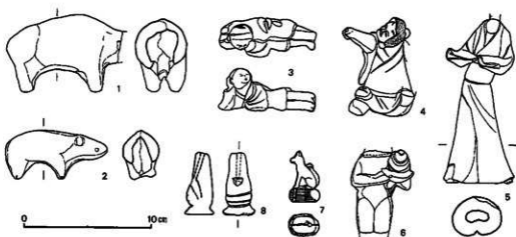
あるが、抜き跡から少なくとも、もう1段は積まれている。石垣の下端と溝の肩との間は幅20～40cmの平坦面がある。溝8とは若干方位が異なるが、石垣前面の埋土は溝8の埋土に連続しており、両者は一連のものであったと思われる。

溝8の埋土からは、陶磁器類などの遺物も出土したが、なかでも注目されるのは小判が出土したことである(図版第35)。出土時点では、なぜか径2cmほどに折り畳まれたような状態で、各所に打撃の跡があった(図版第35下)。

この小判は、背面に真書体の「文」字の刻印があり、元文元年から文政元年(1736～1818)にかけて鑄造された、いわゆる元文小判であることがわかる。また、背面には「甚」字の刻印と、両替屋を通過するたびに打たれるという小さな刻印が17個は認められることから、かなり流通していたものとみられる。なお、この小判の重量は13.1gである。

5. 土人形(第75図, 図版第34)

今回の調査では、土製の人形がかなり多く出土している。いわゆる伏見人形であるが、かならずしもすべてを伏見人形と限定できないため、土人形と総称する。ここでは陶磁器類と同様に比較のまとまって出土した土坑3と溝6からの遺物で、形の判別できるものについて検討を行った(第2・3表)³⁴⁾。



第75図 土人形実測図 1・8:土坑3 2・4:溝6 3・5～7:土坑32

土坑3と溝6の遺物を通じて人形の題材はかなり多様であるが、大きくは縁起物あるいは信仰に関するもの(第2表1～8, 第3表1～12)と、それ以外のものに分けられる。

信仰に関するものでは、「狐」と「土鈴」が量的に多く、また多様な形を表している。「狐」は座位で頭を横に向け、一対になるものが一般的であるが、土坑3では特に大型(高さ約26cm)で頭に宝珠をのせたもの(図版第34-10)、かなり小型で俵に乗ったもの(第75図7)があり、溝6では口に珠や巻物をくわえたもの、尾を男根型につくったもの(図版第34-11)がある。なお、土坑32の出土であるが、宝珠を抱えた狐(第75図6, 図版第34-12)もある。「土鈴」は巾

着型で、7cmほどの大きなものがあるが、多くは2cmほどの小型のもの(図版第34-6)である。その他、土坑3では「西行」、溝6では「撫で牛」(図版第34-14・15)が目立つ。その他、従来の知見にはないものとして溝6から「五鈴鈴」が出土している(図版第34-7・8)。

信仰に関するもの以外のものは、さらに人物(第2表9~17, 第3表13~39)、動物(第2表18~26, 第3表40~54)、食器・台所用品(第2表27~32, 第3表55~71)、建物・橋などの情景物(第2表33~37, 第3表72~76)、その他に分けられる。

成形手法は、「型」によるものと、「ひねり」と称される手づくねによるものに分けられるが、土坑3の食器類の一部はロクロによってもつくられている。

型物は、基本的には前後あるいは左右の合せ型であるが、食器や面子などは片面だけの型取りである。大きさは、高さ3cmの小型品から20cmを超える大型のものまでであるが、大半は20cm以下である。大型品は、土坑3では前述の「狐」のみであるが、溝6には頭部片だけで10cmを超える「布袋」や脚部片だけで11cmの「牛」などがある。

土坑3の型物には、内部が中空ではないものがあり、中空のものも概して器壁が厚い。また形は比較的大まかで、細部までは型で表されていないものが多い。溝6の型物は、10cm以下の小型品には器壁の厚いものもあるが、概して器壁は薄く、また襟もとや袖口のような細部まで型で表されている。

ひねり物は、基本的に胴体と頭部・手足などを別につくり、貼り付けた後にヘラで着物の合わせ目などを刻んで細部を整えたものである。土坑3と溝6のいずれからも出土しており、土坑3出土品は比較的、表面調整が粗いが、溝6出土品は丁寧な調整がなされている。題材は風俗的な人物が多く、いずれも10cm以下の小型品である。なお、胴部づくりは一塊の粘土から捻り出すものと、粘土板を巻いてつくるものがあり、後者の技法は溝6の出土品に認められる。

第2表 土坑3出土土人形一覧表

(成形種の数字は個体数)

No	名称	成形		若形	備考	No	名称	成形		若形	備考	
		目	部					目	部			
1	布袋	2		赤		20	鳩	3	1	赤・白	透明	陶器質1点
2	天神	2				21	鳥	1				
3	大狐	1				22	猿	1				
4	狐	6		白		23	犬	1		白		
5	撫で牛	2				24	亀	2		○	緑・黄	
6	狛犬	2			一對	25	魚	1		白		銅か?
7	西行	5	1			26	獅子	1				
8	土師		22	黒(いぶし)		27	馬	6			緑・黄・黒褐	底面に「赤」施
9	毘沙門	1		白		28	鉢	5	1	白		
10	唐子	1		白・黒		29	片口	1		白		
11	座安	1	4			30	瓶	4	1	白		
12	立ち姿	2	1	白		31	唐鉢	5	1	白		陶器質1点
13	旅姿	1	1	白		32	壺	1		赤		
14	侍	1		白		33	塔	3			緑・黄・透明	
15	力士	1				34	壺	3			緑・黄	
16	圓卓持ち	1				35	舟?	1			緑・黄	
17	抱き姿	1		赤		36	池	1			緑・黄	
18	牛	5		白・赤		37	山	1			緑・褐・黄	
19	兎	1		白		38	雷	3			黄・緑	

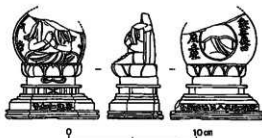
第3表 滑6出土土人形一覧表

(成形順の数字は個体数)

No	名称	成形 No	着色		備考	No	名称	成形 No	着色		備考
			色	釉					色	釉	
1	布袋	2	白・赤	緑・黄・黒褐		44	鳥	4	赤		投入り
2	天神	2	白	緑・黄・黒褐		45	狸負者	7	白・赤		
3	大黒	2		緑・黄・褐	陶器質1点	46	猿	3			
4	柳屋守	1	白			47	犬	2	赤		
5	猿	1				48	猫	5	白・赤		
6	狐	18	赤・黒・白			49	猪	1	赤		
7	熊で牛	12		黒(いぶし)		50	馬	3	赤・黒		
8	西行	1		緑・黄・黒褐		51	飾り馬	1	白		
9	熊鷹喰い	4	白			52	亀	3			
10	笹舟	2	赤			53	蛙	1			
11	五輪舟	9	赤			54	魚	7		緑・黄	
12	土舟	10	黒・赤			55	鳥	3		緑・黄	
13	三番衆	2	白			56	鉢	2			
14	唐子	1	白			57	片口1	3		黄・緑	把手付き
15	童子	2	白		額巾被り	58	片口2	4		黄・緑	
16	童子	2	白・赤			59	瓶	1			緑
17	宝珠持ち	1	白			60	土瓶	7		緑・黄・黄褐・透明	
18	犬抱き	1		緑・褐		61	徳利	2		黄・黄褐	
19	人形使い?	1		緑・黄		62	壺	9		緑	
20	狐面持ち	1	白			63	甕	4		緑	大・中・小
21	亀遣い	1	白・赤			64	陶蓋	1		緑	
22	鹿姿	1	白			65	天目鍋	1		緑	
23	侍	1	白・赤			66	化粧碗	2		緑	実用品
24	相撲	1				67	向付	1		緑	
25	ほうかむり	1		緑		68	釜	1			
26	両肩脱ぎ	2	白			69	笠置	5	白		
27	禪	1		緑・黄		70	鍋蓋	1		緑	
28	侍	1				71	壺	3	黄・赤		額付き1点
29	羽織り侍姿	1	白			72	瓶	7	白	黄褐・緑	
30	からしも	1				73	舟	1			
31	猿持ち	1		緑・黄		74	石燈籠	2		緑・黄	
32	鹿り姿	1		緑・黄		75	城	3	白		
33	太夫	3	白			76	門	1	白・赤		
34	おぼこ	2	白		投入り	77	のし付き男袂	1			
35	子守り	1	白・赤			78	男女交合	1			
36	立ち姿	1	白・赤			79	こたつ	1			
37	鹿姿	2	白			80	猿	1			
38	額巾被り	1	白			81	袖でんぼ身	2		黄褐	
39	お多福	1	白			82	袖でんぼ蓋	3		緑・黄	
40	牛	18	黒・白・赤			83	丁銀	2	緑		
41	兎	1				84	赤石	1	黒		
42	鳩	4	白			85	壺	5			猿・虎・他
43	鳩笛	1		緑・黄		86	泥団子	19	白		

仕上げの着色には、胡粉で下地を塗り泥繪具で彩色するものと、釉薬を掛けたものがある。繪具で彩色されたものは、ほとんどが下地の痕跡をとどめる程度である。また「熊で牛」はすべて表面が黒く燻されている。

釉薬は主に、黄・緑・褐色などの低火度釉が施されている。施釉品は型物、ひねり物を通して、いずれも10cm以下の小型品で、特に情景物



第76図 土製小仏実測図

や食器・台所用品に多い。人物にも施釉品があり、大部分は全体に施釉されているが、溝6出土の「ほうかむり」(第75図4、図版第34-4)は部分的な施釉で、目や口を曇描きしたものである。また、信仰に関するものにも施釉品が目立つが、これらは高さ数cmの小さなものに限られ、「狐」・「撫で牛」・「土鈴」には施釉品がない。

なお、その他に溝6上層から土製の小仏像が出土した。便宜上ここで紹介する(第76図)。

前後の合わせ型でつくられており、焼成は堅緻である。色調は淡灰色を呈する。

智拳印を結んでおり、大日如来と考えられる。光背裏面に、「発菩提心」・「□度衆生」の銘が、台座部にも正面に「寄進仁和寺」、同裏面に「□安二正光八日□□敬白」の銘がある。

第6節 その他の主要遺物

遺構にとまわらないで出土した遺物や、その他の遺構から出土した遺物のなかで、主要なものを紹介する。

1. 土器・国産陶器類(第77・78図)

第77図1~4・6~13は緑釉陶器である。9は皿であるが、他のものは碗であろう。碗は、高台の形態から4種にわけることができる。すなわち、輪高台で高台下端内面に内傾する段をもつもの(1~4)、輪高台で高台端部を丸くおさめるもの(6~8)、ケズリ出しの輪高台のもの(10・11)、ケズリ出しの板状高台または蛇の目高台のもの(12・13)である。焼成は、1・4・8・10・11・13が須恵質、2・3・6・7・9・12が土師質である。釉の色調は、1・2・3・9が緑色、11・12が明黄緑色、4・6~8・10・13は濃緑色を、それぞれ呈する。

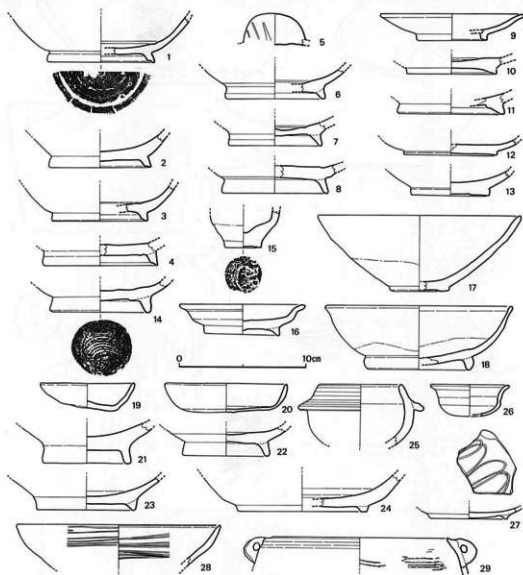
第77図5は土製円塔である。焼成は土師質で、外面には深緑色の緑釉をかける。

第77図14~16・18は灰軸陶器である。14・18は碗、15は瓶子、16は皿である。14は底部に糸切り痕をのこし、高い高台をつける。18は口縁端部がわずかに外反し、底部にはいわゆる三日月高台をつける。釉は漬けがけによる。16は断面三角形の高台を有する。体部から口縁部にかけて、「く」の字状に外反する。17は瀬戸窯系の陶器碗である。

第77図19~21は土師器碗である。21は高い高台をもつ。第78図2は土師器鉢である。丸みをおびた底部から、外上方に体部がたちあがり、口縁端部は外傾する面をなす。第78図8・9は土師器羽釜、7は土師器高杯である。

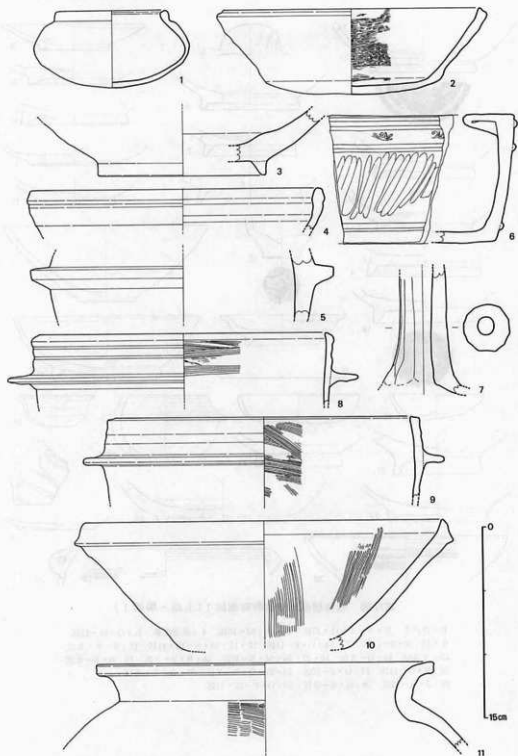
第77図22~24、第78図3は須恵器で、壺または鉢である。第78図4は須恵器鉢である。口縁部はわずかに肥厚する。第78図10は須恵器すり鉢である。口縁部は外傾する面をなす。11は須恵器壺である。体部外面を平行タタキ、内面をオサエにより、それぞれ成形する。

第77図25~29、第78図1・6は瓦質土器である。第77図25は小型の羽釜、27・28は碗、29は耳付の壺、第78図1は短頸壺、6は火鉢である。外面に鳥形文様のスタンプを押す。



第77图 包含厩他出土遺物実測図1(土器・陶器1)

- 1: 井戸7 2・9: T-11・12区 3・8: M-10区 4: 表面採集 5: O-10・11区
 6・12: R・S-11区 7・14: O・P-11区 10・17: M・N-10・11区 11: S-7・8区
 13: 土坑64 15: Q-8区 16・22・24: M・N-10区 18: R・S-7区 19: R・S-6区
 20: N・O-11区 21: O・P-10区 23・27: Q・R-7区 25: Q-7・8区
 26: J・K-11区 28: Q・R-3区 29: O・P-10・11区



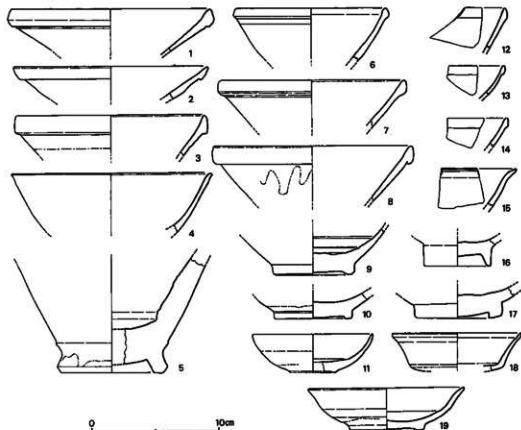
第78図 包含層他出土遺物実測図2(土器・陶器2)

1 : N・O-11K 2 : O・P-11K 3 : R・S-6K 4 : Q-7K 5 : N-10K
 6 : T・U-10K 7 : M・N-11K 8・9 : Q-S-11K 10 : Q・R-10K
 11 : P・Q-7K

2. 中国製陶磁器類 (第79・80図)

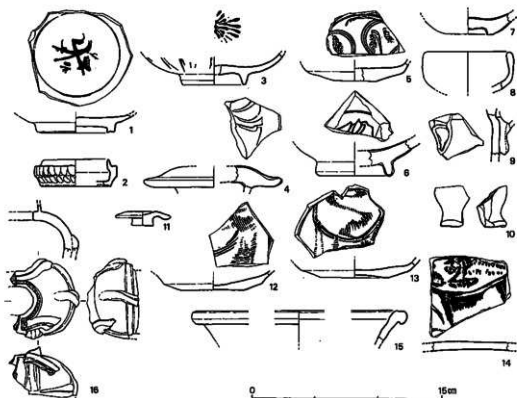
第79図は白磁である。碗(1~4・6~10・12~17), 皿(11・18・19), 壺(5)がある。碗は口縁部が小さい玉縁のもの(13・14), 口縁部が大きい玉縁のもの(1~3・6・7・12), 口縁部が外反するもの(4・15)の各種がある。これを高台の形態からみるならば, 高い高台のもの(16), やや高い高台のもの(17), 低い高台のもの(9・10)にわけることができる。皿は, 体部から口縁部にかけて内湾気味にたちあがり, 平たい高台をもつもの(11)と, 体部から口縁部にかけて外反気味にたちあがり, 平たい高台をもつもの(19)とがある。18は高台をもたない皿で, やや器高が高く, 杯もしくは碗とすべきかもしれない。第80図2・16は青白磁。16は動物形の製品, 2は合子の身である。

第80図1・3~13は青磁である。碗(1・3・5・6), 小碗(7・8), 蓋(4・11), 皿(12・13)がある。9は壺であろうか。把手らしき装飾をつける。10は壺類の足部である。1・



第79図 包含層出土遺物実測図3(白磁)

1・11・16:O-P-11区 2・4・9:Q-8区 3:R-S-6区
5・12・13:R-S-11区 6:T-U-11区 7・19:J-K-11区
8・17:M-N-10区 10・15:R-8区 14:O-Q-11区 18:P-11区



第90図 包含層他出土遺物実測図4(青磁他)

1: Q・R-7区 2: P-7区 3: Q-8-11区 4: Q-8区
 5・9: M・N-10・11区 6: S-7・8区 7: R・S-7・8区
 8・14・16: R・S-11区 10: P・Q-10区 11: Q-6区 12: O・P-11区
 13: Q・R-11・12区 15: T・U-11・12区

3・4・6～10は龍泉窯系，5・12・13は同安窯系の製品であろう。

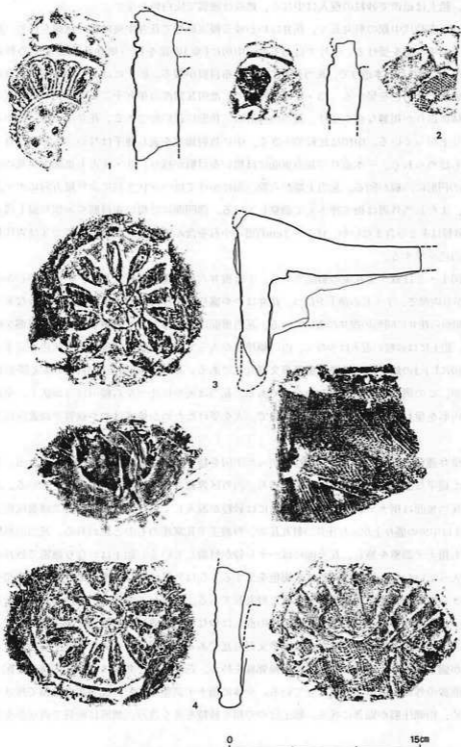
第90図14・15は陶器である。14は盤であろう。緑褐色の釉をかけ、鉄釉で草魚文を描く。晋江窯系(磁灶窯等)の製品である。15は緑釉陶器の盤で、濃緑色の釉をかける。

3. 石製品(第78図)

第78図5は滑石製の石鍋である。

4. 瓦類(第81～90図)

軒丸瓦 第81図1は，平安時代前期の軒丸瓦で，文様は花卉の間からそれぞれ同形の複弁が覗いている状態を表現している。外区に花卉と弁間文の先端およびそれらの中央と対応するように珠文を配しているため，かなり密な感を受ける。瓦当上端から筒凸面にかけては縦方向のヘラ削りを施し，瓦当裏面は指押さえの後，ナデ調整を施しているので，部分的に指頭圧痕が認め



第81圖 包含層他出土遺物実測図5(軒丸瓦1)

1:土坑70 2:R・S-11区 3:土坑54 4:S・T-11区

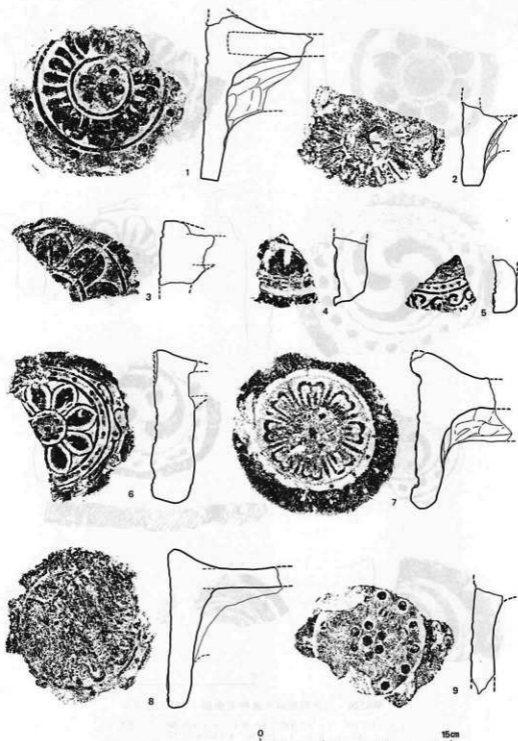
られる。胎土は緻密で砂粒の混入は少なく、焼成は硬質で灰白色を呈す。

2は、平安時代中期の軒丸瓦で、花卉はいわゆる擬宝珠型で花卉中央に細い稜線を持ち、厚さが一定で扁平な感を受ける。小片ではあるが、中房に「栗」の銘を持つ単弁八葉蓮華文の軒丸瓦とみられる。造りは一本造りで、瓦当裏面には粗い布目痕が残る。胎土にはやや砂粒を多く含み、焼成は硬質で灰白色を呈する。3・4は同范品で、池田瓦窯産の単弁十二葉蓮華文の軒丸瓦である。全体に造りが粗雑な感を受け、瓦当の外形も三角形に近い形である。花卉は不揃いで中心寄りに盛り上がっている。中房は比較的小さく、中に放射線文を表し蓮子はない。またかなり大きな陥傷も認められる。一本造りで瓦当裏面には粗い布目痕が残り、3・4とも裏面中央部に直径約5cmの円形に凸線が回る。瓦当上端から筒凸面にかけてはへう状工具により縦方向にナデ調整を施し、また瓦当外周は指で押さえて調整している。筒凹面には粗い布目痕や糸切り痕も残る。胎土に砂粒はあまり含まないが、径1～3cm程度の小石を含んでいる。焼成は硬質で3は青灰色、4は灰白色を呈する。

第82図1・2は森ヶ東瓦窯の製品である。1は複弁六葉の蓮華文軒丸瓦で、中房の中心が若干盛り上がり肉厚で、1+6の蓮子を持つ。花卉はやや盛り上がり肉厚で、第81図1のようなモチーフで弁間から花卉に同形の複弁が覗いている。瓦当裏面は指で押さえて調整した後、下半部を削っている。胎土には砂粒の混入は少なく、白い網模様が入っている。焼成は硬質で青灰色を呈する。2は中房に「下」の銘を持つ単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。本来この瓦范は外区に珠文帯を持っているが、この例は内区部分のみのものである。瓦当は天地に比べ左右幅のほうが広く、全体として楕円形を呈している。胎土も1と同様で、火を受けたためか焼成はやや軟質で淡黄灰色を呈する。

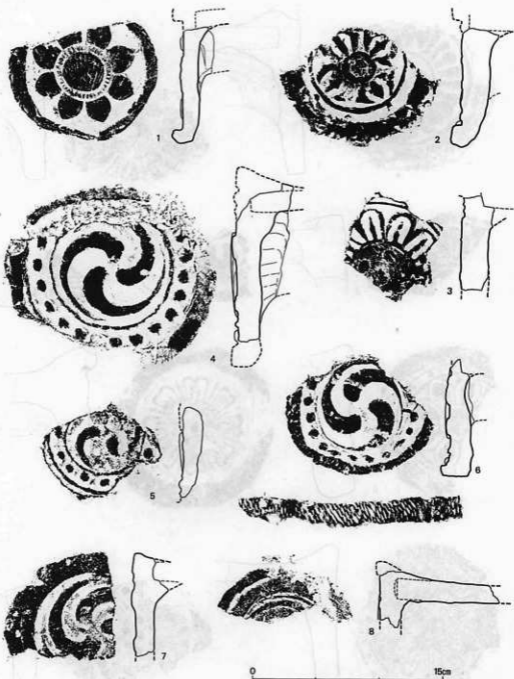
3は単弁蓮華文軒丸瓦で、やや盛り上がった中房を持つが破片のため詳細は不明である。花卉は幅広く扁平な感じで中央に細い稜線を持ち、内外区界線の外側に珠文帯を巡らせている。瓦当上端や瓦当裏面は指ナデ調整である。胎土には砂粒が混入しており、焼成は軟質で淡黄灰色を呈する。4は中央の盛り上がった花卉の軒丸瓦で、丹波王子瓦窯産のものと思われる。瓦当の外周・裏面とも指ナデ調整を施し、瓦当面にはハナレ砂が付着している。胎土はかなり緻密で砂粒はほとんど入っていない。焼成は硬質で灰褐色を呈する。5は外区にかなり密に配された珠文帯を巡らせ、さらにその外側に唐草文を巡らせた軒丸瓦である。摩滅しているが、瓦当の外周および裏面はナデ調整と思われる。胎土は密で砂粒の混入は少なく、焼成はやや軟質で黒灰色を呈する。6も5とよく似たモチーフの単弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房には1+8の蓮子を持つ。花卉は中央が盛り上がり、先端が尖っていて輪郭線を持つ。花卉先端と弁間に対応して珠文を配し、さらに圓線の外側に唐草文を巡らせている。全体に指ナデ調整を施し、瓦当裏面は指で押さえているため、指頭圧痕が顕著に残る。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成は硬質で青灰色を呈する。

7は第26図1・2と同范の複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。周縁はほぼ一定で瓦当は正円に近い。調整は全体にナデ調整で、瓦当断面は丸みを帯びた感じである。胎土は粗く砂粒を多く含み、焼



第82圖 包含厩他出土遺物実測図6(軒丸瓦2)

1・6：南区 2：溝13 3・4：土坑156 5：F-9・10区 7：Q-8区 8：溝1
9：M・N-10・11区



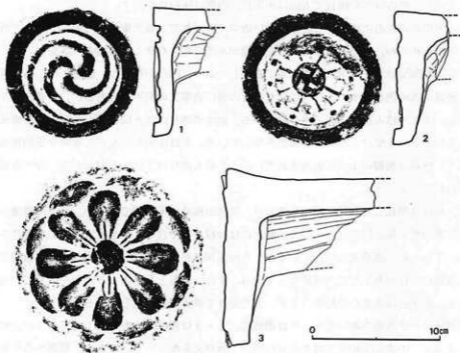
第83図 包含層他出土物実測図7(軒丸瓦3)

1:土坑115 2:土坑116 3:溝1 4:土坑108 5:土坑59
6:L・M-9・10区 7:土坑156 8:R・S-11区

成はやや軟質で淡青灰色を呈する。8は7とよく似たモチーフと思われるが、磨滅が著しく文様の詳細はよくわからない。丸瓦部凸面には縄目叩きが施されており、凹面には細かい布目痕が残る。瓦当裏面は指押さえの痕が顕著に残り、下半部はヘラ削りされている。胎土はやや粗く砂粒を多く含み、焼成は軟質で灰白色を呈する。9は中房に1+6の蓮子を持つ軒丸瓦で、内区は磨滅のため文様は不明である。外区にやや大粒の珠文を配しており、周縁は天地より左右のほうが幅が広い。瓦当外周はヘラ削りされており、7・8と同様である。胎土は粗く砂粒や小石を多く含み、焼成は軟質で灰白色を呈する。

第84図1は単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、瓦当面にも糸切り痕が認められる。中房は少し盛り上がり、1+5の蓮子を持つと思われるが、箔の押しが浅く明瞭ではない。中房と花卉の間に葉を幅線状に表現している。周縁幅はほぼ一定で瓦当は正円に近い。調整は全体に指ナデ調整である。胎土は密で砂粒の混入は少なく、焼成は硬質で灰白色を呈する。2は花卉の3箇所に切れ込みを持つ宝相華状の花文の軒丸瓦で、珠文は周縁に接して配されている。瓦当断面は凸レンズ状を呈し、調整は指ナデを主体としている。胎土にはあまり砂粒を含まず、二次的な火を受けて灰褐色を呈する。

3は単弁十二葉蓮華文軒丸瓦、4は大粒の珠文帯を持つ三巴文軒丸瓦である。調整は指ナデを施し、かなり堅緻な焼成のもので、いずれも播磨産とみられる。色調は青灰色を呈し、4には自然釉も掛かっている。5も外区に珠文帯を巡らせる小さな三巴文の軒丸瓦である。周縁と瓦当裏面を失うため、調整などは不明であるが、瓦当断面が凸レンズ状になる造りのようである。胎土



第84図 包含層他出土遺物実測図8(軒丸瓦4) 1:土坑201 2・3:表面採集

にはあまり砂粒を含まず、火を受けて灰褐色を呈している。6の文様も周囲に珠文帯を巡らせる三巴文であるが、珠文帯には各珠文を縫うように鋸歯文状の細い凸線が加えられている。瓦当裏面には指頭疔痕の凹凸が目立ち、また瓦当の周囲は縄目の叩きが施されている。胎土にはあまり砂粒を含まず、これも火を受けて淡黄褐色を呈する。7は珠文帯を持たない三巴文の軒丸瓦で、周縁の幅は一定せず瓦当の外形は楕円形を呈するものとみられる。軟質の焼成で表面黄褐色、内部灰黒色を呈す。8の文様も巴文であるが、外区に弁幅の広い蓮華文を配するものである。胎土には粗い砂粒を多く含み、かなり硬質の焼成で灰黒色を呈している。

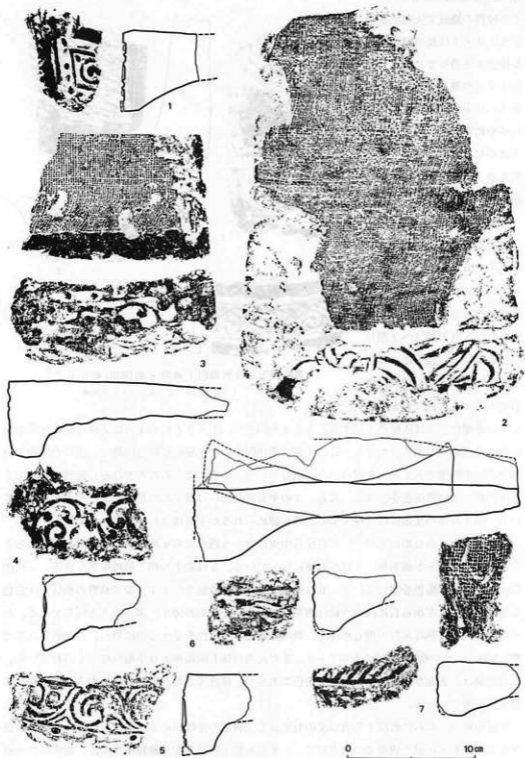
第87図1・2は、小型で主に棟の製飾に用いられた瓦と思われ、13世紀代に属すると考えられる。いずれも調整は比較的丁寧である。胎土には粗い砂粒を多く含み、1は硬質の焼成で灰色、2は軟質の焼成で表面は黒色、内部は灰白色を呈す。なお2は瓦当面の一部に、ひび割れを修正したようなナデがなされている。3は、二重花卉の文様を表しており、周縁は持たない軒丸瓦である。瓦当裏面の周罫を線に沿ってナデを施していることから江戸時代に入るものと考えられる。胎土には粗い砂粒も含むが多くはない。硬質の焼成で、表面は燻されている。

軒平瓦 第85図1は、平安時代前期の西寺系様式の軒平瓦である。周縁上に瓦范跡の痕が認められる。全体に丁寧なへう削り調整である。胎土は密で砂粒はほとんど混入しておらず、焼成は硬質で青灰色を呈す。2は平安時代中期の池田瓦窯の製品で、中心飾に「日」字状の銘を持つ。唐草文はかなり崩れていて、波状の表現になっている。瓦当の顎部から平瓦部にかけては5cmほどの幅で粗くへう削りされている。胎土に砂はあまり含まないが、径1~3cmの小石を所々に含んでいる。焼成はやや硬質で表面は灰黒色、内部は灰白色を呈す。

3は、中央から左右に展開する巻きの強い唐草文軒平瓦で、森ヶ東瓦窯の製品である。外区に珠文帯を巡らせるが、この例では瓦当の左右幅が瓦范の幅より狭く、右端の外区を欠いている。顎部から平瓦部凸面にかけては指で押さえて調整しており、凹凸が目立つ。胎土には小石も含み、焼成は硬質で青灰色を呈す。4は3に仰た巻きの強い唐草文の軒平瓦であるが、唐草文は左右から展開し、中央で絡み合うように表されている。胎土や造りは3と同様で、これも森ヶ東瓦窯産と考えられる。火を受けたため赤褐色を呈している。5は中央から左右に展開する均整唐草文軒平瓦で、唐草は複線のように表現されている。これも造りは3によく似ており、森ヶ東瓦窯産かと思われる。

6は、かなり摩耗した瓦范を使用しており、文様が極めて不鮮明であるが、唐草の特徴から大宮河上瓦窯の軒平瓦と同范とみられる。胎土には砂粒を多く含み、やや軟質の焼成で灰色を呈している。7も一応、唐草文を表しているが、その表現はかなり崩れ、茎とみられる直線的な二重線から魚骨状の枝が派生したようになっている。また、瓦范と瓦当の大きさが一致していないようである。胎土にはあまり砂粒を含まず、火を受けて淡赤褐色を呈している。

第86図はいわゆる地方産の瓦で、1は讃岐産、2・3は播磨産の軒平瓦である。1の文様は同范例でみると、中央に宝相華を置き左右に短かく唐草文を配するものである。顎部から平瓦部凸面にかけて粗い縄目叩きを扇型に施しているのが特徴となる。胎土にはほとんど砂粒を含まず、

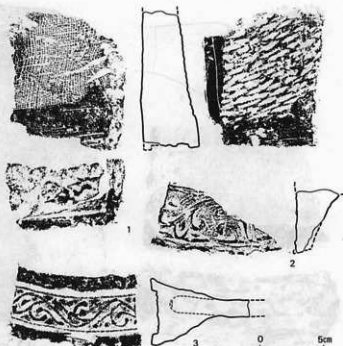


第85圖 包含層他出土遺物実測図9(軒平瓦1)

1:土坑199 2:土坑111 3:土坑194 4:T·U-11区 5:R·S-11区
6:土坑201 7:表面採集

やや硬質の焼成で灰褐色を呈する。2・3は瓦当部に平瓦を接合する造りで、主として指ナデで調整を施している。胎土には少し砂粒を含み、2はやや軟質の焼成で黒褐色、3はかなり硬質の焼成で青灰色を呈する。なお、3の瓦当面にはハナレ砂が認められる。

第87図1・2は同范である。文様は左右から中央に向う唐草文で、外区にやや密に珠文を巡らせている。頸部から平瓦部にかけては指で押さえて整形し、瓦当下端はへら削りを施している。胎土にはほとんど砂粒を含まず、焼成は硬質であるが二次的な火を受け



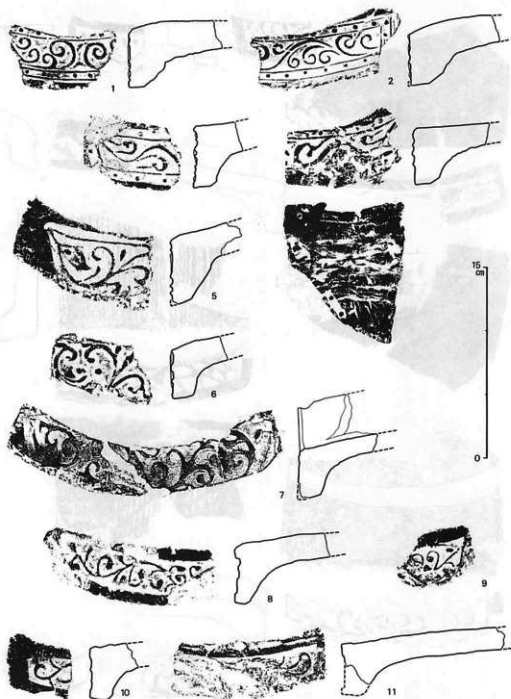
第86図 包含層出土遺物実測図10(軒平瓦2)

1:Q-10区 2:溝1 3:土坑66

て1は赤褐色、2は灰褐色を呈する。3と4も同范で、1・2と同じように文様は左右から中央に向かう唐草文である。ただし、この文様は第19図2の軒平瓦の文様と同趣で、唐草の先端が分枝するのが特徴であるが、表現はかなり崩れている。胎土には小石などを含み、硬質の焼成で3は灰白色、4は青灰色を呈する。なお、4の平瓦部凸面には軒平瓦の瓦范による叩きが施されている。叩き原体の瓦范には、珠文帯の一部が認められるが主文様はわからない。

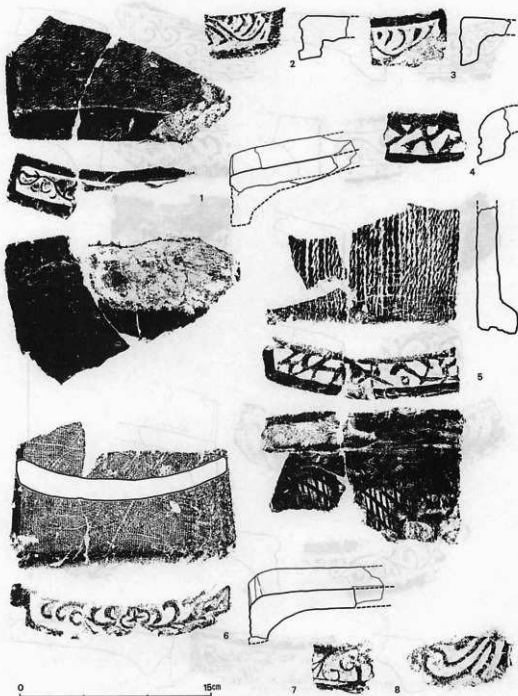
5と6はよく似た単位文様で、左右から中央に向かう唐草文軒平瓦があるが、同范例でみると左右の文様は、5が線対称、6は点対称になっている。5は胎土が粗く砂粒を多く含み、二次的な火を受けて赤褐色を呈している。6は胎土にあまりは砂粒を含まず、やや軟質の焼成で灰白色を呈する。7は左から右に向かう扁行唐草文の軒平瓦で、第29図4、第39図7と同范例である。ただし、前掲の2例は瓦范の押しが深く、焼成は硬質で青灰色を呈するのに対し、この例は瓦范の押しが浅く、やや軟質の焼成のものである。また瓦当自体も前掲例より小振りにつくられている。なお色調は、表面が黒灰色、内部は灰白色であるが、接合できた右部分の破片のみは火を受けて黄灰色を呈している。

8は中央から左右に展開する唐草文の軒平瓦で、唐草の先端がいずれも珠点状になるのが特徴である。9も8に似た唐草文の軒平瓦で、いずれも胎土にはあまり砂粒を含まず、焼成はやや軟質で灰白色を呈する。10・11は同范例とみられる唐草文軒平瓦で栗栖野瓦窯の製品である。いずれも范の押しは浅い。胎土にはあまり砂粒を含まず、10は軟質の焼成で灰褐色、11はやや硬質の焼



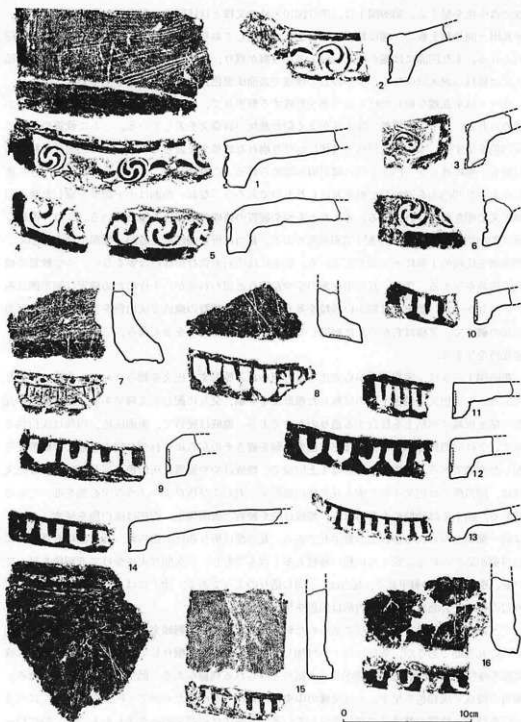
第87圖 包含厩他出土遺物実測図11(軒平瓦3)

1:土坑111 2:S-11区 3・4:表面採集 5:M・N-10区 6:O-11区
 7:土坑150+土坑156+O・P-11区 8:R・S-11区 9:S-11区 10:土坑74
 11:T・U-11区



第88図 包含層他出土遺物実測図12(軒平瓦4)

1 : T・U-11・12区 2・3・7 : 土坑201 4 : T-11区 5 : 土坑115 6 : 土坑74 8 : 土坑55



第89圖 包含層他出土遺物実測図13(軒平瓦5)

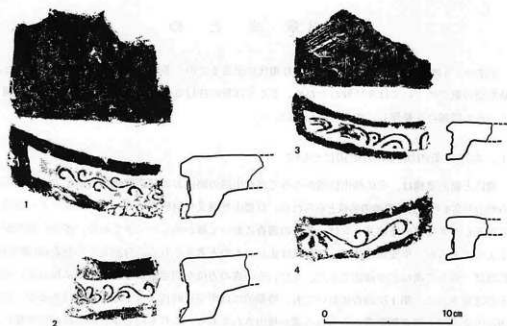
1: F-9・10区 2: 土坑156 3・14: R・S-11区 4・5・15: Q-8区
 6: 土坑108 7: O・P-11区 8: 土坑201 9: 土坑36 10・13: 表面採集
 11: 土坑142 12: R-10区 16: 土坑97

成で青灰色を呈する。第89図1は、第87図10・11の文様とはほぼ同文の軒平瓦である。瓦当部は、平瓦用と同じ粘土板の一端に粘土塊を付加して形成しており、瓦当の欠失部に明瞭な剥離面が認められる。また凹面には細かい布目痕と糸切り痕が残り、糸切り痕は瓦当際まで残っている。胎土には砂粒の混入は少なく、やや硬質の焼成で表面灰黒色、内部は灰白色を呈する。

2～8は平瓦端を折り曲げて瓦当部を形成する軒平瓦で、いずれも瓦当面に部分的に布目痕が認められる。2・3は異范ではあるがよく似た波状の唐草文を表している。ともに軟質の焼成で灰白色を呈する。4・5も斜格子文状にかなり崩れた唐草文を表している。5の凹面には粗い布目痕も一部に残るが、凹面全面に縄目痕が認められる。これは一度、平瓦として縄目の叩きを実施したものを凹凸面を逆にして軒平瓦にしたものであろう。なお、凸面はナデ調整を施した後、斜格子文の叩きが施されている。4・5ともやや硬質の焼成で灰褐色を呈している。6は、簡略な唐草文の中央に4葉の花文を配する軒平瓦である。瓦当は折り曲げによるが、顎部に粘土を加え、凸面側を比較的丁寧にナデ調整している。胎土には小石も含むが砂粒は多くない。やや軟質の焼成で灰色を呈する。7は、瓦当中央部のやや左寄りと思われるが、小片のため確実な同范例はみいだせなかった。胎土には細かい砂粒を多く含み、やや軟質の焼成で灰白色を呈する。8は瓦当右端の破片で、文様は右から左に展開している。胎土には砂粒を多く含み、二次的な火を受けて赤褐色を呈する。

第89図1～3は、宝相華文から変化したと思われる雁形文と巴文を組み合わせた文様の軒平瓦である。1は巴文3個と上下の反転した雁形文を2個、交互に配した文様である。瓦当部は平瓦部の粘土板端に別粘土を接合する造りのものである。焼成は硬質で、表面灰色、内部は灰白色を呈す。2は同范例でみると、中ほどに巴文1個を置きその左右にそれぞれ向きを違えた雁形文を配した文様である。瓦当部の成形は1と同様で、焼成はやや硬質、灰白色を呈している。3の文様は、同范例では巴文4個と覗き花文状の雁形文2対および唐草文のような中心飾を並べたものである。胎土には砂粒や小石を含み、焼成はやや硬質で表面黒色、内部は灰白色を呈す。4・5は同一個体とみられる連巴文の軒平瓦である。瓦当部は折り曲げで造られ、瓦当面にも部分的に布目痕が認められる。胎土には粗い砂粒も多く含んでおり、二次的な火を受けて赤褐色を呈している。6も連巴文の軒平瓦で、瓦当は1と同じ造りのようである。胎土にはあまり砂粒を含まず、軟質の焼成で表面は灰褐色、内部は黒色を呈する。

7～16は瓦当部分を折り曲げて造られた軒平瓦で、いずれも剣頭文を表している。7は折り曲げ式の瓦当部であるが、顎部に粘土を付加し、瓦当上面をへら削りしている。文様も上外区に珠文帯を持ち、瓦当上面の面取り部分にへら記号とみられる刻線がある。胎土には砂粒を多く含み、硬質の焼成で灰褐色を呈す。8は文様の中央に四葉花文を配したもので、凹面の瓦当近くにへら記号を持つ。軟質の焼成で淡褐色を呈している。9～16は剣頭文のみを表したもので、特に13～16は小型であり、主に棟の製筋瓦に用いたと思われる。いずれも胎土には砂粒を含み、概してやや硬質の焼成で灰色を呈している。この小型の瓦の多くは13世紀に属するものであろう。なお、14と16にはへら記号があり、15の凹及の布目には布の継ぎ跡がみえる。



第90図 包含層他出土遺物実測図14(軒平瓦6)

1:溝11 2:土坑74 3:表面採集 4:R・S-6区

第90図1・2は同范品で、文様は中央に半裁花文を置き、左右に唐草文が細かい線で簡略に表現されている。比較的大型の軒平瓦で平瓦部はかなり厚く、凹面にはかすかに細かい布目痕が認められる。全体に造りは丁寧で焼成も硬質である。同范例は第1～3次の調査でも出土しており、曇華院の創建頃の瓦かと考えられる。2と3はやや小型の瓦で、文様は2が左右から中央に向かう波状文、3は中央に半裁花文を置く唐草文を表している。平瓦部は薄く、凹面には部分的に糸切り痕が認められる。いずれも胎土には粗い砂粒を多く含み、焼成は概して硬質で表面は黒色を呈している。

第3章 ま と め

上述のように今回の調査では、縄文期より現代に至るまでの、多様な遺構・遺物が検出された。時期別の概要については先に触れたため、ここでは特に注目される平安時代の遺構・遺物に関して、その問題点を整理し、まとめとしたい。

1. 左京三条四坊四町の東辺について

溝15と路面遺構は、その検出位置からみて高倉小路の路面および西側側溝と断定でき、その西の地山の高まり部分は築地の名残とみられる。京都市埋蔵文化財研究所が、コンピューターを使って復元した平安京の条坊プランは、各所の調査において確かめられてきており、多少の誤差があるようであるが、平安京全体としてはほぼ正しいものと考えられる。今回もその想定線(第2図)にはほぼ一致して溝などが確認できた。ただ、その溝の方位が想定線より若干、東に振れていることが注意される。第1次調査においても、時期的には平安京時代より下るものではあるが、四町西辺の東洞院大路東側側溝とみられる溝が検出されており、これも同じように方位がやや東に振れている。したがって、少なくとも四町の東と西の辺については、想定線とは若干方位を逸した基準線によって地割りがなされたものと考えられる。平安京全体の地割りは、かなりの精度で大規模に行われたと思われるが、部分的な地割りは、それぞれ基点をもうけて行われたことも考えられる。今後は、実際の検出遺構と想定線の誤差を、このような点でも検討することが必要になるう。

溝15の西側で検出された、溝13はその形状から、宅地内の区画溝と思われる溝7・12と同時期の、宅地の中の溝と判断される。そうすると、溝13は先に築地跡とした地山の高まり部分に掘り込まれていることから、この時点、すなわち四町が「高倉宮」と称された時期には当初の築地は廃されていたものとみられる。また、溝13がN区で途切れることは、この北側に門の存在が考えられる。室町時代の溝1も、このあたりが暗渠状になって、さらに北寄りで途切れることを合わせて考えると、高倉宮の東の入り口が、L・M区にあたる可能性が大きい。

なお、溝15の位置は新築建物の完成時点で、なんらかの形で表示されることが決定した。

2. 井戸12について

この井戸の時期については、出土した遺物の中で主体となる土師器類の年代観より、少なくとも廃絶の時期は12世紀の前半代と考えられる。井戸中に大量の土器を投棄した例は、他にも平安京内でいくつか散見されるが、いずれもこの時期前後のものと考えられる。当時の習俗を考えると興味深い、その意味については定説がない。これも今後の検討課題であろう。いずれにしても、井戸12から出土した土器類・白磁類は量的にも、一括遺物として貴重な資料になるう。

3. 出土瓦について

左京三条四坊四町についての第1～4次の調査では、今回が最も多く瓦類の出土をみた。時期的には、平安時代前期より後期に至る各時期のものがあり、中でも主体となるのは11世紀から12世紀にかけてのものであった。この四町の隆盛がこの時期にあることを示すものと思われる。また、池田瓦窯や森ヶ東瓦窯などの中期に属する官窯産の瓦もある程度の量が出土していることから、中期末頃にもこの地が重要な役割をはたしていたことも考えられる。

瓦類の中で、今回特に興味を引いたのは、第26図5の巴文軒丸瓦と、第29図3の剣頭文軒平瓦である。両者の造瓦技法は、11世紀代の造瓦技法の特徴を多く備えている。すなわち、指による押さえが顕著で、軒丸瓦は瓦当の断面形が凸レンズ状を呈するものである。この瓦は、井戸12とほぼ同時期と考えられる土坑68・69から出土しており、12世紀前半代に属するものになる。従来、巴文と剣頭文の初現は12世紀の後半代とされてきたが、今回の資料により12世紀の前半代まで遡ることがほぼ確実となった。平安時代後期とされる瓦類も、技法や文様の点でさらに検討が必要であろう。

今回の調査にあたっては、発掘現場から報告書作製まで多くの方々より援助を受けた。特に以下に記す方々には、指導や貴重な示教を受けた。末尾ながら、厚く感謝の意を表する次第である。

伊東宗裕氏(京都市歴史資料館)、上原真人氏(奈良国立文化財研究所)、内田賢二氏(新日本航測株式会社)、大福康二氏(佐賀県立陶磁文化館)、岡 佳子氏(京都市社会教育振興財団)、河原正彦氏(京都国立博物館)、鈴木重治氏(同志社大学)、杉山信三氏・永田信一氏・堀内明博氏(京都市埋蔵文化財研究所)、守屋雅史氏(大阪市立美術館)、矢部良明氏(東京国立博物館)、横田洋三氏(滋賀県文化財保護協会)

註

- 1) 磯井小三郎『京都坊目録』上巻(大正4年, 京都), 234頁。
- 2) 藤谷寿・角田文衛『平安京一条坊および官衙・邸宅一』(『角川日本地名大辞典』26・京都府下巻所収, 東京, 昭和57年)。
- 3) 芝野康之『調査地の沿革』(『東洞院大路・曇華院跡』(『平安京跡研究調査報告』第3輯)所収, 京都, 昭和51年)。同「尼寺と銀杏一初音の森今昔」(『京都消防』第35巻第12号掲載, 京都, 昭和57年)。同「草創期の通玄寺曇華院について」(『京都市史編さん通信』No.213掲載, 京都, 昭和62年)。
- 4) 引用する案内書等の文献について, 個々に註を付しているが繁雑になるので, それぞれ記号を用いて示すこととする。
 A: 『京雀』寛文五年(1665)刊行。
 B: 『京雀跡道』延宝六年(1678)刊行。
 C: 『京羽二重』貞享二年(1685)刊行。
 D: 『京羽二重織留』元禄二年(1689)刊行。
 E: 『京独案内手引集』元禄七年(1694)刊行。
 F: 宝永板『京羽二重』宝永二年(1705)刊行。
 G: 『都すずめ案内者』宝永五年(1708)刊行。
 H: 『京羽二重織留大全』宝暦四年(1754)刊行。
 I: 『山城名跡巡行志』宝暦四年(1754)刊行。
 J: 『京町鑑』宝暦十二年(1762)刊行。
 K: 『都名所図絵拾遺』天明六年(1786)刊行。
- 5) 白石克『元禄京都洛中外大絵図 解題』(『元禄京都洛中外大絵図』所収, 東京, 昭和62年)。白石氏はこの絵図の描かれた時期について, 「恐らく元禄十三・四年とさほどへだたぬ頃」と考察されている。
- 6) 現在, 東片町で十四世奈良吉として張籠を作っておられる松田辰男氏のお話によると, 何年頃か定かではないが, 戦前に高倉通で初めて下水道工事が行われた際に, 姉小路に近いあたりの道路の下から, 多数の人骨と地蔵さんが出土し, 僧侶が来て法要をしたという。常態的には道路下から人骨が出土するという事は考え難い。ある時期, 高倉通が今より東にあって, 現在の道路が曇華院の境内であったことを示すものかもしれない。
- 7) 高倉宮・曇華院跡の第2次調査および今回の調査においても, これらの絵図の示す堀に該当すると思われるものは認められなかった。消極的ではあるが, このことも高倉通の移動を裏付ける材料となりそうである。
- 8) 註1に同じ。
- 9) 京都町触研究会・編『京都町触集成』第6巻(東京, 昭和60年), 1597・1598番。
- 10) 宮垣克巳・校注『古久保家日記』(『日本都市生活史料集成』1)所収, 東京, 昭和52年)。
- 11) 磯井前掲書, 241頁。
- 12) 村井康彦・編『京都大事典』(京都, 昭和59年)。
- 13) 寺島孝一・松井忠春・編『東洞院大路・曇華院跡』(『平安京跡研究調査報告』第3輯, 京都, 昭和52年)。
- 14) 飯島武次・片岡肇・寺島孝一『平安京高倉宮・曇華院跡の発掘調査』(京都, 昭和54年)。
- 15) 片岡肇・南博史・編『平安京高倉宮・曇華院跡』(『平安京跡研究調査報告』第8輯, 京都, 昭和58年)。
- 16) 松下進『日本地方地質誌』近畿地方 改訂版(東京, 昭和46年)。
- 17) 直良信夫『大歳山遺跡』(『近畿古代文化叢考』所収, 東京, 昭和18年)。
 岡田茂弘『?・近畿』(『鎌木義昌・編』日本の考古学』II 縄文時代所収, 東京, 昭和40年)。
- 18) 岡本睦・丹羽佑一・武田信一他『武山遺跡発掘調査報告』(『洲本, 昭和50年)。
- 19) 間壁忠彦・間壁霞子『里木目塚』(『倉敷

- 考古館集報』第7号掲載，倉敷，昭和46年)
- 20) 中村善則『福磨大蔵山遺跡1 - 縄文土器 -』(『神戸市立博物館研究紀要』第3号掲載，神戸，昭和61年)。
- 21) 中村健二『縄文土器』(『宇治市寺界遺跡』所収，近刊)。
- 22) 菅原正明『IV. 生駒西麓の土器』(『東山遺跡』所収，大阪，昭和54年)。
- 23) 横田洋三『出土土器器量編年試案』(佐々木英夫・編『平安京左京五条三坊十五町』(『平安京跡研究調査報告』第5輯)所収，京都，昭和56年)。
- 24) 渡辺誠『焼塩』(『講座・日本技術の社会史』第二巻 塩業・漁業所収，東京，昭和60年)。
- 25) 京焼系伊万里陶器に関しては，盛峰雄『御経石・清源下京跡発掘調査概報』(伊万里市郷土研究会『鳥ん杖』第29号掲載，伊万里，昭和57年)，河原正彦『京焼についての覚書 - とくに京焼と肥前のかかわりを中心に -』(京都府文化財保護基金『文化財報』No.40掲載，京都，昭和58年)，大橋康二『鍋島藩窯跡物原出土の京焼風陶器』上・中・下(佐賀県立陶磁器文化館『セラミック九州』No.7・8・9 掲載，佐賀，昭和58年)，鈴木重治『京都出土の伊万里産清水』(『銘陶器をめぐって』(同志社大学考古学シリーズII)所収，京都，昭和60年)等に詳しい。
- 26) 大橋康二『肥前陶磁の産遷と出土分布 - 発掘資料を中心として -』(佐賀県立陶磁文化館『北海道から沖縄まで 国内出土の肥前陶磁』所収，佐賀，昭和59年)。
- 27) 京都市編『京都の歴史』第6巻(東京，昭和48年)，59～69頁。同編『史料 京都の歴史』第4巻，市街・生業編(東京，昭和56年)，456～466頁。
- 28) 寛永十五年(1638)刊，松永重頼編『毛吹草』に「粟田口 キセル土物」と，また鹿苑寺住持鳳林章承の日記『隔賞記』にも寛永十七年(1640)頃より，粟田口の陶工や焼物に関する記事が見られる。
- 29) 岩生成一監修『京都御役所向大概覚書』六，「茶碗焼之事」。
- 30) 金森得水『本朝陶器攷證』安政四年(1857)序。
- 31) 『雲林院宝山家文書』。
- 32) 藤澤良祐編『西沢第1・2号窯発掘調査報告』，藤澤良祐『本業焼の研究(1)』(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』VI)所収，瀬戸，昭和62年)。
- 33) 註26に同じ。
- 34) 整理を行うにあたっては，奥村寛純『伏見人形の原型』(京都・大阪府島本町，昭和51年)などを参考にした。
- 35) 大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会編『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告』(京都，昭和59年)。

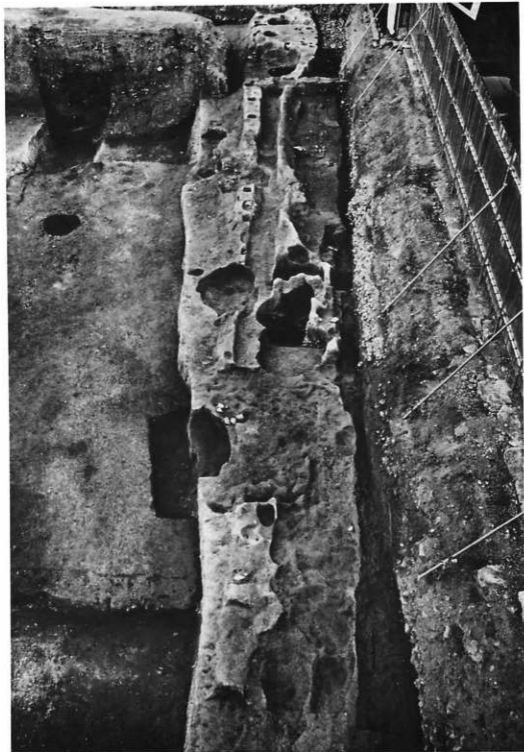
圖 版



上：調査前全景(北より) 下：北区掘削状況(北より)



南区完掘状態(西より)



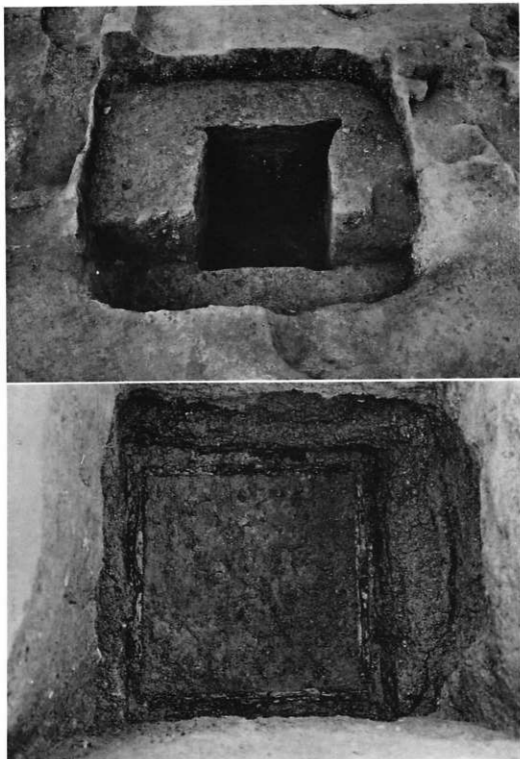
南区東部完掘状態(南より)



溝15・道路状遺構(上:南より, 下:西より)



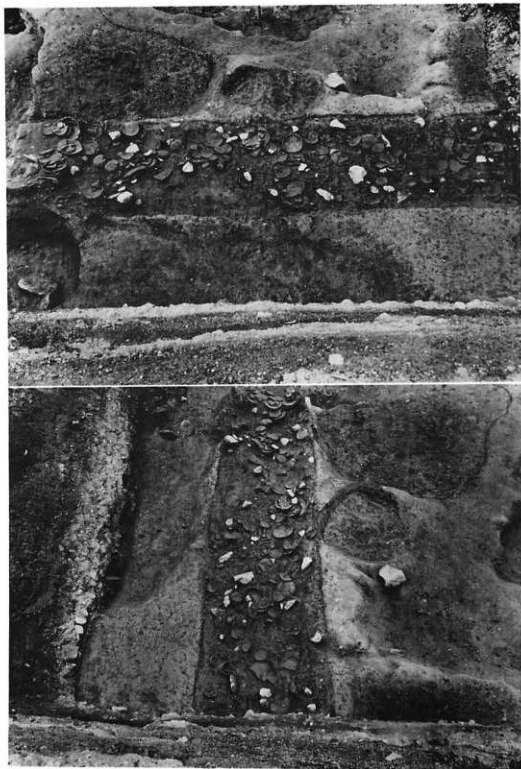
溝15馬頭骨出土状態(上：西より，下：部分)



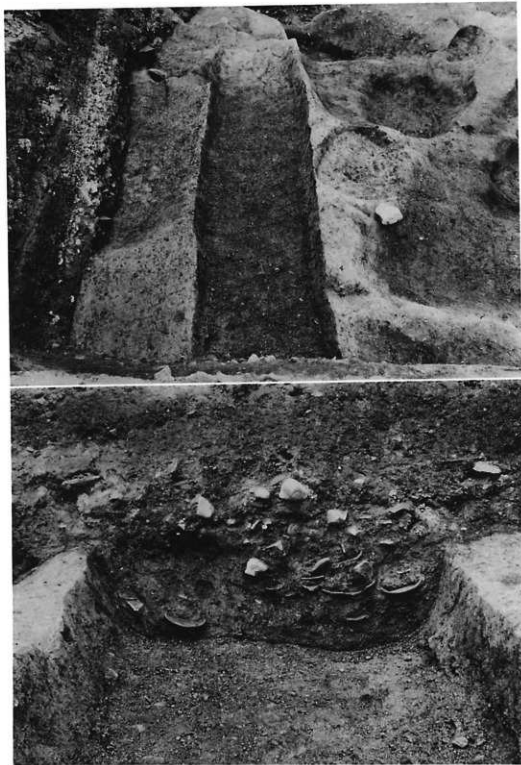
井戸 12(上:東より, 下:底部)



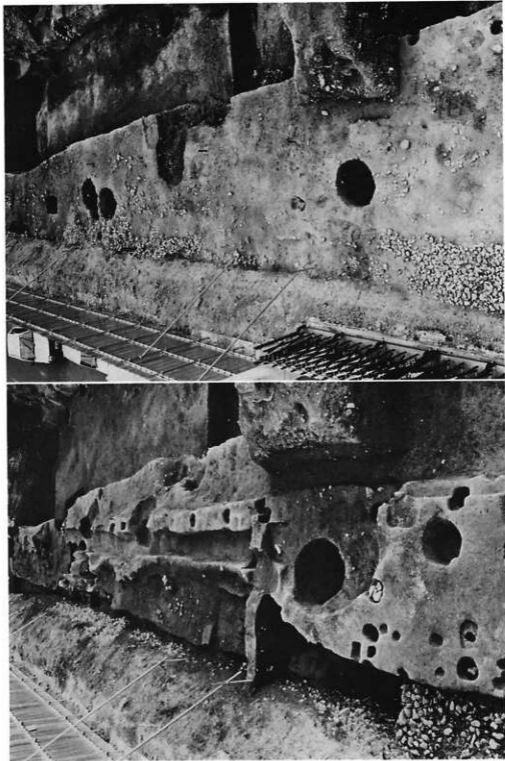
上：井戸12遺物出土状態(東より) 下：土坑68・溝12(東より)



溝7 遺物出土状態(上:北より,下:西より)



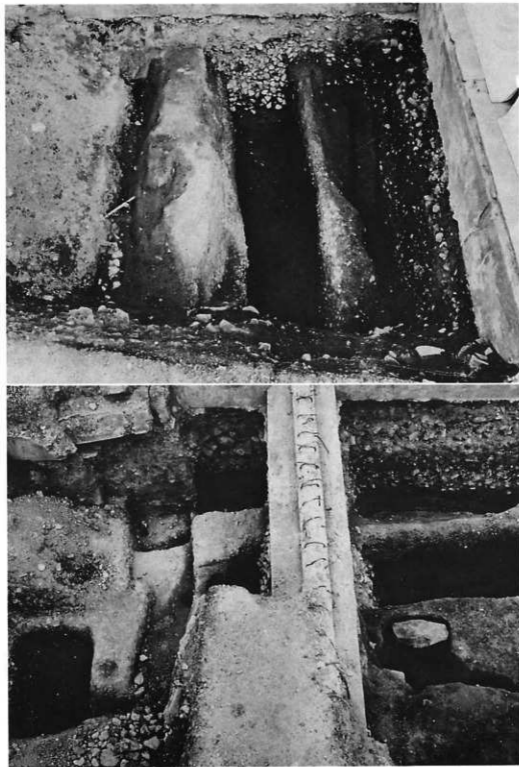
溝7(上:完掘状態,西より,下:土層断面,東より)



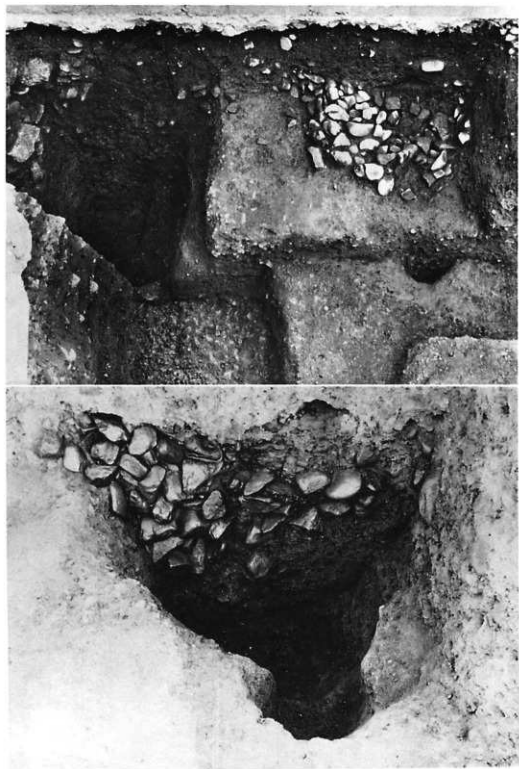
溝1南面(北より、右：検出状態、左：完備状態)



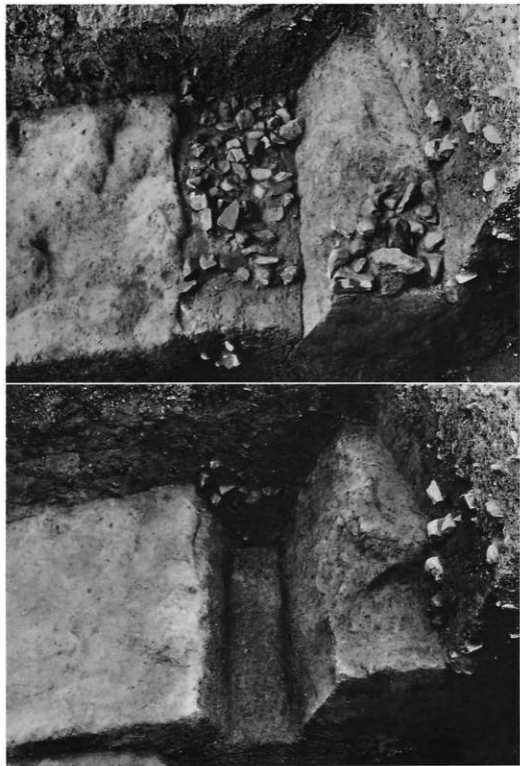
溝1検出状態(南より, 上: J・K-11区, 下: M-11区)



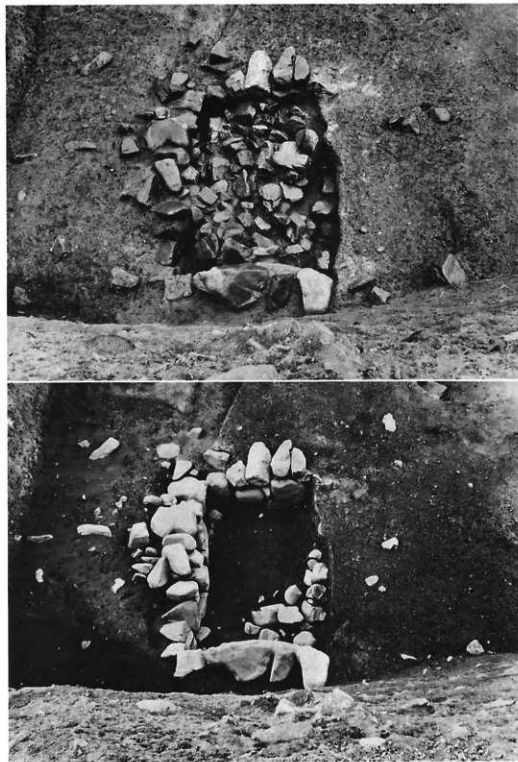
溝1北部完掘状態(上: J・K-11区, 南より, 下: J-11区, 西より)



溝1北端部(北より、上：検出状態、下：完掘状態)



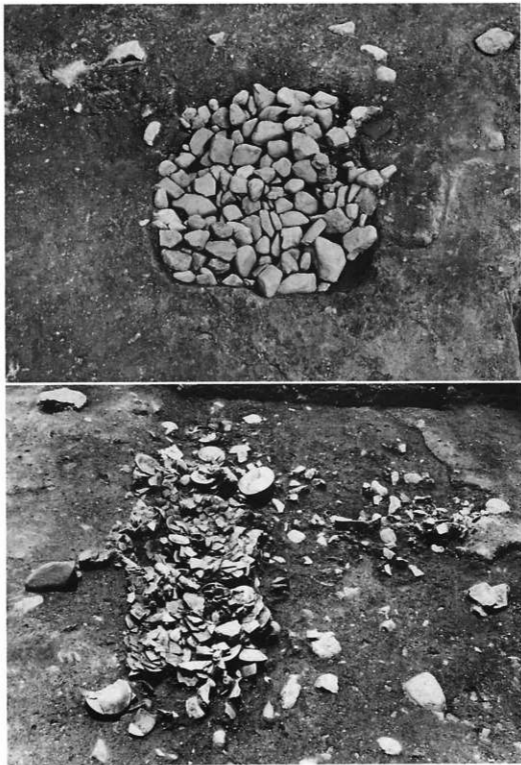
溝10(南より, 上: 検出状態, 下: 完掘状態)



石室 1(南より, 上: 検出状態, 下: 完掘状態)



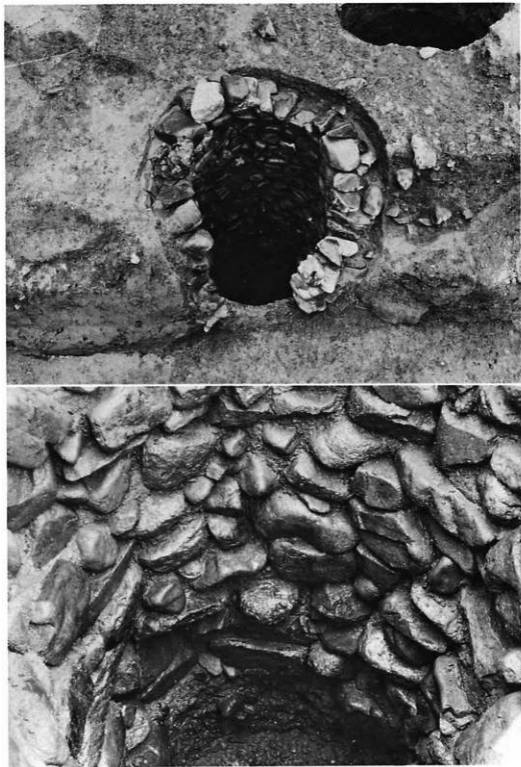
石室 2(上:南より,下:西より)



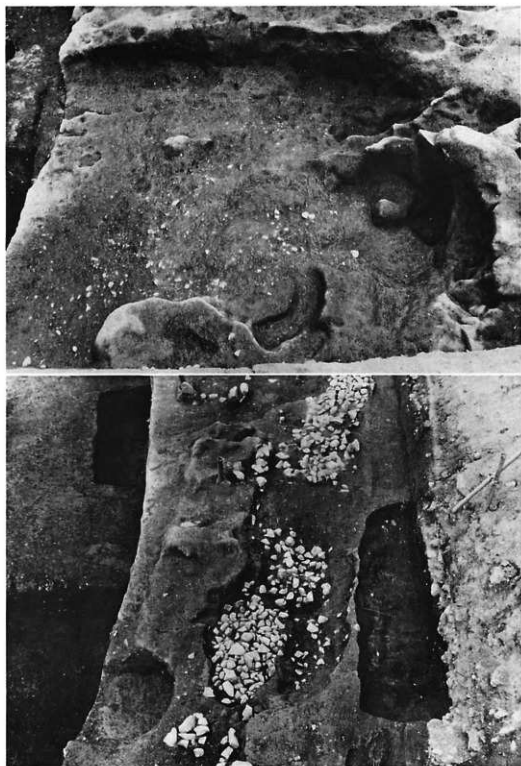
上：土坑80検出状態(西より) 下：土坑22遺物出土状態(北より)



井戸 11(上:南より, 下:底部)



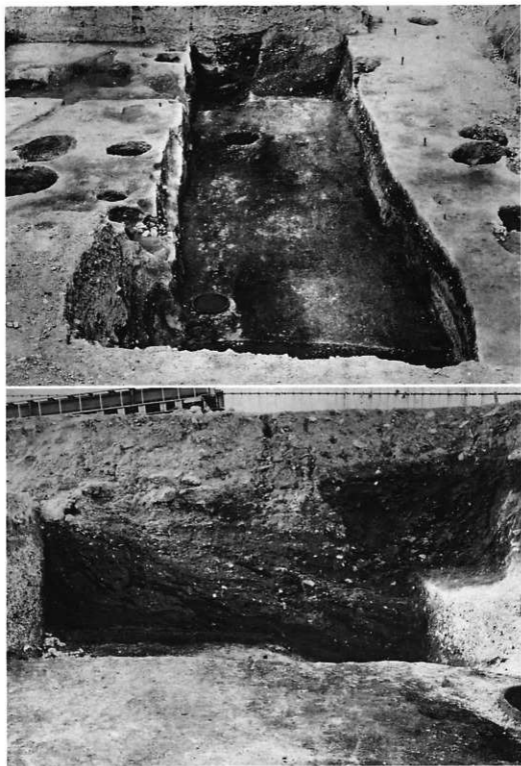
井戸 8 (上: 東より, 下: 内部)



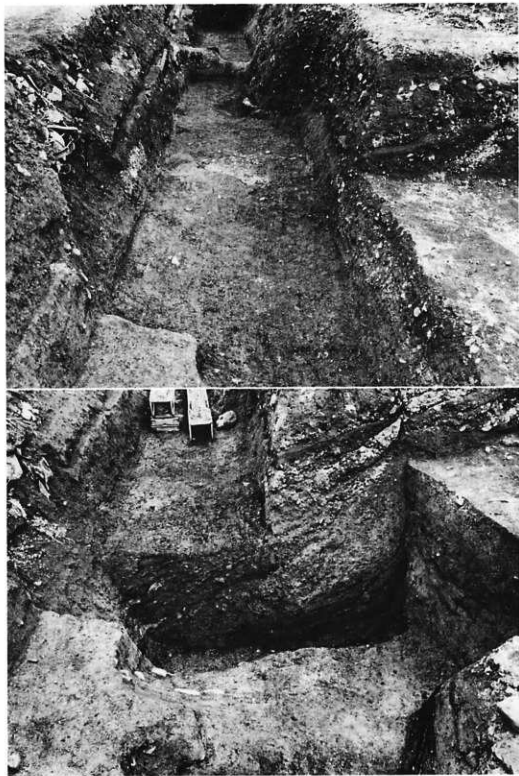
上：土坑201(北より) 下：南区南東部(南より)



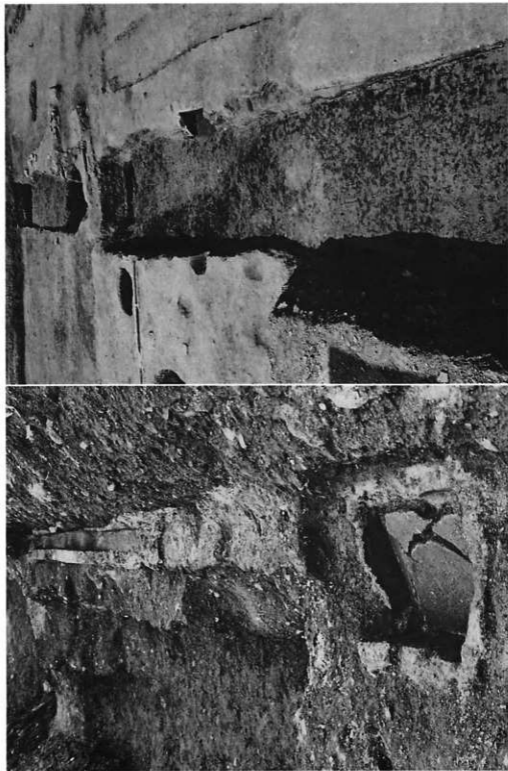
1-10・11区道構検出状態(上：南より，下：北より)



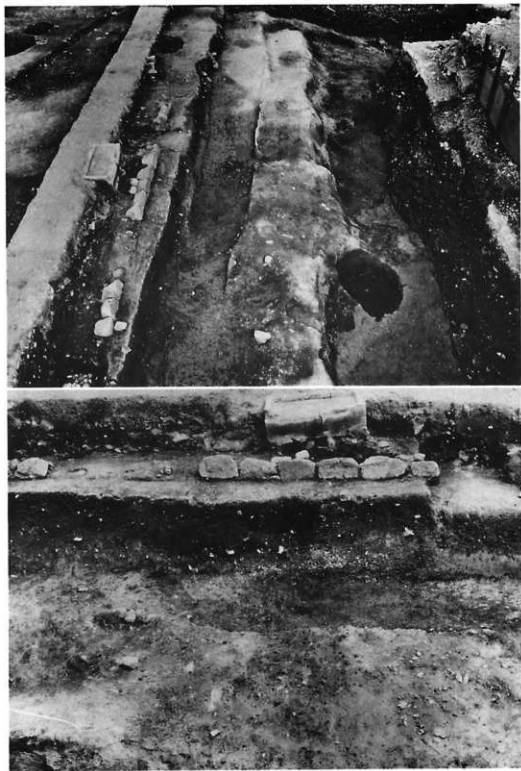
土坑 3(上:南より,下:南端土層断面)



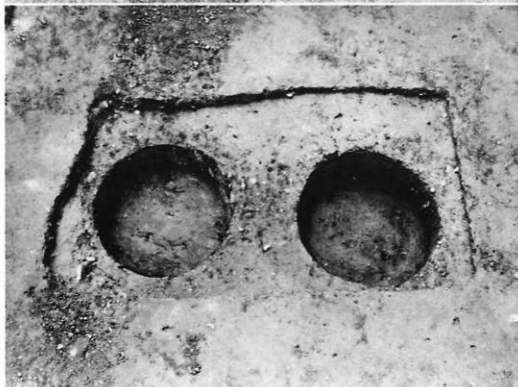
上：土坑3断面(M-10区，南より) 下：土坑1(南より)



右：土坑1・2，溝2（北より） 左：土坑40（南より）



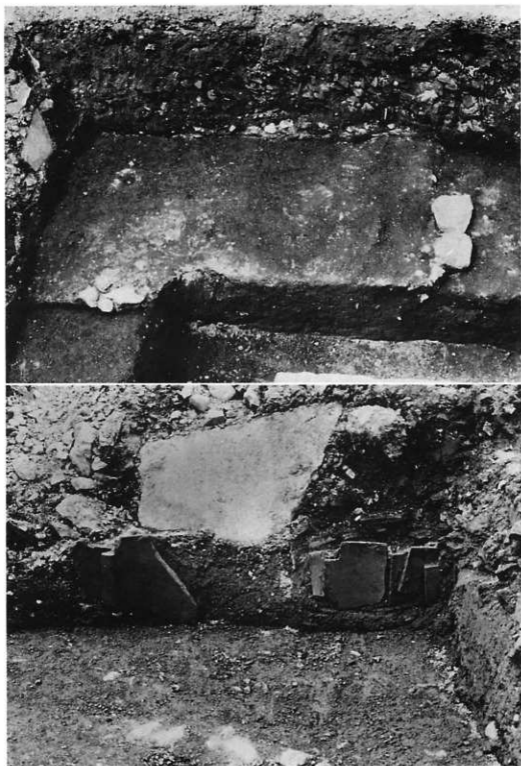
石垣1・溝6・8(上:西より,下:北より)



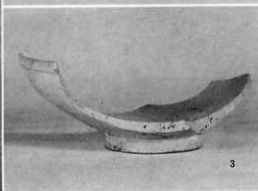
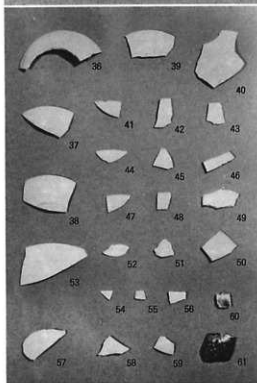
上：井戸 15(北より) 下：土坑 37(北より)



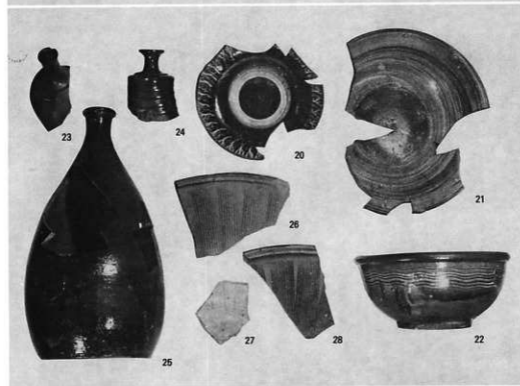
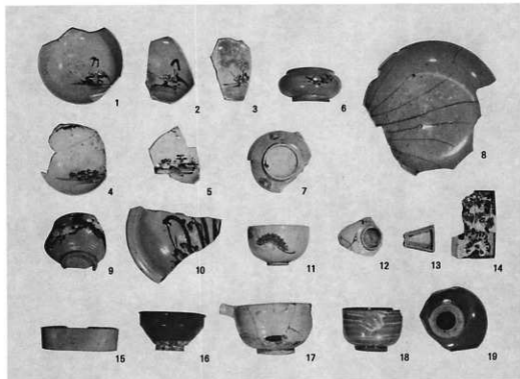
上：P・Q-9・10区道構検出状態(西より) 下：互相道構(北より)



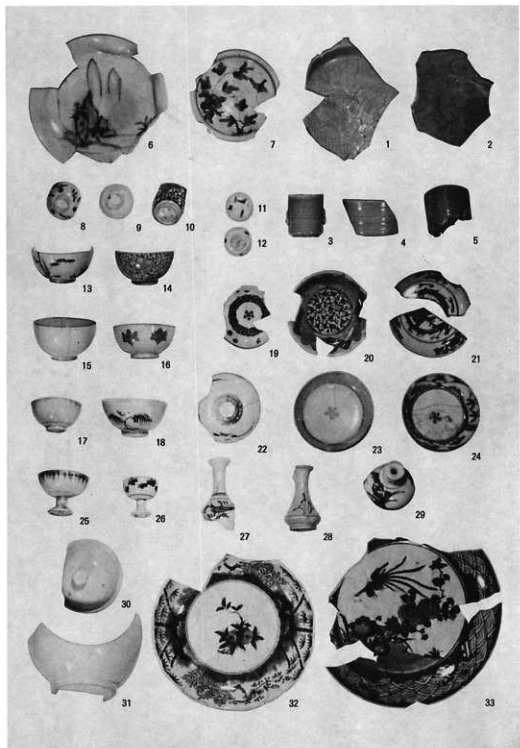
建物遺構(上：全景，南より，下：西端瓦組)



中国製白磁類



土坑3出土陶磁器類1



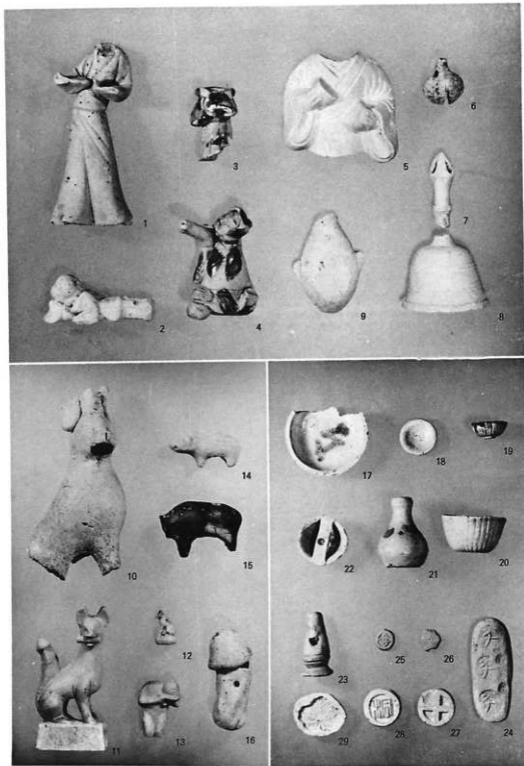
土坑3出土陶磁器類2



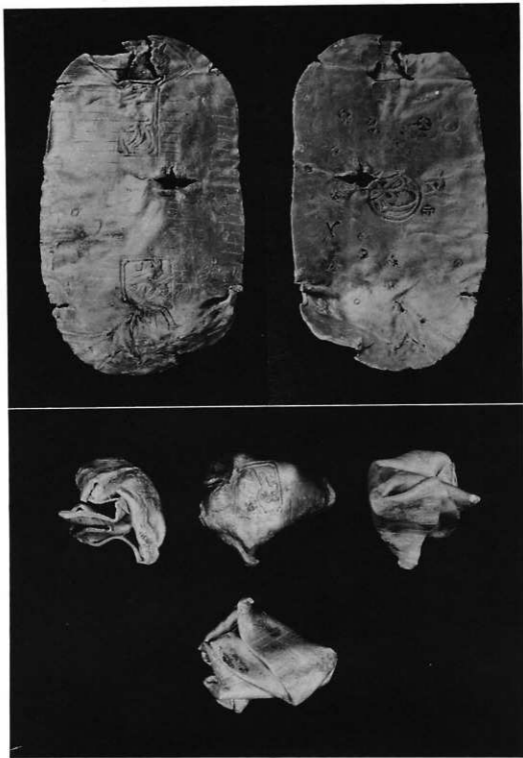
上：土坑3出土陶磁器類 下：土坑32出土陶磁器類



清6出土陶磁器類



土人形



清8出土小料

平安京跡研究調査報告 第18輯
高倉宮・曇華院跡第4次調査

発行日 昭和62年3月31日

編集 平安博物館考古学第4研究室
植山 茂・山田邦和

発行 財団法人古代学協会
604 京都市中京区三条高倉
TEL. 075(222)0888
板替京都 8-850番

制作 ビクトリー社
604 京都市中京区油小路通錦小路上ル
TEL. 075(221)1420

PALAEOLOGICAL STUDIES

IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. XVIII

THE FOURTH EXCAVATION
AT THE TAKAKURANOMIYA MANSION
AND THE DONGE-IN TEMPLE
IN THE CAPITAL HEIAN

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO MCMLXXXVII